

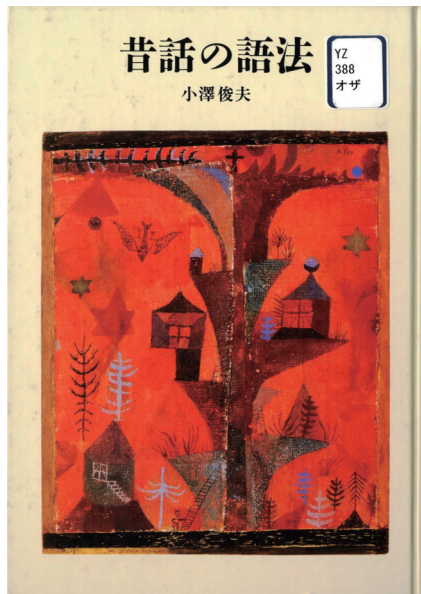
平成20年度国際子ども図書館
児童文学連続講座講義録



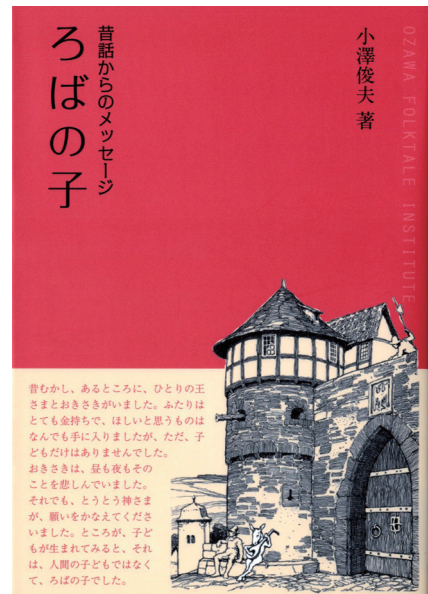
日本の昔話

2009年10月

国立国会図書館国際子ども図書館



『昔話の語法』小澤俊夫著 福音館書店、1999.10 (当館請求記号YU21-5) p.26参照



『ろばの子：昔話からのメッセージ』小澤俊夫著 小澤昔ばなし研究所、2007.9 (当館請求記号KE178-H44) p.26参照



住吉大社 (第三本宮 後方より) p.43参照



『河童よ、出てこい』武田正文、梶山俊夫絵 福音館書店、1998.4 (当館請求記号Y8-M99-35) p.67参照



ミャオ族の正装 p.87参照

平成20年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録

「日本の昔話」

目 次

刊行にあたって	齋藤友紀子	3
凡例		4
昔話の語りの様式	小澤 俊夫	6
昔話からのメッセージ	小澤 俊夫	17
日本の昔話の展開	大島 建彦	30
昔話の伝承の実像	武田 正	57
日本昔話のアジア的展望	君島 久子	71
参考図書紹介ー日本の昔話を知るためのブックリストー	石渡 裕子	89
講師略歴		131

「児童文学連続講座講義録」の刊行にあたって

必要な時期に、必要な本を、必要とする子どもに手渡すには、「子ども」と「本」、双方についての知識と愛情が不可欠です。国際子ども図書館では、全国の各種図書館等で児童サービスに従事している図書館員を対象に、国内外の児童書・児童文学に関する幅広い知識の涵養を目的として、「児童文学連続講座」を毎年開講しています。

第1回の平成16年度は「ファンタジーの誕生と発展」、平成17年度は「日本児童文学の流れ」、平成18年度は「絵本の愉しみーイギリス絵本の伝統に学ぶー」、平成19年度は「絵本の愉しみーアメリカ絵本の展開ー」をテーマとしました。

平成20年度の児童文学連続講座は、「日本の昔話」をテーマに、平成20年11月10日～11日に、国際子ども図書館のホールで開講しました。

小澤俊夫（総合監修）、大島建彦、武田正、君島久子という4人のすぐれた先達による講義は、時間的芸芸としての昔話の特徴、子どもの成長にとって昔話のもつ意味、昔話を元の形を壊さずに保存し再話する重要性、昔話の時代的変遷、日本及びアジアにおける伝承など、幅広い内容のものでしたが、昔話を織り交ぜながらの滋味溢れる語り口は、まるで囲炉裏端で昔話を聴いているような心持ちに私たちを誘い、時を忘れさせました。また、当館職員石渡裕子が、業務に役立つ参考図書類ー日本の昔話を知るためのブックリストーを紹介しました。

本書はその講義録です。紙面ではありますが、各講師の魅力的な語り口を味わっていただければと思います。講義で紹介された資料のリストを収録し、当館所蔵資料には、請求記号を付しておきました。

地方財政の悪化を受け、公共図書館を巡る状況は年々厳しさを増しています。「児童文学連続講座」はおかげさまで毎年好評を得ておりますが、長く職場を空けるのが困難との声が多いため、今回は日数を3日から2日に短縮し、時期も比較的行事の少ない11月にしたところ、募集人員をはるかに上回る応募がありました。場所の制約上、受講をお断りせざるを得なかった方々を始め、様々な事情で受講することができない方々のために、本講義録が少しでもお役に立てば幸いです。

末尾ながら、お忙しい中、快く講師をお引き受けいただき、本講座を実りあるものにするためにご尽力いただきました講師の皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成21年10月

国立国会図書館国際子ども図書館長

齋藤 友紀子

凡例

- 本書は、平成20年11月10日と11日の2日間にわたって国際子ども図書館で開催しました「国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って（総合テーマ：日本の昔話）」を元に編集した講義録です。
 - * 次ページの日程表もあわせてご参照ください。
- 講義当日に各講師が配布した「レジュメ」、「紹介資料リスト」もあわせて掲載しました。「レジュメ」は講義本文の前に、「紹介資料リスト」は講義本文の末尾に掲載しています。
- 「紹介資料リスト」は、講義の中で紹介された資料についてリスト化したものです。書誌事項は、原則として国立国会図書館の目録の表記を採用しました（所蔵資料を掲載しましたので、書誌事項は初版本とは異なる場合があります）。
 - * 所蔵のない資料の書誌事項については、総合目録ネットワークシステム等を参考にしました。
- 「紹介資料リスト」の「請求記号」の項には、国際子ども図書館の請求記号を記載しました。国際子ども図書館が所蔵しない場合は、国立国会図書館東京本館の請求記号を記載し、（本館）と付記しました（所蔵状況：平成21年5月現在）。
- 講師の肩書きは連続講座当時のものです。

平成20年度「国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って」
総合テーマ「日本の昔話」日程表

総合監修 小澤 俊夫（小澤昔ばなし研究所主宰）

○1日目 11月10日（月）

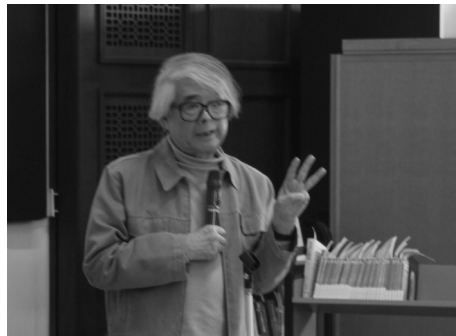
時 間	内 容	講 師
10時～10時20分	開会のあいさつ・諸連絡	
10時20分～12時	昔話の語りの様式	小澤 俊夫（小澤昔ばなし研究所主宰）
13時～13時20分	国際子ども図書館紹介DVD上映	
13時20分～15時	昔話からのメッセージ	小澤 俊夫
15時10分～16時	参考図書の紹介—日本の昔話を 知るためのブックリスト—	石渡 裕子 (国際子ども図書館資料情報課長)
16時～17時	研修生意見交換会	

○2日目 11月11日（火）

時 間	内 容	講 師
10時20分～12時	日本の昔話の展開	大島 建彦（東洋大学名誉教授）
13時～14時40分	昔話の伝承の実像	武田 正（山形短期大学名誉教授）
15時～16時40分	日本昔話のアジア的展望	君島 久子（国立民族学博物館名誉教授）
16時40分～17時	修了証書授与、閉会	

昔話の語りの様式

小澤 俊夫



昔話は口伝えされてきたために、独特の語りの様式を獲得してきました。実例によって解説します。

おはようございます。ご紹介いただいた小澤俊夫です。

初めに質問させていただきます。「昔話はどこにありますか」と質問したら、皆さんどうお答えになりますか。「国際子ども図書館に行けばあります」とか「CDの中にあります」「いろんな全集の中にあります」とか思うかもしれないけれどそうじゃないのですよ。

田舎におじいちゃん、おばあちゃんの昔話を聞きに行っている人間からすると、昔話が本当にあるのは、それが語られている時間の間だけなのです。昔話は語られている時間の間にだけ存在する。これが一番基本で、大事なことです。どうぞ覚えておいてください。

昔話は語られている間だけ存在する。つまり昔話は時間的文芸である、ということが出来ます。厳密な意味で時間的文芸です。もちろん書かれた創作的文芸もある程度は時間的文芸です。例えば200ページの本を読むのであれば時間がかかります。その中に書かれていることも時間の経過を語っています。しかし書かれた創作文学と昔話の根本的な違いはこういうことです。小説だったら200ページの本を読んでいて途中でこんがらがって分からなくなったらもう一度読み直すことができます。戻って読み直すこともできます。あるいは途中で止めてじっくり考えてみることもできます。昔話はできません。そこが違います。

昔話は始まったらすーっと行っちゃいます。待ってくれというわけにはいきません。そこが根

本的な違いです。昔話は時間的文芸だということも皆さん気が付いたと思うけれど、音楽も時間的な芸術です。ですから、音楽と昔話はとても似た性質を持っています。後で具体的にお話ししようと思っています。

音楽の場合は作曲家は最初から時間的文芸だと分かっていますから、作曲するときその時間の中で聞いてもらって分かりやすいように工夫をして作曲しています。それを作曲技法と言います。そういう技術を勉強して作曲しています。

昔話の語り手も同じなのです。昔話の語り手は田舎のおじいちゃんおばあちゃんがほとんどですから理論は知りません。しかし子どものころ毎晩のようにおじいちゃんやおばあちゃんから何回も何回も聞かされてきました。ですから自然に昔話の語り手の形を体得しています。そのときに聞いて楽しかったという思い出があります。それで、何十年かたった今、年寄りとして語っています。自然に作曲技法を体得しているわけです。

伝承文芸の場合、大事なのは今のことなのです。理屈で学んだのではなくて、自分が子どものころ楽しい思いをして聞いたその記憶、それがとても大事なことです。それが根本です。伝承文学とか口伝えとかいう言葉は皆さん散々聞いておられると思うのですが、具体的に考えてみてください。例えば、8歳の語り手がいたとします。その方は70年前は10歳の聞き手だったのです。これは確実なことです。具体的にはそういうことです。8歳の方は70年前は10歳の聞き手でした。伝承は決して、

抽象的なことではありません。具体的です。

そのときに聞いて、分かりやすかった、面白かった、怖かったという思い出があるから70年たった今語っているわけです。その間に大人になった経験とか、子どもを育てた経験とかいろいろなことが重なって今の形になるわけです。それに経験が積み重なります。それはもちろんです。そのことはまた後で、お話しします。それがメッセージとなって表れてくると思います。

今日の1時間目は昔話の様式を中心にお話ししますので、内容のメッセージのほうは後回しにしまして、まず様式、語り口のほうを聞いていただこうと思います。

昔話は単純明快

先ほど申しましたように昔話は耳で聞かされてきました。そのときに独特な文体を獲得しています。それは何かと言いますと、一言で言えば単純明快、シンプルでクリアな文体である、ということです。ただ、文体というと書かれた文章を想像されるのでなるべく文体という言葉は使いません。語り口という言い方をします。語り口というのは分かったような分からないような言葉ですけど、あえてそう言っています。要するに言葉による表現です。

先ほど言ったように口伝の昔話の語り口は単純明快である、というのが基本です。なぜそういうことをわざわざ言っているかということ、昔話を子どもに聞かせるために、本にしたり絵本にしたり始終行われているわけですけど、どうも文学化されているようです。目で見える文学に非常に近づいています。それは昔話からいえば本質から外れることになります。それが気になるのでわざわざ言っているわけです。

昔話は子どもに聞かせることが多いです。ですから子どもの分野のものと考えられています。それで、児童文学の一分野に考えられているかもしれませんが、そうではありません。昔話は児童文学ではない。昔話は昔話です。そこのところをどうぞ気を付けてください。もちろん子どもに聞かせることが多いですから児童文学に近いですが、成り立ちとしては児童文学ではないということで

す。

では、何だということになるのですが、それは先ほど言った口伝で、単純明快な語り口です。荒っぽいです。ごつごつした文芸です。けっして、滑らかな文芸ではありません。

そもそも、昔話は耳で聞かれて単純明快なものだし、そんなに文芸的に美化されたものではない、近代文学的に構成されたものではないと言いたいのです。

昔話が大事なのは近代文学よりもっと前の文学だからなのです。それで、耳で聞かれ、ごつごつした面白さ、美しさ、そういうものを大事にしようという気持ちがあるので、一生懸命言っているわけです。

今日は、その単純明快な文体は具体的にはどうなのだ、ということになりますので、一つ語りますので聞いてみてください。宮城県の登米郡というところで、青木のゑさんが語られた「馬方山姥^{うまかたやま}」の話の共通語版です。こんな話です。

馬方山姥

昔、ある村に一人の馬方がありました。ある日のこと、浜へ行って魚をたくさん仕入れて馬の背に振り分けに積んで峠道を帰ってきた。日が暮れてあたりが暗くなると、松の木の陰から山姥が飛び出してきて、「こら待て、その馬の片荷置いていけ。置かなきゃお前を取って食うぞ」と言うもんで、馬方、馬の片荷を一つ後ろへぶん投げて、馬を引いて、ワラワラ峠の道を逃げて行った。したれば、その山姥、片荷の魚をバリバリ食っちゃうと、すぐまた追いかけてきて、「こら待て、その馬の片荷、も一つ置いていけ。置かなきゃお前を取って食うぞ」と言うもんで、残りの片荷も後ろにぶん投げて、裸馬に乗ってワラワラ峠の道を逃げて行った。したれば、その山姥、魚をバリバリ食っちゃうとすぐまた追いかけてきて、「こら待て、その馬の足1本置いていけ。置かなきゃお前を取って食うぞ」と言うもんで、馬の足を1本ぶった切って、「それっ」と後ろへ投げて、3本足の馬に乗ってガッタガッタガッタと、峠の道を逃げて行った。したれば山姥、その馬の足もバリバリ食っちゃうとすぐまた追いかけてきて、「こ

ら待て、その馬の足もう1本置いていけ。置かなきゃお前を取って食うぞ」と言うもんで、馬方、馬の足もう1本ぶった切って「それっ」と後ろへ投げて2本足の馬に乗ってガッタガッタガッタガッタと峠の道を逃げて行った。したればその山姥、その馬の足もバリバリ食っちまうと、また追いかけてきて「こら待て、その馬の足もう1本置いていけ。置かなきゃお前を取って食うぞ」と言うもんで、馬方、とても逃げおおせるもんじゃねえと思って、馬を丸ごとそこに置いて、やぶをこいで、ワラワラ山の中へ逃げて行った。したれば、池があってその池のほとりに木があったもんで、木によじ登って上でじっと隠れていた。山姥、馬にまたがると馬をバリバリ食っちまうと、すぐまた追いかけてきた。池のほとりまで来ると、その池の中に馬方の姿が見えたので、「お前、そんなところに隠れてたか、隠れたって駄目だぞ」と言って、ドボンと飛び込んだ。それを見て馬方、木からするする降りてきて、またやぶをこいで、ワラワラ山の中へ逃げて行った。したら、うまいことに小屋が1軒あったので、これはよい隠れ家だと思って小屋へ飛び込んで、はりに上がって一休みしていた。しばらく休んでいると、なんとさっきの山姥がずぶぬれになって入ってきて、「お寒い寒い、今日は魚一杯食って、馬丸ごと食って腹一杯になった。どれ甘酒でも沸かして飲むか」と言って、囲炉裏に大きな鍋で甘酒を沸かしだした。そして、自分はくるっと背中を向けて、背中あぶりを始めた。甘酒がちょうど沸いてきたころ、山姥はクランクランと居眠りを始めた。それを見てはりの上の馬方、屋根のわらを1本抜いて甘酒をスッパスッパと吸っちゃった。したらば山姥目を覚まして、「おれの甘酒飲んだやつはだれだ」と叫んだ。はりの上の馬方、ちっちゃい声で、「火の神、火の神」と言ったれば、「火の神さまが飲んだんじゃしょうがない。どれ餅でも焼いて食うか」と言って餅を三つ出してきて、火にのつけて、自分はまたくるっと背中向けて、背中あぶりを始めた。餅が焼けてプーと膨らんできたころ、山姥またクランクランと居眠りを始めた。それを見てはりの上の馬方、さっきのわらで餅をツクンと刺しては食べ、ツクンと刺しては食べ、三

つとも食べちゃった。したらば山姥目を覚まして、「おれの焼餅を食ったやつはだれだ」と叫んだ。はりの上の馬方、ちっちゃい声で、「火の神、火の神」と言ったれば、「火の神様が食ったんじゃない。どれ寝ることにするか。木のからとに入って寝るか、石のからとに入って寝るか」、独り言を言うから、はりの上の馬方、「木のからと、木のからと」と言ったれば、「火の神様がおっしゃるんじゃないあ木のからとにするか」と言って木のからとに入った。それを見て馬方、はりから下りてきて、湯を沸かして、もみぎりを持ってきて、木のからとにキリキリと穴を開けだした。山姥、「明日は天気だな、きりきり虫が鳴いてらあ」と言ったが、馬方は構わず、キリキリと穴を開けて、穴が開くと、熱湯を持ってきて、その穴から熱湯を注ぎ込んだ。山姥、初めのうちは、「このネズミ野郎、しょんべんなんかひっかけやがって」とか言っていたけれど、構わず熱湯を注ぎ込んでいったら、しまいには山姥、「あっついあっつい助けてくれ」と叫んだけれども、馬方、「おれの魚と大事な馬を食った敵だ^{かたき}」と言って熱湯をドードーと注ぎ込んだので、山姥、とうとう死んでしまったと。こんで、えんつこもんつこ、さけた。

と言って、宮城県では終わるのです。

昔話の発端句と結末句

「えんつこもんつこ、さけた」は結末句と呼んでいます。終わりの言葉です。というのは、昔話と言えはかっこよいけれど、うそこの話、架空の話ですね。だから話が終わった後、語り手が責任追及されては困りますので、ここまではおとぎ話ですよ、私の責任ではありませんと言ってガードを張るのです。そういう意味です。

地域によっていろいろです。岩手県に行くと「どっとはれえ」、秋田県は「どっぺんぼらりの、ぶ」、新潟県「これでいちごさけた」。南の方に行くと岡山では「しゃんしゃん」なんて言ったりしますね。いろいろ終わりが変わります。いずれにしる、「ここまではおとぎ話ですよ。私の責任じゃありませんよ」ということです。

世界的にもこれはあります。どの民族も伝説と

昔話は持っているものですが、昔話の場合はほとんどこれが付きます。うその話はこれで終わりですよというあいさつをします。ヨーロッパでもいろいろタイプがあるのですが、特に好まれるのは「王子と王女はめでたく結婚しました。死んでいなければ、まだ生きているでしょう」。そういうことを言って笑わせてぱっと終わる、というものです。

ついでお話ししておきますが、昔話は最初に「昔むかしあるところにひとりの馬方がありました」という言い方をします。あるいは有名なのは「昔むかしおじいさんとおばあさんがありました」と言いますね。あれは、これから始まる話ほうその話ですよ、という宣言なのです。ということは、時代と場所と人物が不特定です。「昔むかし」というだけでいつだか分かりません。「あるところに」ですから村の名前も分かりません。個人の名前も分かりません。昔話は冒頭の発端句で時代と場所と人物を不特定に語ります。不特定に語るということは、「これから始まる話ほうそこの話ですよ。どうぞ信じないでくださいね」と言って始めているのです。そして、最後にここまでがうそこの話でした、と言うわけです。

伝説はそれを付けません。伝説は昔話と混同されがちですが、伝説は全く別物です。伝説では、明和3年3月10日、小川村の村長の娘、おたまが、というようなことを言います。ということは時代と場所と人物が特定されています。ですから、「これは村の本当の歴史だよ。信じてくださいよ」と言って伝えているのです。伝説は特定して語る。驚くべき大きな事件を語りますけれど、「これは特別なことだけれど村の歴史なんだよ。信じてくれよ」と言って伝えています。だから柳田国男先生は、「伝説は信じられんことを欲す」と言っておられます。信じてもらえるかどうか分かりません。時代によって、人によって違うでしょうから。だが伝説は「信じてくれよ」といって伝えているのです。そこが昔話と根本的に違います。ですから、伝説には最後に結末句は付きません。発端句も付きません。いきなり時代やなんかを特定して語って終わります。

昔話は孤立的に語る

「馬方山姥」の冒頭のところはどういう感じがしましたか。馬方が一人で馬を1頭引いて峠の道を帰ってきた。ちょっと寂しい感じはありませんでしたか。場面を思い浮かべた方は気が付いたでしょうか、ちょっと寂しいです。昔話の冒頭はちょっと寂しいことが多いです。それはなぜかという、主人公が一人で登場するからです。昔話は主人公を孤立的に語ります。主人公ばかりでなく、山姥も一人でした。主人公に対して敵も一人でした。そして、最後、よい隠れ家があったと飛び込んだ小屋がありました。あの小屋も1軒でした。あれは大道具です。要するに昔話は主人公やその敵対者、大道具、小道具を孤立的に語るという根本的な性質を持っています。なぜそういうふうに語るかという、最初にお話ししたとおり、耳で聞くのですから一人で登場してくれないと把握できません。そして、子どもに話して聞かせる教育的な大事な意味は、お話は言葉で耳に入ります。それを聞いている子どもは頭の中で絵に描くのです。想像します。今も馬方の姿を何となく想像したのではありませんか。言葉を絵に変換しているのです。その力を養うことがとても大事なことなのです。

言葉で聞いたものを絵に変換する力、それが教育学の方では、よく子どもの空想力を養うとか、想像力を養うという言い方になるのですが具体的に言えば今のことです。

そのとき馬方が一人で登場するから、子どもたちは馬方の姿を想像できるわけです。もしいきなり馬方が9人ぞろぞろ現れたら絵に描いている暇がないでしょう。それでは駄目なのです。一人で登場するから絵に描けるわけです。語りの方はそれを配慮しています。例はいくらでもあります。「浦島太郎」なんかもそうです。亀の背中に乗って竜宮城へ行きました。浦島太郎一人で行きます。亀は1匹です。行ったら乙姫さん一人です。父親の神さまが現れることはありますけれど、すぐ引っ込みます。そうすると乙姫と浦島太郎の1対1の場面になります。昔話の場面は常に1対1の場面で構成されるという大事な法則があります。1対1の法則と言います。

一番クリアで、簡単です。はっきり場面が見えます。それが大事なのです。例を挙げると切りがないのですが、例えば「白雪姫」を見てみます。白雪姫は一人で逃げていきます。孤立的です。行ったら小屋が1軒ありました。小人の小屋が1軒です。お隣さんがあったという話は聞いたことがありません。そこに7人の小人がいます。だから1対7じゃないかと思われるかもしれませんがそうじゃないのです。全訳で読んでみてください。7人の小人は常に一緒に行動しています。朝一緒に起きて一緒に出掛けて行き、一緒に帰ってきて、一緒に食事して、一緒に寝ます。単位としては1なのです。1対7じゃなくて、1対1なのです。個別的な行動をしていません。ディズニーはそれを間違いました。ディズニーはねぼすけとかおこりんぼうとか名前を付けてしまいました。あれは間違いです。名前はないのです。ディズニーは非常に間違いが多いです。「ヘンゼルとグレーテル」は二人きりです。あれは二人で孤立的です。だから「ヘンゼルとグレーテル」の冒頭は何となく寂しいです。三日三晩さまよっていたらお菓子の家がありました。1軒の家です。そこに魔女は一人で住んでいます。さっきの「馬方山姥」のシチュエーションと同じではありませんか。「馬方山姥」もよい隠れ家と思った家は1軒でした。そこに、山姥が一人いました。同じ場面です。「ヘンゼルとグレーテル」の場合、お菓子の家に魔女が一人でいるから、怖いのです。あのお菓子の家に魔女が10人で共同生活をしていました、と言うと魔女の老人ホームのような雰囲気になってしまいます。怖くなくなります。それじゃ駄目なのです。一人だから怖いのです。さっき、シンプルでクリアだと言いましたが、クリアだから怖いのです。そういう工夫がされています。

この孤立的は分かりやすいからもうこれでよいですね。昔話を読むとき気を付けてみてください。

極端であるが実態を語らない昔話

さっきの「馬方山姥」に戻りますけれど、あの山姥はものすごい大食漢だと思いませんか。片荷の魚みんな食べて、馬の足1本食って、もう1本食って、馬の体全部食ってますから、ものすごい

大食漢です。昔話は極端に語るのが好きである。これは分かりやすいですね。極端な話はいくらかでもあります。人食いの大男なんていうのはすごくでかい。日本でも鬼なんていうのはすごく大きいし、鬼がだまされて、豆粒になったりします。そういう極端が好きです。それが色になって現れると原色になります。

だから、白雪姫は白、赤、黒と色は常に原色です。中間色はほとんどありません。極端が好きだから色の場合は原色になるということです。白、赤、黒は日本でも同じですね。赤鬼、黒鬼、青鬼と言います。エンジ鬼など中間色は聞きません。昔話の再話で中間色が出てきたら、まずだれかが手を入れたと思ってよいです。それは児童文学風にきれいにされているのです。

見落とされがちなのは、昔話は極端に語るけれど、その実態は語らない、という点です。よく誤解されています。実態を語らない、あるいは中身を抜くといってもよいですね。どういうことかという、さっきの山姥は馬の足をバリバリ食ったと言っていますがどうやって食ったかは言いません。皮をむいたのか、むかなかったのか、刻んだのか、かぶりついたのか、実態的に語りません。そういう特徴があります。それから馬方が馬の足を1本ぶった切って後ろに放り投げたところ。どうやってぶった切ったかは言いません。いとも簡単に切れています。しかも血が流れていません。馬が苦しんだとも言いません。それを実態を抜いて語ると言います。

あれを実態を抜かないで語ったらどうなると思いますか。すさまじい場面です。馬方はなたで何度も何度もひっぱたいて、馬は苦しんで七転八倒し、血は辺りに飛び散り、馬方は返り血で真赤になりました、という話になります。そうになったら昔話ではありません。これは講談です。日本の話芸として、落語とか、漫才とかと並んで講談があります。講談はそういう場面を平気で語るところがあります。それで人を引き付けるのです。昔話はそれで人を引き付けようと思っていません。出来事だけ語るのです。そして、基本的な動詞だけで語っていました。馬の足を切る、という動詞、バリバリ食うという一番基本の動詞、それに第2

次、第3次の動詞をつけていくとだんだん現実
に近づきます。切るというのに、大きく切ってそれ
を細かく切り刻んでそれをいためてという台所
仕事になります。昔話ではそれはやりません。こ
こが一番誤解されています。昔話の中では相手の
首を切っちゃった、自分の首が切られた、腕が切
られた、というのはたくさん出てきます。日本で
もグリム童話でも出てきます。で、最近では昔話
は残酷だ、余り子どもに聞かせないほうがよい、
あるいは、残酷な部分を取って語りましょう、と
いう傾向にあります。それは誤解です。全く間違
い。「馬方山姥」で、馬が足を切られたりす
ると、子どもは怖いなと思って聞いています。そ
れで、最後はどうなるの、と思って聞いています。

昔話は幸せに終わる

子どもに語りをしたときの反応はどうでしょう
か。「で、どうなるの。で、どうなったの」。あの
気持ちです。子どもは自分を主人公と同一化して
聞いています。そういう子どもにとって、主人公
が最後にどうなるのかが心配です。最後に幸せに
なれば万歳です。途中でどういう怖いことがあ
っても最後に幸せになったら万歳です。そこは受け
取り方が大人とは違います。冷たいけれどわき役
はどうでもよいのです。自分が幸せになればよい
のです。でもそれを利己主義的だと言わないでく
ださい。それは子どもの人格形成にはまず必要な
ことなのです。では、最後の幸せは何だという疑
問が必ず出てきますね。これは世界中の昔話を調
べたのですが、最後の幸せは三つに集約されまし
た。一つは主人公の身の安全、一つは富の獲得、
一つは結婚による幸せ、この三つです。もちろん、
富と結婚というように複合もあります。そのゴール
の幸せに行く途中の試練として、残酷な出来事
がたくさん起きるのです。

ところが、問題なのは、大人はなかなか途中の
残酷な出来事を受け入れられません。自分を主人
公に重ね合わせて聞いていません。非常に客観的
に見ているのです。そして事件が起きるとまあ残
酷な、まあかわいそうな、とそこで引っ掛かりま
す。そこが、子どもと大人の感受性の違いです。
子どもは途中での試練のすごさは気にしません。

しかし、大人がわきで、まあかわいそう、こんな
ひどいことしちゃってと言うと子どもは受け入れ
てしまい、これはかわいそうなことなんだと思っ
てしまい、そこでつまずいてしまうのです。とい
うことは子どもの感受性を大人が邪魔しているの
です。大人の感受性を押し付けているのです。私
はよいことだとは思いません。よく、こんな残酷
なことは子どもにはよくないのではないか、そし
て残酷なことに子どもは平気になってしまうので
はないかと思われるようですが、そんなことはあ
りません。日本人も世界中の子どもも残酷な話を
聞いてきました。それで、日本人、世界の人たちが
残酷になったとは思えないでしょう。残酷なこ
とがあるとしたら別な理由ですよ。そういうお話
のためではないと思います。

あるお母さんたちの会で講演したとき、最後に
質問が出ました。「私は最近子どもに『三匹の子
ブタ』を読んで聞かせた。大変残酷な話なので
ね」と言われたので、「お母さんは子どものころ
読んだことがありますか」と聞いたところ、お母
さんは「読んだけれどそのころは全然気が付きま
せんでした」とおっしゃったので、「じゃあ、よ
いじゃありませんか」、と言ったのです。子ども
のころは気が付いていないのです。それが子ども
の受け取り方です。そのお母さんも子どものとき
には「最後に主人公はどうなるかな」と思って聞
いていたのです。最後におおかみを食っちゃっ
たので、「おお万歳」と思ったと思います。その話
を聞いて育ったお母さんが残酷なお母さんにな
ったかというところとそうじゃないですよ。人間の感受性
の変化に気が付かなければいけません。子ども
の感受性を大事にしてやらなければと思います。大
人が大人の感受性を押し付けないこと。それが大
切だと思います。

昔話は極端に語るけれどもリアルには語らな
い、実態を抜いて語るというのが全く誤解されて
いるので、今ではいろいろな間違いが起きていま
す。一番ひどいのは、何年前にはやった『本当
は恐ろしいグリム童話』です。あれは完全にデタ
ラメの本です。若い女性の読者が多かったそう
ですが、読者の多くはグリムが本当にあのように書
いたのだと思っているそうです。食物についてあ

んなことをしたら偽装表示で問題になるでしょう。

昔話は、同じ場面は同じ言葉で繰り返す

さっきの「馬方山姥」に戻りますが、同じ言葉が何回も出てきたことに気付かれたでしょうか。「こら待て、その馬の片荷一つ置いてけ」、これを5回言っています。昔話は同じ場面は同じ言葉で語るという大事な性質を持っています。なぜそんなことをやるかという、大人でも子どもでも同じですが、耳で聞きますから、同じ場面は同じ言葉で言ってくれるのが一番分かりやすいのです。そういう配慮です。音楽を思い出してください。どんな音楽でも同じメロディーが2度出てこない音楽はありません。ロックだろうが演歌だろうがクラシックだろうがわらべ歌だろうが、同じメロディーが2度出てこない音楽はありません。それは時間的芸術だからです。分かりやすくするために同じ場面を繰り返すというのはだれでも分かるので説明の必要はありませんね。しかし、私ももっと大事な意味があると思います。子どものことを思い出してください。子どもは自分の気に入った本があると何回も読んでくれと言います。あの気持ちです。気に入った毛布があればその毛布がなければ寝られないとか、この人形を抱いてないと寝られないとか、いくらでもあります。子どもは「もう知っているものと出会いたがっている」と言えます。

子どもはこの世にデビューして間がありません。ですから知らないものがたくさんあります。食べ物も知らない。絵本も知らない。だから好奇心に満ちています。未知への好奇心でいろんなことをやってみます。でも、そういう子どもも一方ではいつものお父さんお母さんの声で、散々知っている絵本を読んでもらって安心する気持ちというものがあります。

それは、もう知っているものと出会った喜びです。一方では未知への好奇心の喜びがあります。一方では、もう知っているものと再会した喜びがあります。この二つの喜びは子どもの基本的な喜びです。人間は大人になっても同じでそのバランスの中で生きているのです。子どもが成長すると

言いますがそれは未知の世界へ入ることで、今までハイハイしかできなかったのが2本足で立って歩けるようになったのは未知の世界へ入ることで。今までテーブルの上のものが見られなかったのが大きくなって見えるようになったのは未知の世界へ入るわけです。それは喜びでもあるが不安もあります。そのとき支えが必要です。その支えが何かというと、もう知っているものとまた出会うことです。自分のわずかな人生だけでもその短い人生の中で出会ったものにもう一回触って自分の人生を確かめて、また未知の世界へ入っていくということじゃないでしょうか。

子どもの成長というのは電車のように一直線には前に行きません。行ったり帰ったりします。子どもがもう知っている絵本をもう一度聞きたがる気持ちはとても大事だと思います。魂の安定した成長のために大事だと思います。子どもが欲しがる間は何度でも同じ本を読んでやってください。

同じ場面は同じ言葉で繰り返すということが大事だとお話ししたのですが、そのことが一番きれいに表れるのが、昔話では3回の繰り返しです。昔話は3回の繰り返しをほとんど同じ言葉で語ると言えます。その一番きれいな例は「白雪姫」です。「白雪姫」は3回殺されたことはご存じですね。ディズニーは1回にしていますけれど。

女王は白雪姫を殺したつもりになっていました。鏡を見たらまだ生きてることが分かった。怒って、行商人に変装してきれいなひもを売りに行きます。白雪姫にあなたの胸を飾ってやるよと言って、白雪姫の胸をぎゅっと絞めます。窒息死して、ぼったり倒れます。で、女王は帰った。夕方になって小人たちが山の仕事から帰ってみると白雪姫が倒れていた。胸がひもで縛られていた。で、そのひもを切ってやったら生き返った。小人たちはその行商人は継母に違いないからもう買ってはいけないと言い、次の日も出掛けました。そこへ女王が一人で来ます。孤立した二人による1対1の場面です。2度目は毒を塗ったくしを持ってきました。きれいなくしなので、すぐに買ってしまいました。女王が白雪姫の髪をすいてやると白雪姫はぼったり倒れました。夕方小人たちが戻ってくるとまた倒れていた。それで、そのくし

を抜いてやったら生き返った。小人たちはもう買ってはいけなくと厳しく言い、翌日小人たちはまた出掛けました。女王は3回目に赤いリングを持ってきて、白雪姫はその赤いリングを食べて倒れました。小人たちは山から帰ってまた倒れている白雪姫を見て、いろいろ探してみましたが何も見つかりません。白雪姫はとうとう生き返りませんでした。けれどもその死顔が余りにも美しいので土の中に埋める気にはならず、ガラスの棺に寝かせました。そして、山の上に安置し7人の小人が交代で見張りをしながら泣いていました。ある日のこと王子が通りかかり、その死に顔を見、愛を感じて、ガラスの棺ごともらい受けます。召使が棺をかついで山を下って行くときに、木の切り株に足を引っ掛けてガタンと揺れました。揺れたとたんにもどから毒リングが外れ生き返ったのです。そして、宮殿に帰って結婚したという話です。これがオリジナルです。ディズニーはこのところで、もどからリングが外れて生き返ったというのが理解できなかったのでしょう。余りにも馬鹿らしいと思ったのでしょう。それで、王子のキスによってと変えたのです。喉からりんごがはずれて生き返ったという方がはるかに昔話的です。しかも、200年たった今、同じ語り口が日本にもあるということを見つけています。

図形的に語る

今の白雪姫が死んで生き返ったところを説明します。1回目、胸がひもで縛られていた。そのひもを切ったら生き返った。ということは窒息してなかったということです。ではどうして死んだのか、どうして生き返ったかという問題が生じます。それは、白雪姫の美しい姿体をひもが外側で邪魔していたのです。その邪魔なひもをプチッと切ったら、元の美しい姿が回復して生き返った。元の姿が大事なのです。2度目は白雪姫の美しい姿をくしが図形として邪魔していたのです。その邪魔な図形を取って、白雪姫の元の姿が回復したら生き返ったということです。元の姿が問題なのです。この姿を図形に置き換えてみてください。立体的なものではなく平らなものと考えてください。これを図形的に語ると言います。3度目は毒

リングが引っ掛かかっていた。それがポロッと外れて、もどかの元の図形が回復しました。そうしたら生き返りました。ここでも元の図形が大事なのです。

図形的に語るというのは分かりにくいと思いますので、簡単な例を出します。日本で見つけた小話があります。

昔、あるところに「どうも」という刀使いの名人がいた。隣村に「こうも」という刀使いの名人がいた。ある日二人は出会って、腕試しをしようということになった。名人が切ればまた、人の首もくつつくという話だということで、まず、「どうも」が「こうも」の首をピョンと切り、首がコロコロと転がっていった。また乗せたらピタッとくつついて生き返った。名人ですから。今度は「こうも」が「どうも」の首をピョンと切った。首がコロコロと転がっていった。乗せたらまたピタッとくつついた。名人だから。これでは勝負にならないでしょうということになり、いちどきに相手の首を切ったらどうだろう。1、2、3とお互いに相手の首を切った。二つの首がコロコロと転がっていった。今度は乗せてくれる人がいなかった。二つの首は顔を見合わせて、「これではどうもこうもならん」と言いました。それ以来日本ではどうしようもないときに、「どうもこうもならん」というようになった。本気にしないでください。昔話うそ話です。昔話の文芸理論からしたら完璧です。「どうも」が孤立的です。「こうも」も一人です。1対1です。首を切っても血が流れていません。先ほどの「馬方山姥」の馬と同じです。また持ってきたらピタッと付いています。切り紙細工のようです。切り紙細工ということは図形的ということです。

なんと、「白雪姫」と「どうもとこうも」の小話の語り口は原理的には同じだったということになります。先ほどの「馬方山姥」のすばらしいところは馬が3本足になっても平気で走っていったという場面です。性能が落ちていません。世界に誇れるファンタジーだと思います。そのすばらしいファンタジーはいかなる原理によって成り立っているかをはっきり説明できなければなりません。同じように図形的なのです。

「馬方山姥」の馬の形を切り紙細工で作ってみてください。横向きにして、馬の足を1本切ってください。血は流れていません。馬の全体の姿も崩れていません。足が3本になっただけで全体の姿は崩れていませんね。だから走れたのです。あの、太い肉体の馬としては語ってなくて、切り紙細工のように語っています。これは私たちの新しい発見です。

「白雪姫」「どうもこうも」「馬方山姥」は同じ原理で語っていたということになります。それは図形的に語るという原理で語られていたのです。グリムは「白雪姫」を書いたとき、残してくれたのがよかったのです。口伝えだけでなく、雑誌などから補って作っているのですが、あの語り方をキープしてくれましたので、200年たって、それが昔話の独特の語り方で、しかも、日本にもあることが発見できるのです。ディズニーのように王子のキスによってというように書き換えられていたら発見できなかったことです。だから昔話の語り口はどこに秘密が隠されているか分からないので、大事にしてください。

「白雪姫」は3回の繰り返しの例として挙げたのですが、そのなぞを解くために横道にそれてしまいました。

1、2、3のリズム

先ほどお話したように白雪姫は3回殺されています。全訳で読んでもらうとよいのですが、グリムはその3回をほとんど同じ言葉で語っています。200年前、昔話の理論など全くない時代に模索しながらああいう形をキープしたのは大変な功績だと思います。

白雪姫を全訳に従って図解しますとこういうふうになっています。1回目、ひもで殺されました。2回目、くしで殺されました。3回目、リンゴで殺されて生き返りませんでした。しかし、王子と結婚しました。3回目が一番長くて、一番重要です。

1、2、3というリズムです。我々が石を前に投げるときのリズムです。これが人間の体のリズムに合っていると気づいたとき、いろいろなことが分かってきました。リズムというのは人間の体

の動きです。もう一つこのリズムで考えられるのは、陸上の三段跳です。ホップ、ステップ、ジャンプといってジャンプが一番長いです。一番重要です。そして、ステップのところがホップよりちょっと短いです。なんとグリム童話の白雪姫も、くしのところがひもよりちょっと短いです。2、3行短いです。

田舎で話を聞くとき3回の繰り返しがあつたものは本当に注目して聞きました。例えば「猿婿」はきれいな3回の繰り返しです。

百姓が田んぼに水が枯れたので、「田んぼに水を入れてくれる者がいれば3人娘のうち一人を嫁にやるのだがな」と言うと猿が出てきて水を入れてくれた。「嫁もらいに行くぜ」と猿が言うもんで心配になってきた。心配で翌朝起きられませんか。一番娘が来て、「飯食いな」と言うと、「食いたくない」と言う。「なぜだ」と聞くと「昨日、田んぼに水入れてくれたら3人娘のうち一人嫁にやる言ったら、猿が水を入れてくれた。お前猿のところに行ってくれないか」と言う。「だれが猿のところなんか嫁に行くかね」と言って出て行った。

二番娘がやってきて「じいちゃん、飯食いなね」、「食いたくない」、「なしてだ」、「こういうわけで、お前嫁に行ってくれるか」と言うと二番娘も断って行ってしまった。三番娘がやってきて、「猿のところに行ってくれるか」と言うと「じいちゃんが約束したのなら行くよ」と言って、ほんどう（水瓶）と長わらじを用意して待っていた、という話です。これも2番目が短いのです。3番目は朗々と語ります。

昔話の理論など知らないおばあちゃんがグリムと同じように、三段跳と同じように語っています。これは本当に伝承のすばらしさです。お話の中のリズムを語り手が感じとっています。自分が子どものとき聞いて楽しかったからそのように語るのです。これは重要な伝承だと思います。しかし、目に見えないし、語ったら消えてしまいますので、だれも気付かないのです。

理論の研究をしている者が、認識して定着させることが必要だと考えています。

昔話の音楽性

音楽にもこれと同じ形があります。西洋の音楽は数学的にきれいに整理しますから間隔が均等なのです。2小節、2小節、4小節というメロディーの作り方があります。これをバーフォームと言います。1小節、1小節、2小節という形でもよいです。これはヨーロッパの中世に吟遊詩人といわれる人たちがいました。自分で作詞作曲して歌ってお金をもらう人達です。その人たちが大変好んだ形だそうで、ヨーロッパの中世では、2小節、2小節、4小節の歌がたくさんできたそうです。それがヨーロッパの音楽史の中では、ドイツの古典派と呼ばれる人達に愛用されます。古典派という音楽史の中では、ハイドン、モーツァルト、ベートーベン辺りを言います。ハイドンは余り使っていませんが、モーツァルト、ベートーベン、その他、シューベルト、ブラームスが使っています。いくらでもその例はあります。例えばモーツァルトのソナタ・イ長調があります。トルコ行進曲が付いているもの。一番分かりやすいのはシューベルトの子守唄。同じメロディーを繰り返しています。昔の音楽だけでなく、日本で若い人たちに歌われているポップミュージックにもたくさん使われています。ビートルズはこの形が大変好きでした。短いメロディーが2回出てきたら間違いなく3回目は長いはず。倍のはずです。ビートルズはバーフォームをたくさん使ったから人気が出たとも言えます。人に受け入れやすかったということです。日本のわらべ歌もほとんどこのリズムでできています。

シューベルトを歌う人が「一番大事なところだけであとは省略します」とは言いません。陸上の三段跳をする人も「最後だけでホップ、ステップを省略します」とは言いません。けれども昔話に関してはリンゴだけにして、ひもとくしをカットしてもだれもおかしいとは思わないで、今まで来ています。ディズニーにだまされてきたのです。

リズムに関しては子どものほうが敏感です。大人は忘れていてのではないのでしょうか。大人はリズムなんか忘れても暮らせるけれど、子どもは日常の大事なことです。1歳半や2歳でリズムに合わせて体をゆするようになります。言葉のまね、

メロディーのまねも出来ないけれど、リズムだけは感じ取って体をふるってことは表現しているということでしょう。リズムだけは感じ取って表現できるのです。リズムの喜びが人間の根源的な喜びであること、原初的な喜びであることを示しています。それをつぶさないでください。大人はその原初的な喜びを忘れて暮らしています。そういう大人が作るとディズニーみたいになってしまいます。物語はリズムがあるから聞いていられるし、読んでいられるのです。どうぞそのところは勉強していただいて、図書館にいらっしゃる親たちにも啓蒙していただきたいと思います。子どもの感受性を大人が途中でつぶさないでください。

先ほどお話ししました、「猿婿」を語ったおばあちゃんはこれと同じリズムできれいに語ってくれました。よい語り手、様式感覚を持っている語り手は3回きれいに語ります。

というわけで、昔話の音楽性につながります。音楽と非常に似ているということを手で申し上げましたけれど、その一つの例です。

最後に「馬方山姥」に戻っていただけますでしょうか。馬方がはりに上がっていたら山姥が甘酒を沸かし始めました。甘酒がちょうど沸いてきたときに居眠りを始めます。そして、飲まれてから目を覚まします。時間が見事に一致しています。途中で目を覚ましたらややこしいことになりますよね。昔話は時間がきれいに整理されています。鉢合わせしないという時間の一致です。全部飲まれるまで待って、目を覚ましています。2度目の餅を食べるところも同じですね。全部食べ終わってから目を覚ましています。昔話はややこしい場面を嫌います。すっきりしてなくてははいけません。これは「馬方山姥」だけではなく「白雪姫」も同じです。小人たちが山へ仕事に出掛けてから、女王は殺しに来ます。女王が殺して帰ってしまったから、小人は戻って来ます。絶対に鉢合わせしません。鉢合わせしたらややこしいからです。ということは、冒頭で言いましたようにシンプルでクリアなのが好きです。

もう一つ「馬方山姥」で屋根のわらを抜いて甘酒を飲んだ後、餅を食べるとき、さっきのわらで餅をツクンと刺して食べて、と同じわらを2度

昔話の語りの様式

使っています。これは、昔話の持つ経済性と言います。昔話は一度取り上げた材料を何回も使うという経済性です。さっきお話した同じ場面は同じ言葉で語るというのも経済性です。

というわけで、昔話はシンプルでクリアな形で、耳で聞きやすいようにできている。そういう語り

口を保持した、昔話集、昔話絵本を子どもに与えてやってもらいたいと思います。

どうも、ご清聴ありがとうございました。

(おざわ としお 小澤昔ばなし研究所主宰)

昔話からのメッセージ

小澤 俊夫



昔話はさまざまなメッセージを発信しています。特に重要なのは、子どもの成長する姿について、人間と自然との関係について、生命のあり方について、の三つのメッセージです。事例を示しながら考察します。

午前中は昔話が口伝えされてきた間に獲得してきた単純明快な語り口を実例で聞いていただきました。次の問題は、そういう昔話は何を語ろうとしているのかという中身の問題です。これはいろいろな考え方があり、いろいろなことが言われてきました。心理学の方から言ったり、神話学の方から言ったり、いろいろなことができます。私は昔話の中で語られている子どもの姿に、重点を置いて考えています。昔話というと世間では普通、勧善懲悪の物語だと言われます。それは無理のないことです。日本では「花咲かじい」、「舌切りすずめ」、「こぶ取りじい」という話が有名です。それらは勧善懲悪です。最初に出てくるじいさんはよいじいさんで、勤勉正直、後から出てくるじいさんは強欲で人まねして罰を受ける。それが有名なものだから、日本の昔話は勧善懲悪の物語だと言われます。しかし、昔話全体から見たら決して多数派ではないのです。数からいったら多くありません。日本の昔話はタイプでいえば900種類から1,000種類あるのです。『日本昔話通観』をやったとき大体1,000種類だなということを感じました。その中で、「花咲かじい」のような話には必ず隣のじいさんが出てくるものですから、我々は学術語として「隣の爺型」と言います。それは13種類ぐらいしかありません。12、3とっていて結構です。決して多数ではありません。だが有名です。最初のじいさんは勤勉で正直です。美德だと言われ教育によいというので明治以来教科書に

度々載り、度々絵本化されました。江戸時代の終わりごろからそんな傾向があります。しかし、昔話は勤勉、正直だけの話ではなくて、人間のいろいろな可能性を語っていると思いますので、そちらの方に重点を置いてお話しします。

人によって昔話が発信するメッセージの受け取り方はいろいろあると思うのですが、私は次の三つの点が重要ではないかと思います。1番目は「昔話は子どもが変化しながら成長する姿を語る」。2番目は「昔話は動物を含め命のあり方を語る」。「三匹の子ブタ」など正にそういう話です。3番目は「昔話は人間と自然との関係を語る」。特に日本の昔話が、人間と自然との関係を語っているのが非常に大事だと思っています。これはヨーロッパの昔話とは大きく違うところです。

昔話は子どもが変化しながら成長する姿を語る

今日は短い時間ですので1番目の「昔話は子どもが変化しながら成長する姿を語る」に絞ってお話ししたいと思います。なぜ子どもに焦点を当てるかということ、さっきお話しした勧善懲悪というのは「隣の爺型」ですが、最初に出てくるじいさんは皆よいじいさんです。そして最後までよいじいさんです。2番目に出てくるじいさんは皆悪いことをして最後には罰を受けるという話です。特徴が二つあります。一つは登場人物が、年寄りであること。もう一つの特徴はよいじいさんは最後までよいじいさんで、悪いじいさんは最後まで悪

いじいさんだということです。年寄りには変化しません。実人生でもそうかもしれませんけれど。悪いじいさんが最後にはよいじいさんになったという話は聞いたことがありません。私は子どもが成長する姿が語られている、そこに注目します。

一番分かりやすいのは「ヘンゼルとグレーテル」だと思います。あのグレーテルという女の子のことを思い出してみてください。彼女は話の前半では森の中に連れて行かれるとき、お兄ちゃんが帰りの道しるべとして置いたパンくずを鳥に食べられてしまうとすぐに泣きます。泣き虫の子です。お母さんが裏木戸の鍵をかけたといっちは泣きません。しかし、最後はお菓子の家に入れられて、お兄ちゃんは馬小屋に閉じ込められて動けない。そのとき魔女に言われます。「お前、このパン焼き窯が十分熱くなっているか見て来い」。すると、「私どうやってよいか分からない。やって見せてちょうだい」と言って魔女をポーンと窯の中へ突っ込みます。あのときの姿を思い浮かべてください。すぐくっきりした女の子になっていませんか。決然たる姿があります。

あの最後の姿は最初の泣き虫の女の子と比べたら相当の差があると思いませんか。成長の段差と言いますか、昔話はこの構造を語っているのが多いのです。初めは弱い子がどこかで力を発揮していく物語が多いです。私はそこに注目します。

もちろん実人生の中でも変化して成長しています。実人生の成長は時間がかかります。毎日、そばで暮らしていると子どもの成長はなかなか認識しにくいものです。認識しにくい変化を昔話は、短いストーリーの中にはっきりした変化で見せてくれるのです。

昔話は、子どもが育つというのはこういうものだよという過去から現代へのメッセージだと思います。昔の人たちがたくさんの子育てをしてきて、こういう育ち方をする子もいれば、こういう子もいるよ、といろいろ見せてくれています。「育てる」のではなく「育つ」という自動詞です。だから、昔話の中から子どもが育つため受け取れるメッセージはたくさんあるのではないかと考えています。

子どもが変化して成長しているという分かりや

すい日本の例は「寝太郎」だと思います。日本中にあるかと思いますが、私が聞いたのはこういう話でした。

昔、あるところに若者がいました。ちっとも働かないで遊んでばかりいるので、皆に馬鹿にされて、あいつは役立たずだ、寝太郎だと言われていた。そうやって何年も過ぎました。ある日のこと、むっくり起き上がって町へ出掛けて行きました。そして、ハトとちょうちんを買って帰ってきました。夜になるとハトとちょうちんを持って隣の長者の家の松の木によじ登って大声で叫びました。「長者よ、よく聞け。我こそは鎮守の森の神様である。今夜はお前に家の家運を予言しに来た」。

長者の方は夜中に大きな声がするので何事かと縁側に出てみたら、真っ暗やみから声だけ聞こえてきました。「お前の家の一人娘に隣の寝太郎を婿に取れ。寝太郎を婿に取らなければお前の家の家運はたちまち傾くであろう。よいか、分かったか。では、鎮守の森に帰るぞ」と言って、ちょうちんに火をつけ、ハトの足に結び付けてぱっと放しました。帰るぞと言ったとたん火がすうーと鎮守の森の方へ飛んで行ったので長者はすっかり本気にしてしまいました。で、翌朝一番に寝太郎のところに行きました。寝太郎をたたき起こして、「寝てる場合じゃねえ。鎮守の森の神様のご命令だから是非、うちの一人娘の婿になってくれ」というと「じゃ、しょうがない。なるか」と言って寝太郎が長者の家の婿になったという話です。

これは結婚詐欺というか、悪い話ですが、よく考えてみると大変面白い話です。現代の大人は、人をだましているの子どもには聞かせられないと思うかもしれません。でも、悪知恵も知恵のうち。人が生きていく上で悪知恵をちょっと使うことは皆あります。うそも方便なんて言葉もあります。どんなに正直だと思われている人もたまにはうそをつくことがあります。勤勉だと思われている人も、たまにはさぼることがあります。いろいろな面があります。それを昔話は極端に語るのが好きですから今のようになります。そもそも昔話は道徳を余り気にしていません。道徳のことばかり考えて昔話を読むととんでもない昔話がたくさ

んあります。怠け者が、又はうそつきが幸せになる昔話がたくさんあります。昔話は何を言いたいかというと「強く生きろ」ということを言いたいのです。そういう意味では荒っぽい文学です。悪知恵も知恵の一種と考えてもらえれば、今の話から大事なメッセージが読み取れると思います。二つあります。まず一つは、あの寝太郎は初めのうちにたくさん寝ていたのので後でよい知恵が出せたのだ。これは分かりやすいですね。もう一つは、あの寝太郎は一生寝ていたわけではない。途中で起きましたということです。

昔話は人類の記憶

若いときは教室に入ったら眠くなったとか、教科書を前にしたら居眠りをしたという経験は皆あるはず。そういう人が30歳、40歳になっても寝ているかという寝ていません。社会人として普通に働いています。それを私の言葉で言えば「起きた」と言います。どこかで起きます。

人間というのは一度起きると自分が寝ていたころのことは忘れます。特に親になると忘れます。学校の先生になるともっと忘れます。忘れるのも自然なのです。

昔話は個人が忘れたことを日本人全体の集合的な記憶として覚えておいてくれる。だから大事だと思うのですがどうでしょうか。どの民族もこういう昔話を持っているので人類の記憶とも言えます。

昔話は昔の人が子どもを育てたり、教育したりしたときの、いろいろな観察が込められていると思います。だからそこから受け取れるメッセージはたくさんあるのではないかと考えます。

子育ては親にとって初めての体験です。例えば今15歳の子どもがいるとすると、その子の35歳の姿は親は見えていません。初めての体験ですからこの15歳の子が寝ていると、一生寝ているのではないかと心配します。ちょっと悪いことをすると一生悪いことをするのではないかと心配します。これは親の弱点です。しかし、おじいさんおばあさんは違います。昔話を伝えてきたのはおじいさんおばあさんです。ほとんど年寄りです。つまり、自分も子どものころを経験して、子どもを育てた

経験もある。自分の孫の育ち方も見えています。そうすると、自分の息子が10代のころ悪くて仕方がなかった。勉強なんかしなかった子が、35歳くらいになって普通に父親をやっているのを見えています。35歳くらいになれば普通になるのを見えています。そこが初めての子育てと違います。

若い親の子どもの見方は今の12歳を見ているけれど、年寄りがかつての12歳を見ます。かつての12歳が20年たって32歳になった姿を見ているから、年寄りは変化を知っています。それで余り慌てません。子どもへの観察があります。それが大事だと思います。今80歳の語り手がいたら、その人は70年前は10歳の聞き手だったと先ほど言いました。10歳のときお話を楽しみました。

それが30歳ぐらいになって親になって子どもにお話を聞かせたりして、そして60、70歳になって、子どものとき、悪かった人間が普通の人間をやっているのを見えていますから、ちょっとのことでは心配しません。そしてお話がいかに大事かということも知っています。

日本中で今は核家族化が進んでいます。親は初体験だから12歳の子が悪いことをすると一生悪いことをするのではないかと先回りして心配している状態ではないでしょうか。今のように核家族化が進んだ世の中だからこそ昔話が必要だと思っています。昔話からのメッセージだから大事だと思っています。

昔話は駄目な子がいつか知恵を出していくよ、あるいは力を付けていくよ、あるいは運に恵まれてやっていくよと語っています。そういう意味では昔話は人生肯定的です。人生を肯定する考え方が基本にあります。ですから昔話の子ども観は基本的に優しいです。特に駄目な子に対して優しいです。できない子、いじめられている子、勉強嫌いな子、あるいは境遇的にいじめられている子、貧しい子に対して優しいです。

3回の繰り返りに読める昔話のメッセージ

「シンデレラ」がガラスの靴を置いて帰ったのは3回目の舞踏会の帰りです。ディズニーは1回目の舞踏会で置いてくることにしていますが、3回目に置いてくるのに大事な意味があります。

ディズニーはシャルル・ペロー (Charles Perrault) という17世紀のフランスの作家のものを基にしたものです。シャルル・ペローは宮廷的文学の盛んな時代でしたからああいうのができました。ディズニーはそれをさらに甘くしています。シンデレラについては「グリム童話21番 灰かぶり」という童話があります。とってもきれいな童話です。是非全訳で読んでください。

シンデレラの物語は9世紀の末に南中国で記録されたのが最初です。中国の『西陽雜俎』の中に収められているのが最初です。そこでも母親の助力があります。母親の力が働いています。グリムも母親の力が働いています。したがってグリムの方が元の話に近いです。グリムの話で重要な点だけちょっとお話しします。

ある女の子が親に死なれて継母に育てられます。その継母にも実の娘が二人いて、その三人はいつもきれいに着飾って遊んでばかりいて、シンデレラばかり汚い服を着せられてつらい仕事ばかりさせられる。それで灰の中で寝かされるので灰かぶり、シンデレラ、ドイツ語で、アッシュェンプッデル (Aschenputtel) というあだ名が付きます。ある日のこと、宮殿で王子の花嫁を選ぶ舞踏会が開かれます。継母と実の娘はきれいに着飾って出掛けようとしています。シンデレラも一緒に行きたいと言うのですが、あんたにはきれいな服がないから連れてってあげられないと言います。それにダンスもできないじゃないかと言って、置いていこうとします。しかし、シンデレラはどうしても行きたいと思って、与えられた仕事を鳥の援助によって早く片付けて、実の母のお墓へ行きます。すると、そこに白い鳥が飛んで来てきれいな服を落としてくれます。彼女はその服を着ると見違えるようなきれいなお姫さまになりました。彼女は美しいお姫さまの姿になったとき宮殿へ行きます。宮殿では王子が首っただけになって、ほかのだれとも踊ろうとしません。実質的にプロポーズします。しかし、ある時間が来ると、王子の腕の中からするつと抜けて、逃げ帰ってしまいます。そして、また汚い服に着替えます。継母が帰ってきて、今日はどこかのお姫様が来て王子様が首っただけだったのよと話します。2度目もまた、実の

母のお墓へ行きます。また、鳥が来て前よりもっと美しい服を出してくれた。彼女はその服を着て、前よりもっと美しくなって宮殿へ行きます。王子はこのあいだ逃げられたお姫さんが来たので、今度こそは逃がすまいと思うのですが、また逃げられます。シンデレラはまた、汚い姿に戻ります。3回目も実の母のお墓へ行きます。鳥が今までよりもっと美しい服を出してくれた。その服を着て、今までよりもっと美しくなって宮殿へ行きます。王子は2度も逃げられたお姫さまが来たので今度こそ素性を確かめようと階段にタールを塗っておきます。松やにというバージョンもあります。シンデレラは逃げ帰るときに、そのタールに左の靴を取られて置いてきてしまいます。王子はその靴が合う人を探します。それがシンデレラだったのです。結局はシンデレラを見付けて結婚したという物語です。グリム童話の全訳で是非読んでください。

この話は、読んでいただくとお分かりだと思いますが、実にきれいな3回の繰り返しをやっていきます。先ほどの「白雪姫」と全く同じ3回の繰り返しです。2回目がちょっと短くて同じ繰り返しです。

私がこれまで疑問だったのは、シンデレラは結局王子と結婚するのだったら、1回目のプロポーズを受けていたらよかったのではないか、ということ。でも帰ってきて汚い姿に戻ります。あの行ったり来たりは何だったのか。あれは若者の心の動きを語っているのではないかということに気が付きました。キーワードは鳥でした。実の母のお墓に飛んできた鳥は何だったのか。どこの国でも鳥は死者の魂の化身と考えられています。これはとても広い信仰です。日本でも古くからありました。古事記にもありました。実の母のお墓に現れた鳥は間違いなく実の母の魂の化身と考えてよいと思います。実の母の魂の化身がくれた服を着た彼女の姿は、彼女の真の姿と考えてよいのではありませんか。彼女の真の姿が美しかったのです。ここがディズニーと決定的に違うところです。ディズニーの絵本では魔法の杖に触れられて美しい姿に変わりました。魔法による美しさではなく、普段は汚かったけれど本当は美しかったのだとい

う真面目な物語です。そう言えばもう、若者の物語だということが分かるでしょう。

今のシンデレラの話の抽象化すれば分かりやすいと思います。シンデレラというのを若者に置き換えてみましょう。若者は普段汚い姿で暮らしています。服が汚れているだけでなく、反社会的な行為をするのもダーティーです。それでも若者は時々真の美しい姿になりたいと思います。美しい姿になったらそれをだれかに認められたいと思います。宮殿に行きました。そこで認められたらまた、ダーティーな姿に戻ってしまいます。それっきりダーティな姿でとどまるかと思うと、そうではなくまた真の姿に戻りたいと思います。認められるとまた、ダーティーな姿に戻ると言う行ったり来たりです。このように言い換えたらどうでしょうか。若者の行動そのものではないでしょうか。若者は大人の目から見ると悪い子でも、時々本当の美しい姿になりたいと思います。私はそれを確信しています。しかし、最近の風潮ではそうではなくて、悪い子は悪い子でさっさと警察に渡した方がよいという意見が強いのです。それでこの間少年法が改訂されました。12歳でも警察に渡せるようになりました。私はあれは間違いだと思います。どんな子どもでも、自分の美しい姿を取りたいと思うし、取ったらだれかに認められたいと思うのです。認められて、翌日からよい子になるかというところがそうはいかないのが若者なのです。また、戻ってしまいます。だが、必ず美しい姿になるのです。行ったり来たりするものなのです。

シンデレラの場合王子さんに認められたのですが、若者の場合はだれに認められたいかという、親なのです。その次が先生ですね。先生という言葉は若者にとって一種魔力を持っています。

だが、せっかく認めてやったのに、またダーティーに戻ってしまう。あれはなぜなのか。私はここには理由がないと思います。昔、アメリカの「理由なき反抗」という映画がありました。あの理由なきと同じです。だから追求しない方がよいと思います。理由がないのですから。強いて理由があるとしたら親子であるということだけです。親子というのは愛の一番の基です。ですが、親子であることが苦しみの基になることがあります。

す。どんなに親から愛情を受けて育っても12、3歳ぐらいになると親から別れていかなければなりません。動物はすべて独立しなければいけないのです。子どもは本能的にそれを知っています。しかし、別れたくないのです。その矛盾で気持ちが揺れます。その揺れている気持ちは揺れるに任せるのがよいと思います。それはシンデレラの振り子が揺れているのだから止めようとしても止まらないのです。逆に言えば振り子だからいつかは止まります。

親子の問題は荒立てれば荒立てるほど大変なことになります。放っておけば時間が解決します。そういうときは、大抵お母さん方が子どもと接することが多いです。私はそういうとき、「母親は子どもに抱きついていくのではなく、お母さんが何か熱中するものを持ってください。何か自分の力を注ぐものを持ってください」とお話ししました。そして「子どもには、あなたはもう13歳なんだから自分の人生に責任を持ってやりなさい。私にだって、一度きりの人生があるんだから私は自分の人生をちゃんとやりたいよ、という姿勢で接してください」とも言いました。

シンデレラという話はたわいもない話ですが、すごく大事なことを言っています。昔話は基本的には人生肯定的です。途中にはいろいろなことがありますけれど。

私が読み取るシンデレラのメッセージも、シンデレラが宮殿に3回行ったり来たりするから読めるメッセージなのです。あれがディズニーのように1回で終わったら、今のメッセージは消えてしまいます。語り口とメッセージは密接につながっています。紙の裏、表なのです。語り口を壊したらメッセージは必ず壊れます。

子どもの成長には時がある

もう一つ別の例ですけれど「わらしべ長者」という昔話があります。日本中にあってタイプが二つ、三つに分かれますが私が聞いたのはこういう話でした。

昔ある村に大きな百姓がありました。息子が3人ありました。百姓は自分が歳を取ったときに息子3人を呼んで財産分けをしました。長男にはお

前は頭がよいからと言ってお金の財産分けをしました。次男にはお前は働き者だからと言って田畑を全部譲りました。末っ子にはお前はちっとも役に立たない子だからこれしかやるものはないと言ってわらしべ1本しか与えませんでした。末っ子はわらしべ1本を持って旅に出ました。そうしたら、蓮の葉を収穫しているおじさんがいて、「とってもよい蓮の葉が採れたのだが、これをくくるわらしべが1本あるとよいな」と独り言を言っていたので、おじさんこれあげるよと言ってわらしべをあげました。おじさんは喜んで蓮の葉をそれでくくって、お礼に蓮の葉を1枚くれました。今度は1枚の蓮の葉を持って歩いていった。そうしたらみそを作っているおじさんがいて、これを包む蓮の葉があったらよいなと言っているのので、これをあげると言って蓮の葉をあげました。そうしたら、おじさんは喜んでみそを蓮の葉で包んで、別にみそを分けてくれました。それで、みそを持って歩いていった。今度は刀鍛冶がいて、「とてもよい刀が打てただけけれど、この刀を最後にみそで冷やすと名刀が仕上がるのだけれど」と独り言を言っていた。そこでおじさんにみそをあげました。そうしたら、鍛冶屋は喜んで、みそで名刀を仕上げました。そして、名刀をくれました。それで、その名刀を持って歩いていたら、川の土手に出ました。くたびれたので、刀をわきに置いて昼寝をしました。そこへ山犬が現れて、飛び掛ろうと思って、若者のまわりをぐるぐる歩き回りました。その光景を川向こうで村の長者が見ていて、危ないと思った瞬間に刀がひとりでにさやから飛び出して山犬に切り掛かりました。山犬は逃げて行きました。それを見て長者は、あの刀はただものではない、あんな刀を授かっている若者には、ただものではない運が授かっているに違いない、と思って若者のところへ行ってみて自分が見たことを話して聞かせました。「おまえはただものではない運を授かっているようだから是非うちの一人娘の婿になってくれ」と言って、とうとう末っ子が長者の家の婿になったという話です。長者の家の婿になることがよいことかどうかは分かりませんが、日本の昔話では終わり方の一種のパターンになっています。

これは非常に分かりやすかったですね。福島で最初に聞いたとき、これは子どもの成長を語っているなと思いました。今話をちょっと抽象化して話すと、子どもは自分が獲得して持っているものとうちよほど合致するものと出会ったとき、次の段階に有効に進むことができる、というふうに言い直せます。

わらしべを持っているとき、蓮のおじさんとお会いしたからよかったです。いきなり刀鍛冶とお会いしても何にもならなかったのではないのでしょうか。

例えば子どものことを考えてみると、子どもにもうよいだろうと思って三輪車を買ってやっても、ちょっと早すぎるとせっかく買ってやっても乗らないのではないのでしょうか。無理に乗せても泣いてしまう。けれども何週間かたつといつの間にか三輪車に乗って行ってしまふ。そこのことです。子どもは自分がまだ握る力もない、腰の力もないということを知っていますから早く与えても乗りません。でも、ちょっと成長するとだれに言われなくても平気で乗っていきます。子どもは自分の成長する度合いを知っています。成長に合ったものと出会ったとき自分のものにして進んでいきます。一言で言うと、成長には「時」があるよという話です。

最近ではどうも「時があるよ」ではなく、早いことがよいことだというふうになっていませんか。私はとても気になります。早さへの信仰がものすごく強いです。早さの基準、何に対して早いかということと大体隣ではありませんか。隣と比べて早いか遅いか大事な基準になっています。その子に責任を持っている大人がやるべきことは、その子が隣と比べて早いかどうかではなくて、その子がわらしべの段階なのか、蓮の葉の段階なのか、みその段階なのかを見極めてやることではないのでしょうか。隣と比較することは無責任な通り掛かりの人間にでもできます。隣との比較だけでは、大人がその子にどういうふうに接したらよいのかが出てきません。そうではなくて、この子は今、わらしべ、蓮の葉、みそなのだということが分かれば、この子にどう対応したらよいか分かるのではないのでしょうか。

成長には「時」があって、その「時」を待っていてくださいという話です。昔の人は「わらしべ長者」のような話で、成長には時があるよとメッセージとして、私たちに贈っているのです。だから、そこへ耳を傾けてくださいと私は言っているのです。

子どもは自分の形式意志に従って生きていける

でもそのとき何もしないで待っていればよいのかという私はそうは思わないのです。こういう経験があります。息子たちが小さいとき庭にクリスマス用のモミの木を植えました。毎日その成長を見ていました。モミの木の成長は大変速くて、しばらくたつと大変きれいな形になりました。クリスマスツリーを作れるなど楽しみにしていました。ところが秋になって植木屋が来て、切られてしまいました。とてもがっかりしましたが、1、2か月で、元に戻ったのです。これを形式意志と言ってよいと思います。意志があるのは動物だけと思っていたのですが植物にも意志があることに衝撃を受けました。

つまり生きているものは植物であれ、こういう形でありたいという意志を持っています。子どもたちもそれぞれ形式意志を持って生きていてのではないかと、このごろ強く思います。子どもはみんな普通の人間として普通に生きていきたいと思っているのではないのでしょうか。病気になりたいという子はいませんね。精神的にも普通に生きていきたい、親とも普通の関係、友達や兄弟とも普通の関係で生きていきたいと思っているのではないのでしょうか。それが何らかの形でゆがめられてなかなかうまくいかない。それでいろいろな事件を起こしたり、いろいろな苦しみが生まれてくると私は思っています。

私は子どもが育つのは盆栽ではなくてモミの木の方がよいと思います。盆栽は木の意志ではなく人間の意志で枝を引っ張ったりして作りますから。

子どもが育っていくときほったらかしてよいとは思いません。そのとき何が必要かという三つのことを考えます。突き詰めて言えば子ども自身が自分は愛されていると自覚が持てること、自分

が信頼されているという自覚が持てること、自分の価値が認められているという自覚が持てること。この三つの自覚が持てれば子どもは自分の形式意志に従って生きていけるではありませんか。

子どもが自分は愛されているという自覚を持てるためにはどうしたらよいか。この先が問題なのです。そのときに大事なことが、子どもにお話を聞かせること、子どもが小さければ絵本を読んであげることだと思っています。もちろん、ほかに泳ぎに行くこととか、山登りとかでもよいですが、大事なことの一つが本や、絵本を読んでやることです。なぜ、それが大事か。いろいろな言い方があると思いますが子どもと大人の距離が一番短いということ、あるいは体温を感じられるような近い関係、生の声であることが大事だと思います。

最近、お話の会のボランティアの方とか司書の方のお話会がありますが、お父さんお母さん自身が自分でお話を聞かせることを習慣づけるように、勧めてください。図書館員がやってくれるからとならないように気を付けていただきたいと思います。図書館員とかお話のボランティアは一生懸命やっているけれど、気が付いてみたら、親と子を分離することになってしまうかもしれない。親はそれに満足して、聞かせてもらっているから私がすることないわとなってしまうたら何にもならないので、どうぞ気を付けてください。

昔話は劣った者に優しい

昔話の例でもう一つ面白い例がありますので聞いてください。福島県の遠藤登志子さんから直接聞いた話ですがとっても面白い話です。福島県は浜通りと中通りと山通りがあります。山通りの方のちょっと愚かな若者が浜通りの漁村の家から嫁さんをもらいました。しばらくして、婿さんと嫁さんが嫁さんの実家を訪問することになりました。嫁さんが自分の亭主がちょっと抜けているのを心配して入れ知恵をします。家に行ったらごちそうしてくれるだろう。一番のごちそうはカニだから、カニが出たらふんどしを外して食べるようにと言っておきます。実家の親父さんは大喜びで最後になりっぱなカニを出してくれます。婿さんは

これだとばかりに自分のふんどしを外して横に畳んで、カニを食べました。親父さんはびっくりして、こんな男に娘を預けておけないと娘を取り上げます。それで男一人で村に帰ります。そして、嫁さんは親父さんに抑えられてしまったと言うと仲間が怒って、7人でキジを持って親父さんのところへ行き、玄関にキジをボーンと投げ出します。浜ではキジは大変なごちそうですから親父さんは驚いて、お返しにごちそうをします。そして最後に立派なカニが出ました。7人は一斉に立ち上がって自分のふんどしを外しました。そしてきちんと畳んでカニを食べだしました。嫁さんの親父さんはびっくりして一人を呼んで訳を聞きます。するとその男は悪知恵があって、「それは申し訳ないことをした」と謝ります。「山の者はカニなど食ったことがないし、これから先一生食うことはないだろうと思った。そういうときはふんどしを外して食うのが山の者の礼儀なのだ」と言った。「それをやらないと許してもらえないくらい大事な礼儀なのであらかじめ言うておかなかったのが悪かった」と謝ってみせました。親父さんの方はそれは知らなかったと平謝りに謝って嫁を帰してくれました。

私はこの話に感動しました。抜けた婿さんに合わせて、それは村の仕来りだと言って、抜けた男を救った。今の言葉で言えば連帯感でしょう。今の若者はそういう連帯感を持っているだろうかと考えてしまいました。

このパターンは日本だけでなくたくさんあります。そういう連帯感が昔話の中には込められています。先ほど言いましたが、昔話は劣った者に対して優しいのです。

昔話はどの国にもあって、いつまでも伝えられたというのはそういうことではないかと思いません。聞いている子どもにとっても安心して聞け、勇気づけられた。そういう物語だからいつまでも続いてきたのではないのでしょうか。

最後に「白雪姫」の話をしたと思います。白雪姫は3回の繰り返しがありました。白雪姫は小人たちの忠告に耳を貸さなかった駄目な人です。ちょうど私がドイツにいた1960年代で、あの話は「白雪姫のような愚かをやってはいけないよ」と

いう教訓話だという意見が出ました。白雪姫は愚かだったという意見には賛成できますが、その後の教訓話だったということには反対です。小人の忠告に従ってリンゴを食べなかったらどうなったと思いますか。一生小人と森の中で暮らすことになったでしょう。これは昔話の幸せではありません。白雪姫は愚かでよかったという話です。

白雪姫を文芸的に説明しますと、3度の繰り返しがありますが、それぞれのエピソードがカプセルに入っています。先ほど言いました孤立性で、孤立しているのです。それぞれがカプセルに入っているのです。経験知がないのです。昔話は常にそうでした、経験知がありません。繰り返し愚かなことが起こります。では、愚かで終わるかというところではないのです。三つのエピソードがそれぞれ孤立しているかという全体を通しては一つの線が通っています。そして最後に結婚という幸せに至っています。三つを通して一貫しているものは何かというと、昔話が持っている形式意志です。つまり、「白雪姫」という物語が持っている形式意志です。では、その形式意志はいかなるものかという最後に幸せになることです。幸せになりたいという一貫した意志があります。

これは何かというと、先ほどモミの木のところでお話ししましたが、子どもたちは皆普通の人生を生きたいという思いがあるでしょう。子どもたちは皆普通に生きたいという形式意志を持っているのだということにつながるのです。

「白雪姫」の話は一種のメルヘンですから王子との結婚という形でシンボライズしていますが、普通の健康で幸せな人生です。

ゴツゴツした昔話

皆さん昔話をいろいろな思いで読んでおられると思いますが、私は、長い人生をやってきたお年寄りたちが語ってききましたので、彼らの子どもへの観察、子どもと親の関係が込められている、それが語り口として文芸的にも現れるし、メッセージとしても現れると思います。だからそれを壊さない方がよいと思います。なぜかと言うと、目に見えないものですから、一度壊したら回復できないのです。現代ですから、音を活字にして本に定

着させるといことは重要なことです。でも本に
するときできるだけ元の形を壊さないようにと
提唱しています。

どうぞ皆さんもそういう意味で大事な伝承文化
財である昔話がよい形で保存されているものを選
んでください。特に子どもたちに与えるときはそ
こを注意してくださいとお願いしたいです。

もちろん日本は幸いなことに柳田国男先生が昭
和の初めから昔話を集めることを提唱なざって、
第二次大戦が終わってから、明日講義なさる大島
建彦先生とか武田正先生などはすごくたくさん集
めていらっしゃる。ほかにも大勢いらっしゃいます。
日本で12万話以上集まっています。これは
立派な宝です。図書館はそれをどうぞ大事にし
ていただきたいと思います。

私はもう一步先を考えると、昔話は図書館で大
事に保存されているし、研究資料としても大事だ
けれども、子どもたちに届くときどういう形に
なっているかが気になります。

昔話が子どもたちの耳に届くときどういう形に
なっているかが問題だと思います。それが残念な
ながら最近昔話本来の形から大変離れた形になっ
ています。しかも有名な方がなさるので、世間一般
はそういうものだと思ってしまう。

昔話は児童文学ではありません。先ほどお話し
したようにゴツゴツしたものです。目に見えない
いろいろな仕掛けがありますので、それを守った
再話を選んでください。

私はきちんと再話できる人を育てようと思っ
ていますので、日本中で昔ばなし大学を開講して
おります。

日本昔話の伝承は、日本中にいたよい語り手
によるものでした。よい語り手というのは、もう一
歩突っ込んで言えばよい再話者です。語り手は必
ずよい再話者です。頭の中で文章を再話して語っ
ています。そういう方が日本中にたくさんいまし
た。それが今はいなくなって、東京にいるごく何
人かの有名な児童文学者が昔話に手を入れて、き
れいな文章になって日本中に何万と配られている
という現状です。これは昔話の伝承としては異常
な形なのです。私は100パーセント復元できな
いけれど、なるべく復元したいと思っています。そ
して、各地に昔話を壊さないで再話できる人た
ちを養成することが大事だと思っています。

どうも長い時間ご清聴ありがとうございました。

(おざわ としお 小澤昔ばなし研究所主宰)

「昔話の語りの様式」、「昔話からのメッセージ」紹介資料リスト

(本館)→国立国会図書館東京本館所蔵

※→国立国会図書館東京本館にも所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	昔話の語法	小澤俊夫著	福音館書店 1999.10	YU21-5 ※
2	ろばの子：昔話からのメッセージ	小澤俊夫著	小澤昔ばなし研究所 2007.9	KE178-H44 ※
3	かさじぞう (子どもとよむ日本の昔ばなし：1)	おざわとしお、 むらたまちこぶん しのざきみつおえ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1248
4	いっすんぼうし (子どもとよむ日本の昔ばなし：2)	おざわとしお、 もちづきみどりぶん たしろさんぜんえ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1249
5	花さかじい (子どもとよむ日本の昔ばなし：3)	おざわとしお、 なかむらともこぶん ふくだいわおえ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1250
6	おむすびまてまて (子どもとよむ日本の昔ばなし：4)	おざわとしお、 まつむらまさこぶん せきやとしたかえ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1252
7	かにかにではれ (子どもとよむ日本の昔ばなし：5)	おざわとしお、 ふじいづみぶん なつめしょうごえ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1254
8	したきりすずめ (子どもとよむ日本の昔ばなし：6)	おざわとしお、 おのよしこぶん たいらきょうこえ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1255
9	こぶとりじい (子どもとよむ日本の昔ばなし：7)	おざわとしお、 きくちあやこぶん くまだいさむえ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1256
10	えんまさまのしっぱい (子どもとよむ日本の昔ばなし：8)	おざわとしお、 こばやししょうきぶん ささめやゆきえ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1257
11	三まいのおふだ (子どもとよむ日本の昔ばなし：9)	おざわとしお、 まつもとなおこぶん たけとみまさええ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1258
12	へっこきよめさん (子どもとよむ日本の昔ばなし：10)	おざわとしお、 からさわかおりぶん はなのうちまさよしえ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1259
13	さるかにかっせん (子どもとよむ日本の昔ばなし：11)	おざわとしお、 むとうきよこぶん くすはらじゅんこえ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1260
14	ねずみのすもう (子どもとよむ日本の昔ばなし：12)	おざわとしおぶん ふじもとしろうえ	くもん出版 2005.11	Y17-N05-H1261
15	ももたろう (子どもとよむ日本の昔ばなし：13)	おざわとしお、 ながさきももこさいわ こばやしゆたかえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1341

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
16	しりなりべら (子どもとよむ日本の昔ばなし：14)	おざわとしお、 うもりなかこさいわ よもぎだやすひろえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1393
17	うりひめこ (子どもとよむ日本の昔ばなし：15)	おざわとしお、 やまぐちさちこさいわ おおたかいくこえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1394
18	ぶんぶくちやがま (子どもとよむ日本の昔ばなし：16)	おざわとしお、 しむらゆきこさいわ はせがわともこえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1395
19	たにしむすこ (子どもとよむ日本の昔ばなし：17)	おざわとしお、 まつむらゆうこさいわ つだるとうえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1396
20	ねずみのむこさがし (子どもとよむ日本の昔ばなし：18)	おざわとしお、 おおふねめぐみさいわ おぼまことえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1397
21	びびんびよどり (子どもとよむ日本の昔ばなし：19)	おざわとしお、 こんどうようこさいわ ながのひでこえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1398
22	わらしべ三本 (子どもとよむ日本の昔ばなし：20)	おざわとしお、 いまにししげこさいわ やまぐちみねやすえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1399
23	がまとうさぎのもちあらい (子どもとよむ日本の昔ばなし：21)	おざわとしお、 いとうあけみさいわ まさたかもこえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1400
24	おやゆびたろう (子どもとよむ日本の昔ばなし：22)	おざわとしお、 たかはしやすこさいわ おのかおるえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1401
25	はなたかおうぎ (子どもとよむ日本の昔ばなし：23)	おざわとしお、 かとうこうぎさいわ こみまさやすえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1402
26	うらしまたろう (子どもとよむ日本の昔ばなし：24)	おざわとしお、 まみやふみこさいわ あべはじめえ	くもん出版 2006.11	Y17-N06-H1403
27	かにじょうまんの星 (子どもとよむ日本の昔ばなし：25)	おざわとしお、 つはこよねこさいわ げんかひでみえ	くもん出版 2008.1	Y17-N08-J107
28	かっぱのいちもんせん (子どもとよむ日本の昔ばなし：26)	おざわとしお、 いとうなおこさいわ みやもとただおえ	くもん出版 2008.1	Y17-N08-J173
29	天女のはごろも (子どもとよむ日本の昔ばなし：27)	おざわとしお、 ときぎょうこさいわ たしるともこえ	くもん出版 2008.1	Y17-N08-J174
30	かめとからすとはちのおんがえし (子どもとよむ日本の昔ばなし：28)	おざわとしおさいわ しのはらよしたかえ	くもん出版 2008.1	Y17-N08-J175
31	やまなしとり (子どもとよむ日本の昔ばなし：29)	おざわとしお、 うちだなつかさいわ ひらのみどりえ	くもん出版 2008.1	Y17-N08-J176

昔話からのメッセージ

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
32	へびの子しどこ (子どもとよむ日本の昔ばなし: 30)	おざわとしお、 きたがわきみこさいわ ひろのたかこえ	くもん出版 2008.1	Y17-N08-J177
33	ヘンゼルとグレーテル (語るためのグリム童話: 1)	小澤俊夫監訳 小澤昔ばなし研究所再話 オットー・ウベローデ絵	小峰書店 2007.6	Y9-N08-J356
34	灰かぶり (語るためのグリム童話: 2)	小澤俊夫監訳 小澤昔ばなし研究所再話 オットー・ウベローデ絵	小峰書店 2007.6	Y9-N08-J357
35	白雪姫 (語るためのグリム童話: 3)	小澤俊夫監訳 小澤昔ばなし研究所再話	小峰書店 2007.6	Y9-N07-H268
36	金のがちょう (語るためのグリム童話: 4)	小澤俊夫監訳 小澤昔ばなし研究所再話	小峰書店 2007.6	Y9-N07-H269
37	もの知り博士 (語るためのグリム童話: 5)	小澤俊夫監訳 小澤昔ばなし研究所再話	小峰書店 2007.6	Y9-N07-H270
38	鉄のハンス (語るためのグリム童話: 6)	小澤俊夫監訳 小澤昔ばなし研究所再話	小峰書店 2007.7	Y9-N07-H301
39	星の銀貨 (語るためのグリム童話: 7)	小澤俊夫監訳 小澤昔ばなし研究所再話	小峰書店 2007.7	Y9-N07-H302
40	ねこと犬とさるのたからもの (子どもに贈る昔ばなし: 1)	沖縄昔ばなし大学再話 コース再話 小澤俊夫監修	小澤昔ばなし研究所 2005.12	Y8-N06-H338
41	さぎしょっぱらのためぎ (子どもに贈る昔ばなし: 2)	栃木昔ばなし大学再話 コース再話 小澤俊夫監修	小澤昔ばなし研究所 2005.12	Y8-N06-H339
42	食わず女房: 日本昔話類話集 (子どもに贈る昔ばなし: 3)	神奈川・千葉昔ばなし大学再話研究会 再話 小澤俊夫監修	小澤昔ばなし研究所 2005.12	Y8-N06-H340
43	黒いさくらんぼ (子どもに贈る昔ばなし: 4)	福岡昔ばなし大学再話 コース再話 小澤俊夫監修	小澤昔ばなし研究所 2006.5	Y8-N06-H737
44	千葉わらい (子どもに贈る昔ばなし: 5)	南総昔ばなし大学再話 コース再話 小澤俊夫監修	小澤昔ばなし研究所 2006.5	Y8-N06-H738
45	きんぶくりんとかんぶくりん (子どもに贈る昔ばなし: 6)	和歌山昔ばなし大学再話 コース再話 小澤俊夫監修	小澤昔ばなし研究所 2006.11	Y8-N07-H772
46	ちょうきのきつね (子どもに贈る昔ばなし: 7)	富士宮昔ばなし大学再話 コース再話 小澤俊夫監修	小澤昔ばなし研究所 2007.6	Y8-N07-H773
47	つぶむかし (子どもに贈る昔ばなし: 8)	近江昔ばなし大学再話 研究会、静岡昔ばなし大学 再話コース、東京・横浜昔ばなし大学 再話コース再話 小澤俊夫監修	小澤昔ばなし研究所 2008.1	Y8-N08-J265

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
48	うさぎ楽土 (子どもに贈る昔ばなし：9)	宮崎昔ばなし大学再話コース、広島昔 ばなし大学再話コース、福井昔ばなし 大学再話コース、第2期金沢昔ばなし 大学再話コース再話 小澤俊夫監修	小澤昔ばなし研究所 2008.9	Y8-N09-J220
49	日本昔話通観 第1巻～29巻 研究篇1、2	稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1977.10～1998.3	KH22-341 ※
50	本当は恐ろしいグリム童話	桐生操著	ベストセラーズ 1998.7	KH271-G932 (本館)

レジュメ

日本の昔話の展開

大島 建彦

お伽草子の「一寸法師」などのように、ごく小さいすがたであらわれて、思いがけないしあわせをつかむという、いわゆる「小さ子」の事例を取りあげて、そのような昔話の分布と結びつけながら、その展開の過程をたどってみたいと思います。

「小さ子」資料一覧

〔型記号〕

事業	出自		動物の姿であられるもの。	動物の姿であられるもの。	食物の策略によって娘と結ばれるうえに、身軽な動作によって鬼を苦しめるもの。	食物の策略によって娘と結ばれるが、そのような鬼退治とはかわりないもの。	鬼をくするしめ	魚などのま	型記号	打出の小槌をえる	大きな男となる	幸福な結婚をする
	C	A										
青森県弘前市	津軽むがしこ集	すねこたんぼこ	○	○	○	○			b			
青森県八戸市	ふるさとの民話	すねこたんぼこ	○	○	○	○			b			
青森県八戸市	南部昔口集	すねこたんぼこ	○	○	○	○			b			
青森県西津軽郡	津軽百話	すねこたんぼこ							b			
青森県下北郡東通村	日本昔話通観	小つちやい子供							b			
青森県三戸郡五戸町	手つきり姉さま	すねこたんぼこ				○			b	○		
青森県三戸郡五戸町	手つきり姉さま	つぶかい(田螺)							c			
青森県三戸郡五戸町	手つきり姉さま	一寸太郎					○		d			
岩手県奥州市	水沢市史民俗	すねこたんぼこ	○						c			
岩手県花巻市	すねこたんぼこ	田螺	○		○				b			

伝承地	資料名	主人公	出自			型記号	事業			型記号	幸福		
			神の子として	脛や指などから生まれるうえに、動物の姿であられるもの。	動物の姿であられるもの。		食物でたぶらかす	鬼をくするしめ	魚などのま		打出の小槌をえる	大きな男となる	幸福な結婚をする
青森県弘前市	津軽むがしこ集	すねこたんぼこ	○	○	○	b							
青森県八戸市	ふるさとの民話	すねこたんぼこ	○	○	○	b							
青森県八戸市	南部昔口集	すねこたんぼこ	○	○	○	b							
青森県西津軽郡	津軽百話	すねこたんぼこ				b							
青森県下北郡東通村	日本昔話通観	小つちやい子供				b							
青森県三戸郡五戸町	手つきり姉さま	すねこたんぼこ				b				○			
青森県三戸郡五戸町	手つきり姉さま	つぶかい(田螺)				c							
青森県三戸郡五戸町	手つきり姉さま	一寸太郎				d	○						
岩手県奥州市	水沢市史民俗	すねこたんぼこ	○			c							
岩手県花巻市	すねこたんぼこ	田螺	○		○	b							

伝承地	資料名	主人公	出自			事業			幸福				
			神の子として	脛や指など	動物の姿をもつて	型記号	食物でたぶらかす	鬼をくする	魚などのに	型記号	打出の小槌をえる	大きな男となる	幸福な結婚をする
宮城県石巻市	郷土の伝承二	つぶ(田螺)				d				D			
宮城県黒川郡大和町	町の女房と田舎の女房	根太太郎		○		b		○		C	○	○	○
秋田県北秋田市	森吉町史資料八	つぶ(田螺)			○	c				D		○	
秋田県北秋田市	阿仁の昔話	つぶ(田螺)			○	c				B		○	○
秋田県北秋田市	阿仁の昔話	つぶ(田螺)			○	c				D		○	○
秋田県北秋田市	阿仁町伝承夜話	つぶ(田螺)			○	c				B		○	○
秋田県北秋田市	五阿仁の民話	つぶ(田螺)			○	c				D		○	○
秋田県にかほ市	由利地方昔話集	つぶ太郎			○	c				B		○	○
秋田県由利本荘市	秋田むがしこ	つぶ太郎			○	c				D		○	○
秋田県由利本荘市	羽後の昔話	すねこたんぱん				b				B	○	○	○
秋田県由利本荘市	話の三番叟	すねこたんぱ	○			b				A		○	○
秋田県仙北市	秋田角館地方鳥虫草木の民俗学的資料	つぶ(田螺)			○	c				B		○	○
秋田県仙北市	角館昔話集	つぶ(田螺)			○	c				B		○	○
秋田県大仙市	中仙町のむかしつこ	つぶ(田螺)			○	c				B		○	○
秋田県大仙市	仙北地方昔話集	つぶ(田螺)			○	c				B		○	○
秋田県大仙市	仙北地方昔話集	つぶ(田螺)			○	c				D		○	○
秋田県大仙市	伝承文芸一一	すねこたんぱ			○	b				B		○	○
秋田県大仙市	仙北地方昔話集	つぶ太郎			○	c				B		○	○
秋田県横手市	秋田むがしこ	一寸法師			○	d				C		○	○
秋田県横手市	日本昔話通観	つぶ(田螺)			○	c				B		○	○
秋田県湯沢市	昔話研究二一八	つぶ(田螺)			○	c				B		○	○
秋田県仙北郡美郷町	伝承文芸一一	つぶ(田螺)			○	c				B		○	○
秋田県仙北郡美郷町	伝承文芸一一	つぶ(田螺)			○	c				D		○	○
山形県米沢市	雪女房	五分次郎			○	d				C		○	○
山形県米沢市	置賜地方昔話集	五分次郎			○	d				C		○	○
山形県酒田市	酒田の昔話	つぶ(田螺)			○	c				B		○	○
山形県新庄市	笛吹き響	五分次郎			○	b				C		○	○
山形県新庄市	雀の仇討	つぶ(田螺)			○	c				D		○	○
山形県上山市	佐藤家の昔話	一寸法師			○	d				C		○	○

伝承地	資料名	主人公	出自			事業			幸福				
			神の申し子と	脛や指などか	動物の姿をもつて	型記号	食物でかたぶら	鬼をく	魚にのま	型記号	打出の小槌をえる	大きな男と	幸福な結婚をする
新潟県長岡市	おばばの昔ばなし	田螺	○		○	c				D		○	○
新潟県長岡市	おばばの昔ばなし	指太郎		○		b	○		○	B		○	○
新潟県長岡市	さきがポーンと	だいろ(蝸牛)	○		○	c	○			B		○	○
新潟県長岡市	とんと一つあつたてんがな	つぶ太郎	○		○	c	○			B		○	○
新潟県長岡市	越後宮内昔話集	つぶ太郎	○		○	c	○		○	B		○	○
東京都大田区	大田区の文化財	一寸法師				d		○		C	○	○	○
東京都大田区	大田区の文化財	一寸法師				d		○		C	○	○	○
千葉県南房総市	房総の昔話	一寸法師	○			d		○		C	○	○	○
千葉県富津市	富津町の口承文芸	一寸法師				d		○		C		○	○
千葉県富津市	房総の昔話	一寸法師				d		○		C		○	○
千葉県流山市	房総の昔話	一寸法師				d		○		C		○	○
鹿野町	武蔵の昔話	一寸法師				d		○		C		○	○
埼玉県秩父郡小	川越地方昔話集	一寸法師	○			d		○		C	○	○	○
埼玉県坂戸市	川越地方昔話集	一寸法師	○			d		○		C	○	○	○
埼玉県久喜市	武蔵川越昔話集	一寸法師	○			d		○		C	○	○	○
埼玉県狭山市	川越地方昔話集	一寸法師	○			d		○		C	○	○	○
埼玉県所沢市	川越地方昔話集	一寸法師	○			d		○		C	○	○	○
埼玉県川越市	川越地方昔話集	一寸法師	○			d		○		C	○	○	○
埼玉県川越市	武蔵川越昔話集	一寸法師	○			d		○		C	○	○	○
埼玉県川越市	武蔵川越昔話集	一寸法師	○			d		○		C	○	○	○
群馬県利根郡みなかみ町	おばあさんの昔話	一寸法師	○	○		b		○	○	C	○	○	○
群馬県利根郡みなかみ町	藤原の民話	一寸法師	○	○		b		○	○	C	○	○	○
群馬県吾妻郡東吾妻町	群馬県史民俗三	一寸法師	○			d		○		C	○	○	○
群馬県太田市	利根昔話集	でえろん(蝸牛)		○	○	c	○			B	○	○	○
群馬県沼田市	利根昔話集	でえろん(蝸牛)		○	○	c	○			B	○	○	○
群馬県沼田市	利根昔話集	でえろん(蝸牛)		○	○	c	○			B	○	○	○
栃木県芳賀郡茂木町	下野の昔話	田螺			○	c				D		○	○

日本の昔話の展開

島根県益田市	島根県浜田市	島根県雲南市	島根県松江市	島根県大田市	島根県大田市	島根県大田市	島根県大田市	鳥取県某地	南町	鳥取県日野郡日南町	鳥取県西伯郡大山町	鳥取県西伯郡大山町	鳥取県東伯郡琴浦町	鳥取県東伯郡琴浦町	鳥取県倉吉市	鳥取県美方郡新温泉町	兵庫県美方郡香美町	兵庫県養父市	京都府相楽郡和束町	京都府京丹後市	京都府京丹後市	京都府宮津市	愛知県北設楽郡設楽町	愛知県岡崎市	愛知県西尾市	岐阜県高山市	岐阜県飛騨市	岐阜県上市	
民族文化二一七	やすぎ村の昔話と伝説	吉田村三刀屋町昔話集	島根半島漁村民話集二	石見の昔話	島根県三瓶山麓民話集	石見大田昔話集	因伯昔話	なし	日野日南町昔ばなし	伝承文学研究二二	伯耆の昔話	大山北麓の昔話	東伯町昔話集	大山北麓の昔話	鳥取県関金町の昔話	日本昔話通観	美方村岡昔話集	奥但馬の民俗	山城和束の昔話	丹後の昔話	ふるさとの民話	世屋の昔話	日本昔話通観	西三河の昔話	西三河の昔話	〇 昔話研究二一	〇 飛騨地方昔話集	美濃の昔話	
なめくじ	田螺	どんぐり太郎	小武一郎	太郎(田螺)	指太郎	田螺太郎	五分次郎	田螺	田螺	田螺	さざえ	一寸法師	にゆうな(田螺)	さざえ	一寸法師	一寸法師	一寸法師	さんない(川蛭)	一寸法師	たぬし(田螺)	田螺	田螺	一寸法師	一寸法師	一寸法師	一寸法師	指太郎	一寸法師	一寸法師
		○	○	○	○	○	○	○			○			○		○	○		○		○					○	○	○	
			○		○		○											○											
○	○			○		○		○	○	○	○	○	○	○				○		○	○	○							
c	c	d	b	c	b	c	b	c	c	c	c	d	c	c	d	d	d	c	d	c	c	c	d	d	d	d	d	d	
○																													
○			○			○		○			○	○						○	○	○			○	○	○		○	○	
					○		○																			○			
A	D	D	C	D	D	D	C	D	D	D	D	C	C	D	D	C	C	C	C	D	D	D	C	C	C	D	C	C	
○								○			○	○							○				○	○	○		○		
○	○			○		○		○			○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○		○	○	
○	○			○		○		○			○	○	○	○						○	○	○	○	○	○		○	○	

伝承地	資料名	主人公	出自			事業			幸福				
			神の子として	脛や指などか	動物の姿をもつて	型記号	食物でかたぶら	鬼をく	魚などの	型記号	打出の小槌をえる	大きな男となる	幸福な結婚をする
岐阜県中津川市	恵那昔話集	一寸法師				d				C			
長野県上水内郡小川村	信州小川村の昔話	三文丈				d	○			B			
長野県上水内郡小川村	信州小川村の昔話	豆玉野郎				d			○	D		○	○
長野県上水内郡小川村	信州小川村の昔話	豆玉野郎				d				D		○	○
長野県飯山市	信濃の昔話	指太郎	○			d		○		C		○	○
山梨県西八代郡市川三郷町	市川大門町の口伝	一寸法師	○			b		○		C		○	○
山梨県西八代郡市川三郷町	市川大門町の口伝	一寸法師		○		d		○		C		○	○
石川県加賀市	加賀江沼郡昔話集	ちび太郎				d				D			
石川県珠洲市	珠洲市の昔話と伝説一	一寸法師	○			d		○		C		○	○
富山県射水市	越中射水の昔話	一寸坊主		○		b		○		C		○	○
富山県射水市	越中射水の昔話	一寸法師		○		b		○		C		○	○
新潟県岩船郡山北町	岩船地方昔話集	つぶ(田螺)			○	c				B		○	○
新潟県岩船郡山北町	岩船地方昔話集	つぶ(田螺)	○			c				B			
新潟県岩船郡荒川町	岩船地方昔話集	田螺	○			c				D			
新潟県東蒲原郡阿賀町	日本昔話通観	田螺				c				D		○	○
新潟県東蒲原郡阿賀町	東蒲原地方昔話集	田螺	○			c				D		○	○
新潟県上越市	牧村昔話集	豆小僧				c				D		○	○
新潟県上越市	牧村昔話集	親指太郎		○		d				D		○	○
新潟県南魚沼市	二昔話研究と資料	だいらう(蝸牛)			○	c				B		○	○
新潟県魚沼市	越後大白川昔話集	だいらう(蝸牛)			○	c				B		○	○
新潟県阿賀野市	村の風土記五	一寸法師	○			d		○		C		○	○
新潟県佐渡市	佐渡腰細の民俗	一寸法師	○			d		○		C		○	○

日本の昔話の展開

長崎県対馬市	長崎県杵岐市	長崎県杵岐市	長崎県雲仙市	長崎県雲仙市	長崎県雲仙市	長崎県諫早市	長崎県諫早市	長崎県平戸市	野ヶ里町	佐賀県神埼郡吉保町	佐賀県佐賀郡久保田町	佐賀県唐津市	佐賀県神埼市	佐賀県佐賀市	やこ町	福岡県京都郡みやこ町	福岡県鞍手郡鞍手町	福岡県鞍手郡鞍手町	高知県香美市	高知県高知市	愛媛県宇和島市	愛媛県宇和島市	愛媛県八幡浜市	愛媛県八幡浜市	香川県高松市	香川県丸亀市	徳島県三好市	山口県大島郡周防大島町	広島県山県郡北広島町	広島県山県郡北広島町	芸太田町	広島県山県郡安芸太田町						
の話	くつつたんじじい	の話を	島原半島昔話集	島原半島昔話集	島原半島昔話集	肥前国北高来郡昔話集	肥前国北高来郡昔話集	平戸市昔話集	背振山麓昔話集	昔話研究二一七	巖木の民話	背振山麓昔話集	諸富の民話	豊前地方昔話集	福岡県童話	福岡県童話	福岡県童話	土佐昔話集	土佐昔話集	日本昔話通観	日本昔話通観	伊子の昔話	伊子のとんと昔話	母から子への民話	西讃岐昔話集	阿波祖谷山昔話集	周防大島昔話集	芸北地方昔話集	大朝町昔話集	芸北地方昔話集	芸北地方昔話集							
田螺	一寸法師	豆蔵	どんく(蛙のような子)	一寸坊	田螺	豆太郎	田螺	どんく(蛙)	一寸法師	ひよろ	一寸法師	びつきよん(蛙)	一寸法師	小人	豆蔵	一寸法児	二分一	ごぶじ	田螺	一寸法師	五分次郎	一寸法師	一寸法師	一寸法師	五分一	一寸法師	豆市	田螺	田螺	田螺	田螺							
			○		○	○		○					○			○			○			○																
○			○		○		○	○				○																										
c	d	d	c	d	c	d	c	c	d	d	d	c	d	d	d	d	d	d	c	d	d	d	d	d	d	d	d	d	c	c	c							
○		○	○		○			○					○			○	○	○				○	○		○	○	○	○										
	○			○	○				○	○			○			○	○	○				○	○	○	○	○	○	○										
		○				○											○	○			○						○											
B	C	B	B	C	A	D	D	B	C	C	D	B	C	D	D	C	A	A	D	C	A	C	C	A	A	C	A	C	D	D	D							
	○			○	○		○		○			○	○	○		○	○	○		○	○	○	○		○				○									
○	○		○	○	○		○	○	○			○	○	○		○	○	○		○	○	○	○					○	○									
○		○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○						○	○	○	○		○	○		○	○									

市	伝承地	資料名	主人公	出自				事業			幸福					
				神の子と	脛や指など	動物の姿をもつて	型記号	食物でかたぶら	鬼をく	魚など	型記号	打出の小槌をえる	大きな男となる	幸福な結婚をする		
市 広島県安芸高田		昔話の研究	まいまい (蝸牛)	○		○	c									
広島県尾道市		西瀬戸内の昔話	五分助	○			d									
広島県呉市		安芸国昔話集	一寸法師				d			○						
広島県江田島市		芸備昔話集	豆一				d			○						
広島県福山市		芸備昔話集	一寸法師				d			○						
広島県広島市		安芸国昔話集	大豆				d			○						
野町 岡山県苫田郡鏡野町		かみさいのむかしばなし	一寸法師				d			○						
岡山県真庭市		日本昔話通観	田螺			○	c									
岡山県真庭市		美作の昔話	田螺			○	c									
岡山県真庭市		中和村の民俗	田螺			○	c									
岡山県真庭市		中和村の民俗	田螺			○	c									
岡山県真庭市		蒜山盆地の昔話	まめくじ (なめくじ)	○		○	c									
岡山県真庭市		蒜山盆地の昔話	五分次郎	○		○	b			○						
岡山県真庭市		蒜山南麓昔話集	五分次郎	○		○	b			○						
岡山県真庭市		蒜山盆地の昔話	五分次郎	○		○	b			○						
岡山県真庭市		日本昔話通観	田螺	○		○	c									
岡山県新見市		中国山地の昔話	一寸法師	○		○	c									
岡山県新見市		中国山地の昔話	一寸法師	○		○	d			○						
岡山県新見市		三室むかしこつぷり	一寸法師				d			○						
岡山県新見市		哲西神郷町昔話集	田螺			○	c									
岡山県新見市		なんとむかしがあつたげな上	田螺			○	c									
岡山県高梁市		奥備中の昔話	一寸法師				b			○						
岡山県井原市		小田郡昔話集	ちびっこ				d			○						
岡山県岡山市		御津郡昔話集	田螺			○	c									
岡山県岡山市		御津郡昔話集	一寸法師				d			○						
岡山県岡山市		御津郡昔話集	一寸法師				c									
岡山県岡山市		石見の昔話	蝸牛			○	c									
島根県鹿足郡吉賀町		島根県邑智郡石見町民話集	一寸法師				d			○						
島根県益田市		島根県美濃郡匹見町昔話集	一寸法師				d			○						
島根県益田市		島根県美濃郡匹見町昔話集	一寸法師				d			○						

計	「小さ子」の地方別分布																
	dD型	dC型	dB型	dA型	cD型	cC型	cB型	CA型	bD型	bC型	bB型	BA型	aD型	aC型	AB型	AA型	奥羽 関東 中部 近畿 中国 四国 九州 南島 計
九六	二	一二	〇	〇	三二	〇	一六	〇	一二	八	一二	一	一	〇	〇	〇	
二五	〇	一八	〇	〇	一	三	〇	〇	〇	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	関東
七二	六	一五	二	一	九	〇	二七	〇	一	四	五	〇	一	〇	一	〇	中部
七	〇	三	〇	〇	三	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	近畿
四九	三	一一	一	二	二三	一	〇	一	一	四	〇	二	〇	〇	〇	〇	中国
九	一	三	〇	五	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	四国
三六	七	一〇	一	〇	一一	〇	五	一	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	九州
一六	二	一	〇	〇	一	〇	三	〇	五	〇	二	〇	一	〇	一	〇	南島
三一〇	二一	七三	四	八	八〇	五	五一	二	一九	二〇	一九	三	三	〇	二	〇	計

沖繩県宮古島市	沖繩県石垣市	鹿兒島県大島郡 与論町	鹿兒島県大島郡 知名町	鹿兒島県大島郡 伊仙町	鹿兒島県大島郡 伊仙町	鹿兒島県大島郡 天城町	鹿兒島県大島郡 徳之島町	鹿兒島県大島郡 徳之島町	鹿兒島県大島郡 徳之島町	鹿兒島県大島郡 徳之島町	鹿兒島県大島郡 徳之島町	鹿兒島県大島郡 徳之島町	鹿兒島県大島郡 徳之島町	鹿兒島県大島郡 徳之島町	鹿兒島県大島郡 徳之島町	鹿兒島県大島郡 徳之島町	鹿兒島県大島郡 徳之島町	鹿兒島県大島郡 徳之島町
ゆがたい四	日本昔話通観	日本の民話一二	沖永良部島昔話集	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話	徳之島の昔話
蛙	蛙	一寸法師	一寸坊	ねいぶとうん種	ねいぶとうん種	ぬまむいぢじや	あんじやぬしゅー	つしん太郎	ねいぶとうん種	ねいぶとうん種	ねいぶとうん種	ねいぶとうん種	ねいぶとうん種	ねいぶとうん種	ねいぶとうん種	ねいぶとうん種	ねいぶとうん種	ねいぶとうん種
〇			〇															〇
																		〇
〇	〇																	〇
c	c	d	b	b	b	d	b	b	b	b	b	b	b	b	b	b	b	b
	〇																	
		〇																
〇																		〇
〇	〇																	〇

伝承地	資料名	主人公	出自				事業			幸福			
			神の申し子と	脛や指などか	動物の姿をもつて	型記号	食物でかたぶら	鬼をく	魚な	型記号	打出の小槌をえる	大きな男となる	幸福な結婚をする
徳之島町	徳之島民話集	蛙			○	c	○			B		○	○
鹿児島県大島郡	島二	一寸小太郎		○		d	○		○	D			
鹿児島県大島郡	久永ナオマツ姫の昔話	一寸坊		○		b	○			B			
鹿児島県大島郡	福島ナヲマツ姫の昔話	蛙のような子		○	○	c	○		○	B		○	○
鹿児島県大島郡	奄美諸島の昔話	一寸坊	○	○		b	○		○	B		○	○
鹿児島県大島郡	旅と伝説一―七	蛙		○		a	○			B		○	○
鹿児島県大島郡	霧島山麓民俗資料調査報告書	一寸八分どん			○	d				D	○		
鹿児島県川辺郡	葛山民俗八	たみな(田螺)			○	c				D		○	
鹿児島県薩摩川内市	甌島昔話集	一寸法師				d		○		C			
鹿児島県薩摩川内市	甌島昔話集	たみな(田螺)			○	c				D		○	○
鹿児島県薩摩川内市	甌島昔話集	どんきゅう(蛙)			○	c			○	D		○	○
鹿児島県西之表市	種子島の昔話一	五分一			○	d				C	○	○	
鹿児島県奄美市	奄美大島昔話集	蛙	○			a				D		○	○
宮崎県宮崎郡清武町	半びのげな話	一寸法師				d				C	○	○	○
宮崎県宮崎郡	塩吹き白	みな(田螺)			○	c				D		○	○
宮崎県西都市	塩吹き白	すねこ太郎		○		b				C	○	○	○
宮崎県西都市	塩吹き白	こんまい子		○		d			○	C	○	○	○
大分県豊後大野市	直入郡昔話集	一寸法師				d	○			B			○
大分県杵築市	昔話研究一―一二	わくど(蛙)			○	c	○			B		○	○
大分県国東市	国東半島の昔話	わくど(蛙)	○		○	c				D		○	○
大分県国東市	国東半島の昔話	田螺			○	c				D		○	○
大分県竹田市	直入郡昔話集	親指太郎			○	d			○	D		○	○
熊本県天草郡	郷土研究五―六	田螺			○	c				D		○	○
熊本県球磨郡	球磨一三―六	田螺			○	c				D		○	○
熊本県阿蘇市	肥後の昔話	田螺			○	c				D		○	○
熊本県阿蘇市	民俗学四―七	田螺			○	c				D		○	○

日本の昔話の展開

大島 建彦



ご紹介いただきました大島でございます。

完形昔話とか本格昔話とか呼ばれるものの中で、「一寸法師」と名付けられるタイプが知られております。

『小学国語読本』の「一寸ボフシ」

私どもは、小学校の国語の授業で、この「一寸法師」の昔話について教わったものでございますが、それは「サクラ読本」として知られる『小学国語読本』の巻三に、「十五、一寸ボフシ」として取り上げられております。一通り読んでみますと、

オヂイサントオバアサンガアリマシタ。子ドモガナイノデ、

「ドウゾ、子ドモヲ一人オサヅケ下サイ」

ト、神サマニオネガヒシマシタ。

男ノ子ガ生マレマシタ。小指グラキノ大キサデシタ。アンマリ小サイノデ、一寸ボフシトイフ名ヲツケマシタ。

一寸ボフシハ、二ツニナツテモ、三ツニナツテモ、少シモ大キクナリマセン。オヂイサントオバアサンハ、シンパイシテ、

「一寸ボフシノセイガ、高クナリマスヤウニ」

ト、毎日、神サマニオイノリシマシタ。ケレドモ、ヤッパリ生マレタ時ノマ、デシタ。

一寸ボフシハ、十三ニナリマシタ。アル日、オヂイサントオバアサンニ、

「ミヤコへ行ッテ、エライ人ニナリタイト思ヒマス。少シノアヒダ、オヒマヲ下サイ」

トイヒマシタ。

一寸ボフシハ、オバアサンカラ、針ヲ一本モラヒマシタ。ソレヲ刀ニシテ、ムギワラノサヤニ

入レテ、コシニサシマシタ。ソレカラ、オワンヲモラツテ、舟ニシマシタ。オハシヲモラツテ、カイニシマシタ。

一寸ボフシハ、オワンノ舟ニノツテ、オハシノカイデジャウズニコイデ、大キナ川ヲノボツテ行キマシタ。ミヤコニツクト、トノサマノオヤシキヘ行キマシタ。

「ゴメン下サイ」

トイフト、トノサマガ出テオイデニナリマシタ。ガ、ダレモキマセン。

「ダレダラウ」

トイッテ、方々オサガシニナリマシタ。

「ドコニキルノダラウ」

トイッテ、庭ヲ見マハシナガラ、アシダヲオハキニナラウトシマシタ。スルト、ソノアシダノカゲニキター一寸ボフシハ、

「フンデハイケマセン」

トイッテ、アワテテトビ出シマシタ。サウシテ、「ケライニシテ下サイ」

トタノミマシタ。トノサマハ、

「コレハオモシロイ子ダ」

トイッテ、ケライニナサイマシタ。

三年バカリスギマシタ。一寸ボフシハ、アル日、オヒメサマノオトモヲシテ、遠イ所へ出カケマシタ。

トチュウマデ来ルト、ドコカラカ、オニガ出テ来テ、一寸ボフシヤオヒメサマヲタベヨウトシマシタ。

一寸ボフシハ、針ノ刀ヲヌイテ、オニニ向カヒマシタガ、トウトウツカマツテシマヒマシタ。オニハ、一寸ボフシヲツマンデ、一口ニノンデシマヒマシタ。

一寸ボフシハ、オニノオナカノ中ヲ、アチラコ

チラトカケマハッテ、針ノ刀デ、チクリチクリトツ、キマシタ。オニハ、
「イタイ、イタイ」
トイヒマシタ。
ソノウチニ、一寸ボフシハ、オナカノ中カラハヒ上ッテ、ハナノオクヲトホッテ、目ノ中へ出マシタ。サウシテ、針ノ刀デ目玉ヲツツキマハッテ、ピョコリト地メンヘトビ下リマシタ。
オニハ、目ノ中ガイタクテナリマセン。目ヲオサヘテ、一生ケンメイニニゲテ行キマシタ。ウチデノコヅチモ、ワスレテニゲテ行キマシタ。
オニノワスレタウチデノコヅチヲ見ルト、オヒメサマハ、
「コレハヨイモノガアル」
トイッテ、大ソウヨロコビマシタ。コレヲフルト、ナンデモジブンノ思フトホリニナルカラデス。ソコデ、
「一寸ボフシノセイガ、高クナルヤウニ」
トイッテ、オヒメサマハ、サツクウチデノコヅチヲフリマシタ。
一寸ボフシノセイガ、少シ高クナリマシタ。
「モット高クナレ、モット高クナレ」
トイヒナガラ、ナンベンモフリマシタ。一寸ボフシハ、ダレニモマケナイ大男ニナリマシタ。

というのでございます。皆さんがよくご存じの話も、大体これと同じようなものではなかったでしょうか。

御伽草子の『一寸法師』

この『小学国語読本』の「一寸ボフシ」というのは、御伽草子の『一寸法師』にさかのぼって考えられるものでございます。それによりますと、

中ごろのことなるに、津つの国難波くになにはの里はんべに、おほちうばと侍り。うば四十に及ぶまで、子のなきことを悲しみ、住吉すみやしに参り、なき子を祈り申すに、大明神だいまやうじんあはれとおぼしめして、四十一と申すに、ただならずなりぬれば、おほち、喜び限りなし。やがて十月とつきと申すに、いつくしき男子をのこをまうけけり。さりながら、生れおちてより後、背一寸ありぬれば、やがて、その名を、

いっすんぼふし
一寸法師とぞ名づけられたり。

と記されましたように、難波に住む年取った夫婦が、住吉大明神に祈ってもうけた子であったというものでございます。そのような一寸法師が、おわんの舟に乗って都に上り、三条の宰相殿を訪ねてその屋敷に仕えることとなりましたが、そこでは一つのたくらみをもって、その姫君を手に入れたように語られております。そのくだりを読んでみますと、

かくて、年月としつき送るほどに、一寸法師十六になり、背せいはもとのままなり。さるほどに、宰相殿に、十三にならせ給ふ姫君おはします。御かたちみ たてまつすぐれ候へば、一寸法師、姫君を見奉りしより、思ひとなり、いかにもして案あんをめぐらし、わが女房にようぼうにせばやと思ひ、ある時、みつもの打撒取り、茶袋ちやぶくろに入れ、姫君の臥しておはしけるに、はかりことをめぐらし、姫君の御口ぐちにぬり、さて、茶袋ばかり持ちて泣きみたり。宰相殿御覧じて、御尋ねありければ、「姫君の、わらはがこのほど取り集めて置き候ふ打撒を、取らせ給ひ御参り候ふ」と申せば、宰相殿おほきに怒らせ給ひければ、案のごとく、姫君の御口に付きてあり。まことは偽りならず、かかる者を都に置いて何かせん、いかにも失ふべしとて、一寸法師に仰せつけらる。一寸法師申しけるは、「わらはがものを取らせ給ひて候ふほどに、とにかくにもはからひ候へとありける」とて、心うちの中に嬉しく思ふこと限りなし。姫君は、ただ夢のこちして、あきれはててぞおほしける。一寸法師、「とくとく」とすすめ申せば、闇へ遠く行く風情にて、都を出でて、足に任せて歩み給ふ、御心の中、推し量らひてこそ候へ。あらいたはしや、一寸法師は、姫君を先に立ててぞ出でにけり。宰相殿は、あはれ、このことをとどめ給ひかしておぼしけれども、継母ままはのことなれば、さしてとどめ給はず、女房たちも付き添ひ給はず。

というように、姫君の口に米を塗り付けて、姫君に打撒を取られたと騒ぎ立てますと、宰相殿は

怒って一寸法師に言い付けて、姫君を追い出してしまおうというのでございます。それに続けて、鬼が島に渡って鬼退治を果たし、打出の小槌^{こづち}を得て背も高くなり、姫君と結ばれてめでたく栄えたというように結ばれております。そのような打撒の計略と幸せな結婚とのくぐり、子どもの読み物にふさわしくないというので略されたと言えますでしょう。

阿武隈山地の「指っこ太郎」

ところで、各地に伝えられた昔話を調べますと、必ずしも御伽草子や国語読本と一致するわけではございません。昭和43（1968）年12月に、阿武隈山地の一画を占める、福島県郡山市の旧中田村を訪ねて歩きました。うねうねと低い山並みが続く中には、幾つもの小さな集落が散らばっており、たばこの栽培や馬の飼育や養蚕などを営んでおりましたが、その厳しい仕事の合間を見て、かなり多くの昔話などを聞かせていただきました。それらの伝承者の一人で、駒板篠坂の吉田けさみさんという、明治40（1907）年のお生まれで、当時60歳ほどの年配の婦人は、駒板の地に生まれ育った方でしたが、時にご家庭の悩み事をも交えながら、主に親たちから聞いた話だと言って、合わせて28話の伝承を聞かせてくださったのであります。それらの昔話の中に、特に「指っこ太郎」というものがございまして、録音したものを聞いていただくつもりでしたが、テープが傷んで聞き取れませんので、それを翻字したものを読んでみたいと存じます。

昔ね、おばあさんがとなりであって、そうして、おばあさんが、やっばしその、おじいさんと二人でいて、子どもがさずからなかったんだね。そうしてこんど、山にいったところが、その親指にとげがささったんだ。そして、医者さまいったところが、「その何ともこれ、指がいたくてしょうがないから、はばりさしてください」っていったらば、そして、そのはばりさしたらば、そして、ちょこっといったと思ったらば、子どもだったそうなの。

と語り始められます。初めて聞いたときには、この「はばり」というのが、何のことやら分からなかったのですが、後で調べてみますと、漢方の鍼^{はり}の一つにあたる、双刃で先のとがったもので、切開や瀉血に用いられたということが分かりました。さらに、その誕生に続いて、

そして、指っこ太郎という名をつけて、それから、だんだんに育って「御飯を食べたい」。それでは、小さいから、一粒食べさせたらば、「一粒でなく二粒食べたい」。それから、だんだん食べて、それから、「何か楽しみあつか」ったら、「おれは魚売りになりたいんだ」。それで、魚売りになりたいってつって、小さいんだから、なじょうもないから、鯛^{いわし}一ぴきしよわせたそうだ。そして、鯛一ぴきしよつて、どこあるつって、小さいから売りようがない。それから、「鯛いんねかい、鯛いんねかい」つて、売ってあるつた。そうしたらば、何だか声が高いんだけれども、みえないんでもって、提灯をつけてみたらば、割り木のわっぱにはさまっていたそうだ、小さいからね。そうしてこんど、「あんた、鯛売りたいか」、「鯛売りさきたんだ」、「そんじゃあ、おれ一ぱい買ってやっから、おめえ泊つてげ」。そうして、泊つていくうちに、こんどは、山んぼというにのまって、「おめえみてえな小さいものはのんでしまふぞ」。それで、腹にのまってから、あばれたらば、「宝物くれつから出てくれよ、出てくれよ」つて。そうして、「宝物ほんとにくれんならば出ます」。そうして、山んぼがはき出したところが、小槌をもらったそうなの。それで、「その小槌で一つはたくと一寸育つ、二つはたくと二寸育つという小槌だから、これではたくと体が大きくなりますよ」と。そうして、大きくなって、「おばあさん、おじいさんが待っているんだらうから、行って安心させなさい」つて。ながくいる家だから、三日五日には帰つてこられない。そうして、大きくなってきたらば、「はあ、これは指っこ太郎で、さずけた子どもだ、うっちゃることはできないんだべなあ」つて。年としてはあ、おじいさん、おばあさんが、待つてもこないと思つたらば、

大きな体になってきたので、そうして、「こういうわけで、鯛(ついで)を売ってもらって泊ってきたけども、山んばにのまったから、腹であばれたらば、小槌をもらって、一つはたくと一寸育つ、二つはたくと二寸育つというので、それで大きくなってきた。「いやいや、こういう大きくなって帰られべと思わなかったよ」ってよろこんで、よろこんだために、おじいさん、おばあさんは、世をおえてしまった。

というように語られていきます。この指っこ太郎という子は、魚売りになりたいたって、イワシを背負って売り歩いたが、途中で山姥(の)に呑まれて、腹の中で暴れたために、宝の小槌をもらうことができ、それで体をたたくことによって、大きくなって帰ってきたというのでございます。しかも、それだけで終わらないで、指っこ太郎はツルを助けると、そのツルが女房となって、機織りの技で助けてくれたが、一人の子どもを残して立ち去り、その後を訪ねていくと、裸のツルが目の玉を渡したと結ばれるのであります。幾らかでも昔話をご存じの方は、驚かれるのではないかと思いますのですが、「一寸法師」の昔話に、「鶴女房」の昔話が結び付いて、「蛇女房」の趣向が紛れ込んだと認められるのでございます。初めに最も極端な事例を出したのですが、とにかく「一寸法師」の昔話は、かなり複雑な変化を遂げて伝えられています。

南部五戸の「すねこたんぼこ」

それとは別の事例として、能田多代子氏の『手つきり姉さま：五戸の昔話』から、青森県三戸郡五戸町の事例を挙げてみましょう。この南部の五戸というのは、かつては街道筋の要衝として栄えながら、新しい時代の発展から取り残された所であります。その地の旧家に育った、明治23 (1890) 年のお生まれの著者は、極めて豊かな伝承を受け継いでおられたことを、私もいつも伺って存じ上げております。そのような著者の伝承の中に、「すねこたんぼこ」の昔話がありました。爺(すね)の脛がはれてきて、これに茨を通したら、かわいいおぼこが生まれたが、一向に大きくならないというので

す。そのすねこたんぼこという子は、村の金持ちの家に遊びに出掛けて、娘の口の回りにシトギをなすり付け、「姉さまがシトギを取って食べた」と言っていて泣いておりました。そのために、娘は母親に追い出されて、すねこたんぼこに連れられていきましたが、その途中で、子どもにつかまったネズミを逃がしてやり、お礼に延命小槌という宝をもらって、その小槌でたたくと大きくなり、立派な長者となって帰ることができたと語られておりました。

南蒲原の「田螺息子」

それとともに、岩倉市郎氏の『南蒲原郡昔話集』から、新潟県三条市運場の例をも挙げておきたいのでございます。その著者の岩倉氏は、鹿児島県の喜界島の出身でありましたが、優れた速記の技術をもって、多くの昔話の採録を進められたことで知られております。そのような昔話の採録の中で、南蒲原の有数の山村にあたる吉ヶ平(よしがひら)峠のふもとの運場では、明治35 (1902) 年のお生まれで、当時30歳ほどであった今井そよさんから、50話の昔話を聞いておられるのであります。この今井さんの伝承の中に、「田螺息子」というのがありまして、それによりますと、爺婆が村の鎮守に祈って、つぶすなわちタニシの子をもうけましたが、やはり大きくならなかったというのです。その子が22歳で家を出て、長者の家に若い衆として雇われましたが、姉娘の口にこうせんを塗り、「あねさがこうせんを盗んでなめるので、俺(かかあ)にならねば勘弁しない」と言って駄々をこねます。そこで、姉娘に才(さい)槌(づち)でたたかれますと、ジャンジャラジャンという音とともに、つぶは立派な婿となって、二人そろって家に帰ったというものでございました。この事例のように人間としてあられるだけではなくて、タニシを始め、カタツムリ、ナメクジ、蛇、カエルなどのような動物の姿であられるという、思いがけない変化を示しているのでございます。

小さ子の呼び名

ここに取り上げる昔話の範囲は、初めに小さな姿であられて、ついには立派な男になるという

ものでございます。柳田国男先生の『桃太郎の誕生』には、「桃太郎」や「瓜子姫」などのような、これと通ずるタイプの主人公について論じられておりますが、同じ著者の『物語と語り物』にも、「一寸法師譚」という一篇がありまして、『吉蘇志略』の記事を引くことによって、そのようなタイプの主人公が、古く「小さ子」と呼ばれたのではないかと説かれております。どちらにしても、一寸法師のタイプの人物を取り上げるのに、「小さ子」という名称を用いるのが、最も適切なのではないかとと思われるのでございます。

そのような「小さ子」の昔話は、『日本昔話名彙』の分類によりますと、完形昔話の「誕生と奇瑞」の部における「一寸法師」を始め、「不思議な成長」の部における「蛇息子」「田螺長者」「蛙智入」「蛞蝓智」などを含むものでございます。また、『日本昔話大成』の分類によりますと、本格昔話の「誕生」の部における「一三四 田螺息子」「一三五 蛙息子」「一三六 一寸法師」「一三七 親指太郎」「一四〇 力太郎」の一部のほか、笑話の「狡猾者譚」における「五二一 殿様と小僧」の一部にもわたるものでございました。そして、この『日本昔話大成』の「一三六 一寸法師」というのは、婿入りや鬼退治の有無によって、ABCの三つの亜型、サブタイプに分けられていたことを付け加えておきます。お手元のプリントでは、平成12年の時点における手持ちの資料についてまとめたのでございますが、とりあえずこの一覧表の項目に沿いながら、「小さ子」の問題点について考えていきたいのでございます。

初めに、そのような「小さ子」の名前でございますが、実は一寸法師というものは、室町時代のころから流行し始めたようでありまして、その時期の『日葡辞書』には、ローマ字で「Issunbôxi」と記されたものに、「Fiquũto」という注が付けられております。この「Fiquũto」というのは、矮小の「矮」と人物の「人」という字が当てられるもので、背の低い男を指したのかと思われまふ。喜多村信節きたむらのぶよの『嬉遊笑覧』にも、

俗ひきょうとに矮人を一寸法師といふ。法師は小法師といふより小さきものを名づく。能の狂言に小児を

かな法師と言へるはそのかみの俗称なり。

と説かれており、俳諧はいかいなどの多数の用例が挙げられております。なお、『一寸法師』と同じ時期に作られた、それとは別の草子にあらわれる、「小男」という主人公の呼び名は、一層ありきたりの言葉であったとみられます。またもう一つ、「ひきょうとの物語」ですが、写本では平仮名で「ひきょう」とあって、それに「殿」と「物語」とを添えて、これで「ひきょう殿物語」と読ませております。しかし、そのような文字で書かれていても、それが「矮人の物語」に当てられるとすれば、やはりそれほど珍しいものとは言えないのであります。

それに対して、民間の昔話では、この一寸法師というほかに、一寸太郎、五分次郎、五分一、二分一、豆蔵、豆助、豆一などと呼ばれております。一寸太郎や五分次郎というのは、一寸法師の影響を受けたものかもしれませんが、あまり気の利いた名とは言えないようで、五分一、二分一という方が、かえって面白く感じられるでありません。豆蔵や豆助というのも、体の小さい人を言うのでありますが、特に豆蔵というのは、滑稽な身振りや口上によって、観客を笑わせる芸人を指しておまして、『浪花方言』あるいは『俚言集覧』に、全く同じ文句が連ねられております。そこには、

ひこはち まめぞう也。

と記されておりますように、はなしはなしの者、咄はなし上手の通り名に通ずるとも見られるのであります。

そのほかに『手つきり姉さま』の事例のように、「すねこたんぼこ」「すねこたんぼこ」、あるいは「親指太郎」「指太郎」などといって、異常な生まれ方を示すものが伝えられております。それに加えて、『南蒲原郡昔話集』の事例のように、タニシ、カタツムリ、ナメクジ、蛇、カエルなど、動物の姿であられるものが挙げられるのでございます。それらの多くの昔話では、ただ一つの事例を除いて、すべて男を主人公として語られております。ただ一つ、岩倉市郎氏の『南蒲原郡昔話集』における、新潟県見附市の事例だけが女を主人公として語られており、タニシが美しい女となって、

すばらしい男と結ばれるという形を取るのであります。

小さ子の出自

いずれにしても、それらの小さ子の伝承は、広い意味の昔話の中でも、完形昔話あるいは本格昔話に属するものであったと認められます。この完形昔話とか本格昔話とかいうのは、大体異常な主人公の一代記ふうに組み立てられておまして、発端と展開と結末という三つの部分に分けてとらえられるのであります。そのような部類の昔話は、まず主人公の異常な誕生に始まり、次いでその異常な事業に及んで、更にその異常な幸福で結ばれるものであると言ってもよいでしょう。ここでも、小さ子の昔話の主要な要素を取り上げるのに、完形昔話あるいは本格昔話の構想に沿いながら、発端と展開と結末という三つの部分に分けて進めていきたいのであります。

一覧表の初めのところをご覧くださいと、お分かりになりやすいかもしれません。差し当たり、小さ子の異常な出自については、三つの要素を取り上げることができます。第一には、神の申し子として生まれること、第二には、脛や指などから生まれること、第三には、動物の姿であられることとございます。そのほかに、「桃太郎」や「瓜子姫」などのように、植物の中からあらわれるというものもございますが、それぞれ別に明らかなタイプとしてとらえられますから、ここでは、あえて省かせていただくことといたします。

第一には、神や仏の申し子として生まれる、すなわち、神や仏に祈って子どもを授けられるというものでございます。先ほども読みましたように、御伽草子の一寸法師は住吉大明神の申し子としてあらわれますが、この一寸法師だけに限らないで、武蔵坊弁慶や百合若大臣などのように、中世の物語草子の主人公には、神や仏に祈って授けられたものが少なくありません。そのような人物の性格は、産みの親から受け継がれたというよりも、むしろ神や仏から受け継がれたものと言ってもよいのであります。そういうわけで、神の申し子として生まれるというのは、そのまま神の子の誕生を示すようでございます。一層古い時代には、三輪

や賀茂などの神々の物語で、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、尊い神が清らかな乙女に憑りついて、優れた神の子を産ませたと伝えられております。そのような神と人との結婚が、そのまま信じられなくなると、人間同士の夫婦が、神の意志を受けることによって、優れた子をもうけるという形に変わってまいります。そういう意味では、神の申し子の趣向も、中世風の信仰の合理化と言ってもよいのではないのでしょうか。

お手元の一覧表に示されましたように、小さ子の昔話では、神の申し子の趣向が、後の二つの趣向と結び付いて、広く全国にいきわたっております。御伽草子の『一寸法師』では、住吉大明神の申し子として生まれたと申しますが、民間の昔話では、氏神、鎮守、山の神、水神、観音、薬師、地藏など、様々な神や仏に祈って、優れた子をもうけたと語られております。そのような「小さ子」のあらわれ方は、神の恵みの深かったことを示していると言えましょう。

第二には、まともに女の胎から生まれるのではなくて、女または男の脛や指など、どこか変わった所から生まれるという趣向でございます。一層細かに見ていきますと、唾つばや粥かゆが脛に付いて膨れてきたとか、あるいは親指の腹が膨れてきたとか、あるいは膝ひざの出来物が膨れてきたとかいうように、様々な語り方が行われております。いかにも珍しい趣向のようではありますが、男女の性行為によるものではない、処女懐胎のようなものを暗示するのではないのでしょうか。この珍しい趣向も、やはり国の南北にわたっておりますが、特に奥羽地方を始め、新潟県、岡山県、奄美諸島などのように、昔話の伝承の豊かな地域に、とりわけ多く知られております。そして、青森、岩手の両県では脛から、山形、新潟、岡山の諸県では指から、南西諸島では膝からというように、少しずつ違った形で伝えられております。さらに、四国地方と九州本島とでは、全く認められないというのも注目されます。

第三には、人間の姿で生まれなくて、タニシ、カタツムリ、ナメクジ、蛇、カエルなど、動物の姿で生まれるというものでございます。その動物というのも、明らかに仮の姿であって、結局は人

間の姿に帰るわけでございます。それらの事例の中には、まともに人間の胎から生まれないで、前に挙げましたように、脛や指から生まれるというのが、ごくわずかばかり認められますが、大方は神の御告げによって、あるいは動物自身の申し出によって、だれかに拾われて子どもになったと語られているのであります。その種の動物として、まずタニシというのは、幾らか思いがけないかもしれませんが、やはり蛇やカエルと同じように、水界とかかわり深いものでありまして、水神の性格を帯びていたと考えられます。この動物の姿であられる話は、ほぼ全国にわたって伝えられておりますが、特にタニシというのが、最も広い分布を示しております。またカタツムリというのは、主に新潟県から、ナメクジというのは、専ら中国地方から、カエルというのは、南島を含む九州からというように、いずれも偏った分布を示しております、タニシの例とともに伝えられるのでございます。

小さ子の事業

小さ子の昔話の分析を進めてまいりまして、休み時間の前には、昔話の出自の部分について考えてみました。そこで、次にこの昔話の展開の部分では、そのような小さ子の事業に及ぶわけですが、まず、おわんの舟に箸のかいで、水の上を漂っていくというのが、御伽草子の『一寸法師』で、最も印象深い場面として知られております。はるかに古代の物語では、少彦名命すくなひこなのみことという小さな神が、蘿摩かがみの舟に乗って、波の間に漂ってきたと伝えられております。それから、大隅の正八幡や常陸の蚕影山こかげさんなどでは、尊い女神がうつほ舟に込められて流れ着いております。それと比べられるのが、昔話の「桃太郎」や「瓜子姫」などで、いずれも中のうつろなものにこもって、川上から流れ下って来るのであります。小さ子の昔話の主人公が、タニシやカタツムリとしてあらわれますのも、やはり中のうつろなものにこもって、水のほとりにあらわれるのと変りございません。

それに対して、おわんの舟というのは、同じ古めかしい信仰とかかわりながら、一層新しい気の利いた工夫であろうと思われれます。現に民間の昔

話では、おわんの舟の趣向は、必ず出てくるものではなくて、地域によっては、笹の舟、木の葉の舟、赤貝の舟などとも語られております。しかしながら、青森県の五戸町の例では、一寸太郎が「竜王様になるから舟をはいでくれ」というので、おわんの舟と針とをやって、川に流したと語られておりました。やはり、水辺における神の出現を表すものであったと思われれます。石田英一郎氏の『桃太郎の母：比較民族学的論集』にも説かれましたように、様々な「小さ子」の物語を通じて、その母神の存在とともに、水界との関連を認めなければならぬでありましょう。

このおわんの舟のほかにも、巧みに馬を乗りこなして、女のもとに近づく、食べ物のたくらみによって、女を手に入れる、あるいは鬼をからかったり、これをやっつけたりする、そのような鬼だけでなく、魚、鯨、オオカミなどに呑み込まれるという、様々な趣向を挙げることができるのであります。

小さ子の妻もとめには、ほぼ二通りの語り方があります。その一つとしては、体の小さいものが馬を乗りこなす、車を操って年貢を届ける、あるいは魚を売り歩くともいうのでございます。もともと村の暮らしでは、一人前の仕事がきちんと決まっております、何とかそれを成し遂げなければ、一人前の男にはなれないのであります。そういう意味では、小さ子の昔話もまた、ありのままの生活を反映していたと言えましょう。このたぐいの趣向は、一覧表には掲げられておりませんが、奥羽から九州まで全国にわたって、数十例も数えられるのでありまして、その本来の意味につきましても、もっとよく考えなければならぬのでありましょう。

それにしても、「小さ子」が馬に乗るのに、その耳の中に潜んで、掛け声だけで馬を操るさまは、足駄の下から案内を請うて、主人に笑われるのと同じように、いかにも面白い語り方でございます。既に少彦名命の物語から、「小さ子」の印象を強めるために、様々な工夫が試みられてまいりました。そういえば、『竹取物語』のかぐや姫がかごの中で養われ、一寸法師がおわんの舟に乗るという語り方にも、それと同じような気持ちをうかが

うことができます。御伽草子の『一寸法師』と同じ時期には、『小男の草子』や『ひきう殿物語』などでも、それぞれ「小さ子」の成功について語られておりますが、その『小男』の一本には、やはり声はすれども姿は見えず、よくよく尋ねれば、草の陰や木の陰に、何やら動いていたという記事が見られます。さらに、『ひきう殿物語』の方では、主人公が女房と契りを結ぶに当たって、「日は、箱へ入、てんじゃうへあげ、よるは、とりおろし給、色々さまさまの、たはぶれなどにて、くらし給ふ」と語られておまして、幾らか猥雑な気分も加わってくるのであります。そういうわけで、『一寸法師』の笑いというのも、下掛かったものになりかねなかったのでございます。

次には、食物によるたくらみであります。お手元の一覧表では、「食物でたぶらかす」と記されておりますが、もっと詳しく申しますと、主人公の小さ子は、米、もち、しとぎ、こうせん、そば粉など、何らかの食べ物を持って、妻もとめの旅に出るのでございます。それから、長者やだんなのもとに住み込んで、夜のうちに娘の口に、それらの食べ物を押し込み、あるいは塗り付けて、大事なものを取られたと泣きわめきます。その家の主人が娘をしかり、小さ子の申し出のとおり、その嫁にやっぺてしまいます。娘にとっては無実の罪を負わされるわけで、全く残酷極まりない仕打ちでございませぬ。すべて本格昔話の世界では、主人公のすばらしい成功だけが取り上げられますので、そのほかの人物の心情などは省みられないのでございませぬ。

それにしても、米、もち、しとぎ、こうせんなどと、食べ物の種類は変わっても、皆大事な主食にほかなりませぬ。特にしとぎというのは、しろもちともおからことも言ひまして、穀物を水に浸して突き砕いたものでございませぬ。また、こうせんというのは、はったい、炒粉などともいって、穀物を炒ってはたいたものでございませぬ。どちらにしても、もともとは主食のたぐいとされていたものであります。今日の私どもならば、こうせんは湯でかいて食べますけれども、年配の方々の中には、そのままべろりと呑み込んで、ちっともむせないという、器用な方々も少なくなかったので

あります。米やもちはもとより、しとぎやこうせんというのもまた、男女の契り結びの食物として用いられたものでございませぬ。皇太子殿下のご成婚に当たって、「三日夜の餅」というものが供えられたのを覚えていらっしゃる方も多いのではないのでしょうか。村の暮らしの中では、「三日夜の餅」というものはないのですが、婚礼の席では「一杯飯」とか「高盛り飯」とかいつて、^{しゅうとめ} 姑さんが嫁さんのために山盛りの飯を盛り付けることが行われます。嫁さんは大概一口だけ食べて、婿さんが残りを食べてやるので、男と女とが一つの食べ物を食べることが、夫婦の契り結びにあたるのであります。昔話の小さ子は、極めて残酷な方式によって、その契り結びを果したわけでありまして、これも暮らしの仕来りを反映したものではないかと思われませぬ。この昔話の趣向は、奥羽から九州、南島まで伝えられており、米やもちよりも、こうせんやはったいというのが、最も多く用いられております。

そのような食べ物による悪巧みだけで、驚いてはいられませぬ。南島の一寸法師にあたる「ねいぶとうん種」という話がありまして、一層悪辣な手段によって、殿様の地位を奪い取るように語られております。すなわち、殿様は小さ子に向かって、「自分が帰ってくるまでに、幾くわ耕したか、数えておけ」と言い付けますと、小さ子は殿様に向かって、「馬に乗ってここに来るまでに、幾足走ったか数えられるか」とやり込めますので、殿様はすっかり感心して、その子をもらって帰るまではよいのですが、それから先では、小さ子は様々な悪巧みをもって、とうとう殿様の代わりになってしまうのであります。例えば、殿様が一人娘によい着物を着せ、小さ子に破れた着物を着せて、「みかんを拾っておれ」と命じますと、小さ子は自らよい着物を着て、一人娘に破れた着物を着せたので、殿様が小さ子と間違えて、一人娘を射殺してしまうという、極めて残酷極まりない話でございませぬ。そのような悪巧みさえも、やはり知恵の働きとして認められたわけではございませぬ。

ところで、小さ子の求婚に当たって、異常な能力の発揮は、全く別の部面にもあらわれてまいります。御伽草子の時代にさかのぼりますと、『小

男の草子』や『ひきう殿物語』の主人公は、共に優れた歌の才能によって、美しい女房と結ばれるのでありました。『ものくさ太郎』の主人公は、決して小男ではありませんが、やはり妻もとめに歌の才能を示しております。極めて興味深いことに、幾らか違った形ではありましても、確かに同じ一つの歌が、『小男』『ひきうと』『ものくさ太郎』のどれにも取られております。『小男の草子』によりますと、「三日月のほのかに見えていりぬるはそらやみとこそいふべかりけり」という歌でありまして、大した歌だとは思われないのですが、それが相手の女房を感動させたと言われております。昔話の「皿々山」や「山田白滝」などと比べても、その程度の作ならば、余り自慢できそうにも思われません。つまり、小さ子の歌の才といっても、ただ当意即妙の機知だけが重んじられたのであります。なお、『小男の草子』では、『浄瑠璃十二段草子』の大和言葉のように、艶書すなわちラブレターの文句が、なぞの形を取って書かれております。男の方からなぞを掛けておりますが、それを解いていく趣向は、昔話の「播磨糸長」などを思い起こさせます。妻もとめの知恵の働きには、実に様々な形を挙げることができるのであります。

その次には、小さが鬼をからかって、これをやっつけるというものでございます。最もよく知られておりますのが、姫のお供で清水にお参りすると、鬼があらわれて姫を取ろうとしたというもので、御伽草子の『一寸法師』によりますと、姫と共に興がる島に吹き付けられ、鬼があらわれて一寸法師を呑んでしまうのであります。この興がる島というのは、御伽草子の『御曹子島わたり』にも出てまいりますが、ただ風変わりな島というほどの意味で、ある種の異郷の気分をもって受け取られたのでありましょう。『御曹子島わたり』の興がる島は、その名も王せん島と呼ばれて、隠れもない馬人島として語られております。この草子の主人公は、次々にそのような不思議な島々を過ぎて、ついには喜見城の都で朝日天女と契りを込め、首尾よく大日の法を写すことができました。それから、鬼の王に追われて逃げ走るといのは、『梵天国』などの草子、あるいは昔話とも通ずる

ものであります。大方は、そのような苦難を乗り越えるのも、幸福な結婚のためであったと言えます。各地の昔話を比べ合わせますと、桃太郎の鬼が島征伐にしても、もともとは妻もとめのためではなかったかと考えられます。昔話の主人公を中心に、その家門の繁栄を語るためには、必ずそのような結婚の一条を必要としたためでございます。一般に桃太郎の昔話では、いわば童話化の方向をたどって、ただ鬼退治の冒険だけが強調されて、肝心の結婚の目的が消えかかっております。そして、一寸法師の昔話でも、同じような変化の傾向を認めることができるのでございます。

そこで、御伽草子の『一寸法師』で、鬼退治のくだりを読んでみますと、

いづくともなく、鬼二人来りて、一人は打出の小槌を持ち、いま一人が申すやうは、「呑みて、あの女房取り候はん」と申す。口より呑み候へば、目の内より出でにけり。鬼申すやうは、「これはくせものかな。口をふさげば、目より出づる」。一寸法師は、鬼に呑まれては、目より出でて飛び歩きければ、鬼もおぢをののきて、「これはただ者ならず、ただ地獄に乱こそ出で来たれ。ただ逃げよ」と言ふままに、打出の小槌、杖、しもつ、何に至るまでうち捨てて、極楽浄土の乾の、いかにも暗き所へ、やうやう逃げにけり。

というように、ごく簡単に記されております。御伽草子の版本の絵には、その主人公の一寸法師が、針の刀を持って暴れるさまが描かれております。「文学」32巻1号に掲げられました、佐竹昭広氏の「御伽草子における中世説話の問題」によりますと、そこでは、針の呪力が重要な要素とされており、難波の針売の伝承を経てきたものかと説かれております。

この鬼退治の趣向は、日本の各地の昔話を通じて、かなり根強い人気を集めております。島原半島の例によりますと、桃太郎ではない田螺息子までも、やはり鬼退治に出掛けていくように語られております。ただ姫と連れ立って行きますと、いきなり鬼の襲来を受けるというだけではなくて、

たまたま鬼の相撲を見かけて、「赤鬼勝った、青鬼負けた」などと言って、からかうものも知られております。不審に思った鬼が、どうしても小さ子を見付けられないで、そのまま退散するというものもありますし、さらに、やっと小さ子を見付けだして、一口に吞んでしまうというのもございます。その後で、小さ子が鬼の体の中で暴れ回るのは、先に挙げたものと同じでございました。小さ子が鬼を苦しめるという昔話は、奥羽から九州まで、全国にわたって知られておりますが、特に中国、四国、九州では、鬼の相撲をからかうというように伝えられております。

小さは鬼に吞み込まれるだけではなくて、ほかのものにも吞み込まれるのであります。大方は魚のサケやコイなどでありますが、極端なものは鯨に吞み込まれるものも挙げられます。あるいは、牛に食われてそのはらわたにおさまり、そのはらわたごとオオカミに食われるというものもありまして、ヨーロッパの親指太郎の冒険と通ずるものと言えましょう。日本の事例としては、極めて少ないのでありますが、やはり一国の南北にわたっており、かなり重要な趣向のように思われます。実は鬼に吞まれるというのも、この趣向の発達したものではないかと考えられます。どちらにしても、生きるか死ぬかという厳しい試練を乗り越えて、初めて一人前になることができるという、成年戒、イニシエーションの民俗を反映したものと言えるかもしれません。

小さ子の幸福

そこで、いよいよ結末の部分に入って、小さ子の異常な幸福に及ぶのでありますが、昔話の主人公の幸福というのは、ほぼ結婚と致富、すなわちよい配偶者を得ることと、それから富貴の身となることという、二つの趣向に帰すると言ってもよいのであります。ただ小さ子の場合に限っては、大方異常な成長を遂げて、立派な男となったように語られており、その道具立てとして、しばしば打出の小槌というものが持ち出されます。

この打出の小槌という宝物は、何でも望みどおりの品を打ち出すことができるというもので、多くの文芸や芸能では、福神の大黒天がこれを携え

ていたというのですが、『平家物語』や能の狂言などでは、恐ろしい鬼がこれを持ってあらわれてまいります。御伽草子の『一寸法師』でも、この打出の小槌が、極めて重要な役割を果たしており、その時代に流行したものが、そのまま取り入れられたように思われます。現に民間の昔話では、打出の小槌がなくてはならないものではなくて、それも鬼の持っていたものとは限りません。ネズミが持っていたというのは、大黒天とかかわるものと見られますが、相手の女が持っていたとも、小さ子自らが持っていたとも伝えられております。また、海から持ってきたとも言いますが、「竜宮童子」「隠れ蓑笠」「聴耳頭巾」などのように、異郷の神秘的な力を示していたのかもしれない。どちらにしても、打出の小槌のモチーフは、ほぼ全国に行きわたっておりますが、ただ新潟県などで語られていないのは、割合に新しい流行によるためではないかと思われます。

それでは、仮に打出の小槌がなくても、どうして立派な男になれたかという、そのいきさつについては、様々な形で語られております。例えば、馬にけられ、鳥に突かれ、魚に吞まれることによって、そのまま大きくなるとか、あるいはお宮に参り、池に落ち、風呂に入ることによって、そのまま大きくなるとかいうのであります。特に女の人の手によって、風呂のふたをかぶせられ、石の上で踏まれ、ほうきや槌でたたかれ、そのまま大きくなったというものが、極めて多く知られております。恐らくは優れた素質を備えた男が、そのような女の援助によって、立派な男に生まれ変わるというのが、この昔話の重要な趣向ではなかったかと思われます。

その生まれ変わりの道具は、必ずしもことごとしい宝の槌でなくても、何でもない身の回りの品でもよかったようでございます。例えば、岩手県紫波郡の昔話では、小蛇が娘にわら打ち槌でたたかれて、たちまち美しい男になったと伝えられております。そのほかにも、日本各地の田螺息子は、有り合わせの槌でたたかれ、あるいはきねでつぶされたというだけで、立派な男に生まれ変わったと語られております。どちらにしても、生まれつき優れたものならば、たまたま「小さ子」の姿を

取っていても、いずれは立派な男になり変わるので、きっかけとなるのは有り合わせの槌や石でも構わなかったようであります。しかしながら、それがただの槌で済まなくなると、様々な説明を加えたいのでありましょう。御伽草子の『一寸法師』と同じころに、先ほども紹介しました『ひきう殿物語』というのが作られています。その主人公の矮人は、清水の観音に腰を打たれて、たちまち一尺五寸から六尺五寸の身の丈になったと語られます。それから御伽草子の『一寸法師』のように、打出の小槌で打つことによって、立派な男に生まれ変わったという形に落ち着くのであります。

いわゆる「小ざ子」には限りませんが、一般に本格昔話の主人公は、ついに異常な幸福をつかむのであります。その主人公の幸福というのも、先に述べましたように、結婚と致富という2点にまとめられるのでありましょう。特に幸せな結婚というのが、その主人公の半生にとって、大きな区切りにあたるものでありまして、それだけ重要な意味を持っていたと思われまゝ。いわゆる小ざ子などは、食べ物のおくらみによって、一応は美しい女を得ているのでありますが、二人の男女の関係は、それだけで安定しているわけではございません。その女の助けによって、立派な男に生まれ変わることで、二人の男女の関係は、初めて安定したものとなるのでありましょう。あらかじめ決められた運命によって、素直な優しい女が、優れた強い男と結ばれるというわけでございませぬ。中国や九州などでは、そのような女の身の上が、しばしば三人娘の末っ子として語られているのは、「蛇簞入」の水乞い型、「猿簞入」の昔話とも通ずるものでございませぬ。娘の親が小ざ子と約束して、「だれか一人嫁に行かないか」というと、上の二人の娘は、「そんなことは嫌だ」と断りますが、一番末の娘だけが、「それならば私が行きましょう」と聞き入れます。その小ざ子が、立派な花婿となってあらわれますので、二人の姉は、大層うらやむという結末が付いております。

先にも述べましたように、一寸法師の昔話は、専ら子ども向けに語られますので、大事な結婚のくだりは、とかく粗略にされがちでありました。

各地の伝承の中には、鬼を負かして打出の小槌を取って、「それでは娘の婿にならないか」と言われて、親孝行のために自分の家に帰ったというのがあります。何のために苦労したのかさっぱり分からないのでありますが、幸せな結婚の代わりに、金持ち、分限者になるという、致富のくだりが強調されるのであります。そこでは、望みどおりの品を打ち出す、打出の小槌というものが極めて重要な役割を果たしていると言えまゝ。

ところで、様々な致富談というのは、しばしばまね損ないの失敗という趣向を伴っております。例えば、「花咲かじい」「へひりじい」「こぶ取りじい」など、「隣の爺」と呼ばれる昔話は、まね損ないの失敗を伴うものでございませぬ。中国や四国や九州では、主人公の小ざ子が小槌を得て、「こめくら出る」と言って打つと、米の倉が幾つも出てまいります。隣の子どもがそれをまねて、「こめくら出る」と言ったら、小さな盲人がぞろぞろと出てきたという、ふざけた結末で終わっております。これなどは障害者への差別ともかかわりませぬから、今日では不適切な趣向と言わなければならないのですが、かつてはそのような心ない語呂合わせがもてはやされたのであります。先に触れましたように、南島の「ねいぶとうん種」などは、知恵の働きで殿様をやり込めて、ついには殿様にとって代わるのですが、やはり笑話化の傾向を著しく示しております。

小ざ子の地方別の変化

これまで、小ざ子の昔話を三つの部分に分けて、それぞれ重要な要素について述べてまいりましたが、それらの要素が結び付いて、どのような型にまとめられるかを考えてみたいと思います。最後の一覧表をご覧くださいと、分かりやすいかもしれませぬ。

まず、異常な出自について、お手元の一覧表では、三つの要素を挙げておいたのですが、初めの申し子は、後の二つと結び付いておりますから、これを別に扱うこととして、後の二つを中心に、四つのタイプを挙げておきました。すなわち、

a 脛や指などから生まれるうえに、動物の姿

であられるもの。

- b 脛や指などから生まれるが、動物の姿であられないもの。
- c 脛や指などから生まれないが、動物の姿であられるもの。
- d 脛や指などから生まれないし、動物の姿でもあられないもの。

というように、四つの型を挙げたのであります。

次に、異常な事業であります。そこに三つの要素を挙げた中で、魚などに呑み込まれるというのは、割合に少数しか知られておりませんから、むしろこれからの研究に任せるとして、差し当たり先の二つを中心に、四つの型を挙げておきたいと思えます。

- A 食物の策略によって、娘と結ばれるうえに、身軽な動作によって、鬼を苦しめるもの。
- B 食物の策略によって、娘と結ばれるが、そのような鬼退治とはかかわりないもの。
- C そのような妻もとめとはかかわりないが、身軽な動作によって、鬼を苦しめるもの。
- D そのような妻もとめとはかかわりないし、そのような鬼退治ともかかわりないもの。

というように、四つのタイプにまとめられるのでございます。最後の異常な幸福の部分では、それほど著しい変化を示すわけではありませんから、ここではあえて取り上げないことにいたします。

そういうわけで、異常な出自および異常な事業について、それぞれ四つの型が挙げられますので、両者の組み合わせによって、理論上は16通りの組み合わせが考えられます。実際には、その中の幾つかの型が、各地で語られるのであります。そこで、二つのアルファベットの組み合わせによって、小さ子の昔話の変化をたどってみたいと存じます。

まずaの「脛や指などから生まれるうえに、動物の姿であられるもの」は、ただ5例しか知られておりませんが、異常な事業と結び付けますと、aA型とaC型というのは、全く伝えられておらず、aB型というのが2例、aD型というのが

3例だけあらわれてまいります。aB型は新潟と南島、aD型は岩手と新潟と南島というように、南北の両端に分かれてあらわれてくるのは、極めて興味深いのであります。bの「脛や指などから生まれるもの」、cの「動物の姿であられるもの」と比べますと、このaという型が分化して、bとcという型になったものか、それともbとcという型が複合して、aという型ができたものか、たやすくは決められないのであります。どちらにしても、脛や指などから生まれ、かつ動物の姿であられるというのは、誠に神秘的な生まれ方であったと認められます。それはBの妻もとめと結び付いておりましたが、Cの鬼退治とは結び付いておりません。そのような異常な事業との結び付きによっても、かなり古いものではないかと考えられるのであります。

そこで、aについての結論は、しばらく保留して、bの「脛や指などから生まれるが、動物の姿であられないもの」に進みたいと存じます。このbのタイプは、全体で61例であります。異常な事業と組み合わせますと、bA型が3例、bB型が19例、bC型が20例、bD型が19例というように数えられ、妻もとめとも鬼退治とも同じように結び付いているのであります。しかも、このbのタイプは、ほぼ南北にわたって伝えられており、奥羽地方、新潟県、岡山県など、昔話の伝承度の高いところで、最も多く知られております。そして、南島を別にいたしますと、四国と九州とにほとんど見当たらないというのは、先に触れたとおりであります。妻もとめと結びついたものと、鬼退治と結びついたものとは、ほぼ並行してあらわれます。中国地方にも7例出てきて、その4例が妻もとめとかかわりなく、鬼退治とかかわりあるのは、最後のd型ともつながるものとして注目されます。

次に、cの「脛や指などから生まれないが、動物の姿であられるもの」でございます。このcのタイプは、全体で138例であります。異常な事業と組み合わせますと、cA型が2例、cB型が51例、cC型が5例、cD型が80例というように数えられますが、妻もとめと多く結び付いておらず、鬼退治とほとんど結び付いておりません。特にcA型というのは、ただ2例だけが、中国か

ら九州にかけて伝えられております。これはdA型の分布などを通ずるもので、別の型との複合ではないかと思われま

最後に、dの「脛や指などから生まれぬし、動物の姿でもあらわれぬもの」は全体で106例でありまして、必ずしも少なくありませんが、異常な事業と結び付けますと、dA型が8例、dB型が4例、dC型が73例、dD型が21例というように、極端に偏っておりまして、妻もとめとほとんど結び付かないで、鬼退治と多く結び付いております。ただし、この二つのモチーフを合わせたもの、すなわちdA型というのが、御伽草子の『一寸法師』にあたるもので、中国、四国を中心にあらわれており、やはり新しい流行の跡を示すのではないかと思われま

そのような分布の上から、16通りの組み合わせの中で、昔話のタイプとして、ほぼ安定したものはどれかという、ただ一つの地域だけに限らず、ある程度まで広い分布を示しており、特に奥羽地方、新潟県、岡山県、奄美諸島など、伝承の密度の高い地域に多くあらわれてくるものでありまして、bB型、bC型、bD型、cB型、cD型、dC型、dD型というように、7通りのものが数えられるのであります。その中のbD型、cD型、dD型は、ほかのタイプから崩れてきたと思われま

それらの相互の関係は、必ずしも明らかではありませんが、どちらかという、bB型とcB型というのは、一つの系統をなしており、bC型とdC型というのは、別の系統をなして、しかも、互いに深くかかわりあっていると思われま

よって、鬼を苦しめるというものでございませ

一般に完形昔話とか本格昔話とかいうのは、あくまでも主人公の一代記ふうに語られております。しかも、主人公の人物というのは、もともと非凡な素質を備えておりますが、その生涯の行路については、平凡な人生を反映していると言ってもよいのであります。その人生のポイントは、一人前の男として、相応な女をめとること

広い意味の昔話の中で、完形昔話と非完形昔話、本格昔話と笑話、カタリとハナシというのは、それぞれ別々に起こって、並び行われてきたとも考えられるのです。また両者のつながりも、極めて深いものであって、「小

実は、最近の私は、正面からこのような昔話と取り組んでいないこともありまして、最も新しい材料を整えることを怠り、この講座に臨むことになりましたが、誠に申し訳なく存じます。それにもかかわらず、長時間にわたってご清聴賜りましたことに、厚く御礼申し上げる次第です。

(おおしま たてひこ 東洋大学名誉教授)

「日本の昔話の展開」紹介資料リスト

(本館)→国立国会図書館東京本館所蔵

※→国立国会図書館東京本館にも所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	小学国語読本.尋常科用 巻3 (昭和13年11月刊の複製) *「十五、一寸ボフシ」 収載pp.48-60	文部省編	秋元書房 1970.4	FC49-116 (本館)
2	日本教科書大系.近代編 第7巻 国語.第4 小学国語読本巻三 *「十五 一寸ボフシ」 収載pp.615-618	海後宗臣等編	講談社 1963	375.9-N685-K ※
3	日本古典文学全集.36 *渋川清右衛門版御伽草子『一寸法師』 収載pp.394-402		小学館 1974	KH2-2 (本館)
4	手っきり姉さま：五戸の昔話 *「すねこたんぼこ」 収載pp.51-53	能田多代子編	未来社 1958	388.121-N885t (本館)
5	日本昔話記録.4 新潟県南蒲原郡昔話集 *「田螺息子」収載pp.51-52	柳田国男編； 岩倉市郎採録	三省堂 1974	KH22-117 ※
6	日本昔話名彙 改版 *「一寸法師」収載pp.11-13 *「蛇息子」収載pp.14-15 *「田螺長者」収載pp.15-16 *「蛙簀入」収載pp.16-17 *「蛞蝓聲」収載p.17	日本放送協会編	日本放送出版協会 1971	KG745-20 ※
7	日本昔話大成 第3巻 本格昔話2 *「134 田螺息子」収載pp.8-24 *「135 蛙息子」収載pp.24-26 *「136 一寸法師」収載pp.26-39 *「137 親指太郎」収載pp.39-44 *「140 力太郎」収載pp.53-59	関敬吾著	角川書店 1978.5	KG745-97 ※
8	日本昔話大成 第9巻 笑話2 *「521 殿様と小僧」 収載pp.240-244	関敬吾著	角川書店 1979.10	KG745-97 ※
9	日葡辞書：邦訳 *「Issunbōxi」収載p.343 *「Fiquito」収載p.241	土井忠生〔ほか〕編訳	岩波書店 1980.5	KR521-8 ※
10	嬉遊笑覧 上巻 巻四 上 武事 *「俗に矮人を一寸法師といふ。」 収載p.499	喜多村信節撰	名著刊行会 1970	UR1-8 (本館)
11	近世方言辞書集成 第7巻 「浪花方言」 *「ひこはち」収載p.165	佐藤武義〔ほか〕編輯	大空社 1998.12	KF121-G16 (本館)

日本の昔話の展開

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
12	俚言集覧 *「一寸法師」掲載 上巻p.195 *「ひこはち」掲載 下巻p.158	太田全齋編	大空社 1990.6	KF3-E35 (本館)
13	室町時代物語集 第5 *「こをとこのさうし-高安六郎博士 蔵奈良絵本」掲載pp.255-259	横山重、太田武夫校訂	井上書房 1962	913.49-M986-Yi (本館)
14	室町時代物語集 第5 *「小おとこ-守屋孝蔵氏蔵奈良絵本」 掲載pp.260-265	横山重、太田武夫校訂	井上書房 1962	913.49-M986-Yi (本館)
15	室町時代物語集 第5 *「小おとこ-清水泰氏蔵絵巻」 掲載pp.266-273	横山重、太田武夫校訂	井上書房 1962	913.49-M986-Yi (本館)
16	室町時代物語集 第5 *「ひきう殿物語-早大図書館蔵奈良 絵本」掲載pp.274-279	横山重、太田武夫校訂	井上書房 1962	913.49-M986-Yi (本館)
17	柳田國男全集 第6巻 *「桃太郎の誕生」 掲載pp.233-556	柳田国男著	筑摩書房 1998.10	GD1-G83 ※
18	柳田國男全集 第15巻 *「物語と語り物」 掲載pp.339-477	柳田国男著	筑摩書房 1998.9	GD1-G83 ※
19	桃太郎の母：比較民族学的論集	石田英一郎著	法政大学出版局 1956	389.04-I534m (本館)
20	文学 32巻1号 *佐竹昭広「御伽草子における中世 説話の問題」掲載pp.41-50	岩波書店編	岩波書店 1964.1	YA1-1021 (本館) (マイクロフィルム)

レジュメ

昔話の伝承の実像

武田 正

主著『日本昔話の伝承構造』（名著出版）、『佐藤家の昔話』（桜楓社）等で、昔話伝承の実態をさぐり、語りの座とそこで語られる昔話のかかわりを考え、可能なら今後の伝承の問題にも触れたいと思います。

- 1 語りの装置—語りの定型化、分類、初めの句・結びの句、あいづち。
形式譚。
- 2 語りの座のこと—囲炉裏端、木小屋^{けごや}、語りが仕事の木地師の家、産屋、風呂貰い、
通夜の晩。
- 3 百物語—江戸時代という時代（鎖国から地方話、そして妖怪話）
鬼、河童、山姥。
- 4 笑話が生まれる—大話、愚か者話、誇張譚、和尚と小僧。
狡猾者譚。
- 5 昔話の伝播—説教師、座頭、警女、祭文語り。
室町時代の下剋上、大道芸、地方への分散。
- 6 早物語—天保物語の成立は「平家語り」にあった。
「平家物語」、説経節、浄瑠璃語り、「義経記」そして早物語。

地藏浄土

むかしあったけど。

あるところに、おじいさんとおばあさんがあったど。

おじいさんが庭にお掃除に行ったときに、どこからともなく団子ころんできたど。そうすっど、

団子どの 団子どの

どこまでござる

て、おじいさん、追いかけて行ったわけよ。ほうすっど、

御山の堂まで 御山の堂まで

て行(い)ぐわけだ。ほして、しばらく行って、また、

団子どの 団子どの

どこまでござる

ていうど、やっぱり、

御山の堂まで 御山の堂まで

ていうのだど。ほしてしばらく行くど、今度、小さな穴があって、その孔から団子が転がって行った。そうすっど、おじいさんもそいつさ従いて行ったど。行ってみたば、お地藏さんがあった。ほしてお地藏さんの前に行ったれば、団子なくなってだもんだから、お地藏さんに、「団子が転がって来ながつたが」

てお聞きしたら、

「いや、転がって来たげんども、ごちそうになったがら、そのお礼として、今晚ええことあつから、まず、手に上がれ」

「もったいないから、上がられない」

「ええから、ええがら」

ていうわけで、手に上がった。次に、

「肩さ上がれ」

そうすっど、肩さ上げていただいて、今度、頭さ上がれていうわけ。

「もったいない、とにかく頭さなの、どんなことあつても、上がられない」

ていうたげんど、とうとう頭さ上がって、そうして、

「二階の上に、上がって待ってなさい」

て言わつて、

「そうすっど、今晚、鬼どもが集(あつ)ばつて、博打(ばくち)すつから、見てろ」

ていう。そうすっど、こんど、

「ええ加減したらば鶏の鳴き真似しろ、コケコッコーといいなさい」

そうすっど、鬼共は、

「一番鶏鳴いた」

少し経ったら、また「鶏の真似しなさい」ていうもんで、それでまた鶏の真似して、そして三回目やつたれば、今度は鬼共は、

「夜明けつから大変だ。んだから、また明日にすんべ」

ていうわけで、散らばつたお金、そのまま帰つて行った。そうすっどお地藏さまが、

「そのお金を全部持つて行きなさい」

そんで頂いてきたわけ。ほうして今度あ、家さ帰つてきてお金ひろげていると、お隣のおじいさん、おばあさんが来て、そこを見て、

「どうしてこんなにお金もうがつた」

そうすっど、そのことをみな聞かせたわけだ。と、
「ほんじゃ、家でもそういう風に、じさまをやらんなねえ」
ほして、団子拵って、ほして、その団子を押しつけ行ったら、やっぱり穴があったって。ほして、そこから団子を転ばしてやって、お地蔵さん立ってやったもんだから、
「食べる」ても、
「食べたくない」
ていうな、無理無理口さ突っ込んで、手にのり、肩に上がり、頭に上がって、ほしてやっぱり待ってだって。ほうすっど、こんど、やっぱり言われた通りに、鶏の真似三回やって、そのうちに、鬼の方で、
「人くさい、人くさい」
て、始まったてよ。そしてとうとう人くさい、人くさいではあ、そのおじいさんが見つけられたわけよ。そうすっじど、
「ゆうべのお金も、このおじいさんが持って行ったんだから」
て、さんざんにいじめられて、泣き泣き帰ってきたど。
ほうすっど、おばあさんが、血だら真赤になって、おじいさんが帰って来たもんだから、
「ずいぶん、ええ着物もらって、ほして喜んで歌うたって来た」
というて、おばあさん眺めて待っていたら、家に帰ってきたら、そうでながったど。
んだから、人の真似ざあするもんでないど。どーびん。

(佐沢・武田はる)

http://www.yamagata-jc.ac.jp/huzoku/toshokan/minwa/takahata_wada/index.html

山形短期大学民話研究センター 民話アーカイブ 「高畠町和田の昔話」より

昔話の伝承の実像

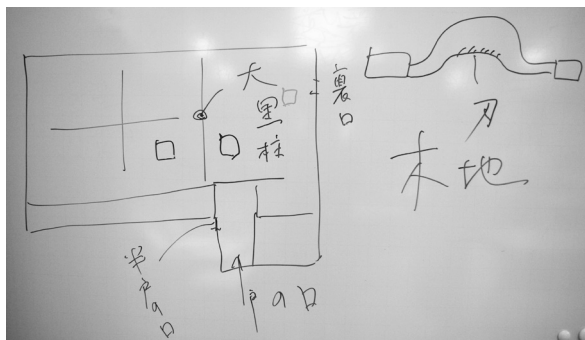
武田 正



今ご紹介にあずかりました武田です。三つだけお願いしておきます。一つは、こちらの方の大学に4年半ほど勤めさせていただいたのですが、それ以外は山形生まれ、山形育ち、特に東北地方の中ではずうずう弁のひどいところですので、よく大学院の連中から「無理しなくてもよい、ずうずう弁ならずうずう弁でしゃべった方が聞きやすい」とおだてられた経験がございます。それから私ももちろんですが、本年私の家内も後期高齢者になりまして、今入院しています。そんなことでろくろく準備もしないまま来てしまったという面もなきにしもあらずですので、これもご了承をお願いしなくてはならないと思います。もう一つは、既に小澤先生や大島先生がお話くださったわけですが、私は全部聞いておりませんので、ダブるところがあちこち出てくると思います。これも何とも仕方がないのでごめんください。

東北地方の農家の構造

まずここに山形県、もう少し広く東北地方と言ってもよいと思いますが、その農家の最も基本的なうちの造りを出しておきたいと思います（板書）。



柳田国男先生が「当時の農家は田の字型」と言ったのは向こうの方ですね。こちら側が板敷きで台所です。東北は1月の初め、早いときは12月の20日過ぎくらいに雪が積もり始めます。だからうちの中にはコタツを作ったり、囲炉裏を非常に大きく作ったりします。囲炉裏というのは面白いことに、真四角には決して作ってはいけないことになっていまして、長方形に作ります。理由はなぜかと古老に聞くと、古老はごく簡単に「人が亡くなったときに棺に納める。あの棺は真四角なのだ。だから囲炉裏は真四角ではいけない。長方形に作らなくてはいけない」と答えます。本当かどうかはよく分かりません。

大体どこのうちでも出入り口が最低3か所あります。お客様が割合に遠くからいらっしゃる場合は戸の口を使います。その右手は馬屋になっています。中に牛を飼っている家はないようです。馬だけです。突き当たりが台所になります。

囲炉裏が2か所作られます。台所の板の間の真ん中に一つ、もう一つは座敷とか勝手と言うのですが、お客様が来たときに使う囲炉裏。2か所作って、専ら家の人たちがお飯を食べたりお茶を飲んだりするのは台所の方の囲炉裏ということになります。

木地師の家

ブナの木、ナラの木などを夏伐きっておいて、これで木地を作る木地師の家を訪ねたことがあります。そうしたら大変面白いことに、裏口のすぐ近くにコタツがあって、子どもが一杯いれば障子を皆破ったりするので非常に寒いのです。にもかかわらずそこに子どもを集めておばあさんが昔語りをやります。なぜこのようなところにコタツを置

くのでしょうか。

木地師はお盆過ぎに山に入って、国有林であれば国の許可を得て木を買います。一番よい材料はナラの木だといいます。地域によってはケヤキの木が一番よいと言ったりしますが、一般には割合に加工しやすいブナの木が使われます。これを尺杖という長さに横にストンストンと切るわけです。これ1本はとても背負えないので、これを六つくらいに割ります。そして一冬にどのくらい必要か分かれば家に持ち帰り、家の前を流れている川に作った種池、春先に苗を作るために糊を水につけますが、そのために作ってある池に沈めておきます。「たんなけ」なんて言います。種池のことでしょう。

吹雪がやってくる11月末あたりから外の仕事ができなくなるので、うちの仕事というわけでそれを引き上げて小割にします。それをさらに「銚」という非常によく切れる刃物で仕上げます。こんな格好の刃物です (p.60 板書右上参照)。斜線を入れた部分が刃です。両手でつかんで向こうからこちらに引きながら板を作るのです。出来上がったそれを大きな釜に入れ、囲炉裏にかけてぐつぐつ煮ます。手でゆっくり曲がるくらい柔らかくなるまで煮て、それを取りあげて手でゆっくり丸くします。もちろん、のりしろは作ってあります。

今度はそれを丸めてはさみに掛けて、囲炉裏の上の方にある火棚という引っ掛けるところに二日くらいぶら下げます。完全に水分がなくなると、元に戻らなくなります。よく駅弁などで丸い容器がありますが、あれが当時のお弁当箱です。一日分、二日分のご飯をそのまま入れるくらい大きなものも作れますが、一番売れるのは、1食用、あるいは2食用のものです。山仕事などの場合には、ふたと身に両方ともご飯を詰め、はげごに入れて持って行き、暗くなるまで山仕事を頑張る。そのような木地は、江戸時代から作られていまして、藩としては、そのような場所からの税金は、木地そのもので出すことにしていました。もちろん、米も取れなくてお金もないからでしょうが。

そのようなわけで、木地師の家に昔のものを保存してあるとお聞きして、行ったら、台所にコタツが目に入ったのです。私は夏に行ったので、そ

こを開ければ下は冷蔵庫になっているのではないかと聞いて「コタツだ」というのです。それはなぜかと言いますと、こちらの方で作業する、銚を使う、そのほか、のこぎり、かな、小刀3種類くらい、焼き判などがあり、4人働けば、かなりの数量の刃物が囲炉裏の周りに置かれるわけです。そこにお母さんが一緒に働いて木地を作っている。子どもらが腹を減らして「お母さん、おっぱい」などに行き始めると危ないですから、囲炉裏の周りに来ないように、おばあさんは子どもらを集めて語りをやってくれた。何も仕事がない夏にお茶を飲みに来るおばあさんたちの場合、「少しでも長い話を知らないか」とお互いに言い合ったものだそうです。木地師の場合は特殊かもしれませんが、伝承はこんなところで行われているのではないかな、と思います。

昔話の分類

非常に基本的なことですが、これだけは確認しておきたいと思います。近代的な意味での昔話の研究をやり始めたのは、ご存じ柳田国男先生です。資料そのものはかなり古いものから新しいものまでありますが、柳田先生は、日本人の固有信仰はどのようなものだったかを知るため、昔話のうちで信仰の描かれた部分が入っているものを「完形昔話」と定義付けました。それ以外、鎌倉時代には仏教のお話も入り、室町時代から笑話(わらいばなし)がどんどん入ってきます。そういうお話のたぐいと区別するため、もともと日本人が信じていた信仰の根っこに何があるかを調べるには昔話がよい、言ってみれば神話から歴史をたどることができるのだ、と主張しました。なるほど、継子いじめ、浦島太郎、蛇婿の話は、『古事記』、『風土記』、『日本書紀』などに既に現れています。こういうものは完全な形の昔話と見てよいと言い、後で出てきた笑話のようなものは信仰とほとんど関係ないので、それについては「派生昔話」と分類しました。先ほどの講義の大島先生は、「派生昔話」と言うよりは「非完形昔話」と言った方がよいのではないかと、というご意見を出されています。非常に優れたご意見ではないかと私は思います。

これに対して、東洋大学を卒業して東京大学の

図書館にお勤めになった関敬吾先生は、ドイツ語が専門でした。また、その当時のヨーロッパの資料は一般の人の手には入らず、東大の図書館だからこそ向こうから雑誌が送られてくる、ということがありました。そこで「お前がヨーロッパの昔話の研究をやったらよいじゃないか」と柳田国男先生から半分は命令を受けたのではないかと思います。そこでグリムの研究などが日本に紹介されました。グリムの翻訳はもっと早くから出ていますが、研究は関敬吾先生辺りから日本に入り込んできたと思います。

そこで今まで柳田先生のところに全国から集まった昔話を分類してみたところ、「さるかに」のような主人公が動物である話、人間もたまに顔を出すのが中心は動物である話は「動物昔話」。村の中に生活するのに必要なこと、人間関係を見ようとする分野は「本格昔話」と関敬吾先生は考えました。そして室町時代のころから次第に笑話が入ってきます。笑話には「これが信仰かな」という部分がほとんど見当たりません。そういうものは「笑話」というように分けて、いわゆる「動物」、「本格」、「笑話」と三つに分けて『日本昔話集成』という6冊本を作りあげました。

柳田先生はすこしカッとなったのではないかと思います。中身については私もよく分かりませんが、関先生に何回かお会いしてその話を聞こうとすると、いつも叱られました。「あれほどの天才は、もう100年たってもう一人出るか出ないかだ」という言い方で、関先生から柳田先生の悪口は1回も聞いたことはありません。

筋書きをたどると「動物」、「本格」、「笑話」とすぐ分かりますから、その方が見やすいわけです。柳田先生の分類が悪いわけではありませんが、多分研究者にとっては、関敬吾先生の分類を使うのが常識になったと思います。

もう一つ、「形式譚」と呼ばれるお話の分野があります。孫である子どもがおばあさんから非常に面白いお話を聞いて、仕事があるから早く寝てもらった方がありがたいのに、あまりにも面白いので「もう一つ語れ」と言って寝ないようなとき、仕方がないので「今日はこれでおしまいにするぞ」という形で作られた分野が「形式譚」と言われる

お話のグループです。これの代表を一つ挙げますと、皆様ご存じの落語の「寿限無」、長い名前の子どものお話です。私は山形生まれ、山形育ちなので山形県の方だけまとめたところ、50くらいあるのです。それを落語の連中が、元禄時代ころと思われませんが、盗んで自分のレパートリーに入れたのです。

形式譚の例

非常に面白い「形式譚」を一つだけご紹介します。山形県のだ真ん中、米沢のすぐ近く、糠野目というところに近さんという山形県で一番大きい漬物屋さんがあります。そこのおばあさん（もう亡くなって久しいのですが）が教えてくれたものです。子どもらは非常に喜びます。大人になってから聞いた私などは、いちいち資料にして手にしないと分かりません。言ってみます。「エッケモツケ、ケエモツケ、キンチャクチャクノチャクモツケ、イツウニカンチョコライ、トリニモトツカカタケバヤシ、マエノマエノマエバヤシ、テキスイテキスイリンボウシャ、オンボウシャ、シャタカニュードウ、ハリマノヒコネノヒコスケ」という名前を付けた、というのがあります。そのほかにも「トクトクリンボウ、ソウリンボウ、ソウタカニュードウ、ハリマノベツトウ、チャワンニチャビシヤク、チャコボシ、セキヒノエイスケ」なんていうのがありますし、いろいろあるのですが、山形県の中だけ探しても50くらいあるわけですから、全国的に整理したらかなりの量になると思います。落語家はこういうものから拾い上げて自分のレパートリーの中に入れたということになると思います。

こういうのを「形式譚」と呼ぶのですが、面白い話も中にいくつかあります。ある男の人が田んぼに入ってひっくり返ったら、口の中にカエルが入ってしまった。カエルが胃の中に入って騒ぎ始めた。胃が痛いので何とかしなくてはならないと思ってウ（鵜飼のウです）に頼んだ。そうしたら喜んでそのカエルを取ってくれたのはよいが、あまりきれいに取りすぎて、はらわたまで皆取ってしまった。そうしたら男は腹が減って困るわけです。何かないか、ということがかかあ殿の着物の

すそから出ていた綿を皆取って食べた。そうしたが何となく腹がぼやぼやして腹一杯になった気持ちにならなかった。これでは駄目だと焼きもちを食べた。そうしたらもちを焦がして腹の中の綿に火がついて大騒動になったというお話があります。これなどは今のお子さん方が言う「口裂け女」などのちょっとおっかない話と似て、次々に場面を変えて聞く人の耳を驚かせることになったと思います。そういうお話が一杯あります。

そして大体、「動物」、「本格」、「笑話」、「形式譚」、四つの分類に昔話を区分けしたと考えてよいと思います。民話と言うと世間話も入るので、世間話はこちらに置いておきます。小澤先生や大島先生のお話の一部入り込んでいたと思いますが、そこまですべてをひとまず前置きにして、本論などという偉いことではないのですが、次のテーマに移ります。

語りの座のこと—囲炉裏の決まり

プリントの2番目に「語りの座のこと」と書いておきました。民話、もう少し正確に言うと昔話と伝説・世間話が違ふのは、昔話はフィクション、作り物だということです。桃から子どもが生まれる、こんなことがあり得るわけではないですから、作り物なわけです。これに対して、伝説のようなものは、本当は説明文です。「あそこに地蔵様が建った。たまたま子どもがあそこでけがをして亡くなった。あまりにもかわいそうなのでお地蔵様を建てることになった」と、お地蔵様が建った由来を語るのが伝説です。別の言い方をすれば、ノンフィクションです。だから最近では少し違ふのですが、今までの歴史家は、ほとんど民話（これは昔話と伝説・世間話をひっくるめたものです）は史料として使ってくれなかったと思います。でも、最近の方の中には、そういうものも十分歴史の史料になり得るという見方に立って、例えば網野善彦さんなどのように民話そのものを見ようとする傾向が現れるようになって、大変よいことだと私は思っています。

ともかく、民話といえば決まって囲炉裏端ということになっているのですが、確かにそういう向きは最もまともであろうと思います。囲炉裏には面倒くさいことがいろいろありまして、いかに昔

の家の中で囲炉裏というのが重要な役割を果たしていたかということがいろいろな資料に書き残されています。例えば、頭髪や爪^{つめ}というような人間の体の一部分は、決して囲炉裏の火で燃やしてはいけません。それからねじ木、山に芝刈りに行ったときに、芝の柔らかい木を持ってぎゅっとねじってくっつく突っ込んで背負ってきます。そのままぶん投げておくと、かんかんになりますから木がねじれているわけです。こういうのは、かまどでは構わないのですが、囲炉裏では焚^たかないという約束事があります。リンゴや洋ナシといった果物の種を、決して囲炉裏の火に入れてはいけません。炉縁^{ろぶち}というのがあります。囲炉裏の周りの木ですね。これは親父の頭と同じだから、傷つけたり、寒いからとその上に足を引っ掛けて囲炉裏の火に当たったりしてはいけません、というようなことを昔の人は非常に厳重に守っていたと思います。

その上で「ヨコザに座る者」ということわざをご存じかと思います。「ヨコザ」は、片仮名でよいと思います。「ヨコザに座る者」というのは、その家の戸主だけです。戸主以外は座ってはいけません。だから戸主がいないときは、ヨコザはいつも空いています。「ヨコザに座る者」は、まず猫、寒いと暖かいところに寄ってきて、戸主がいなければ平気で戸主のところの布団にもぐり込むことがあります。馬鹿、これは猫と同じです。3番目は坊主、住職と考えてよいと思いますが、地域によっては「馬鹿坊主」と言うこともあります。東北地方では、猫と馬鹿と坊主です。なぜ坊主かといいますと、昔は法要、法事はお寺を借りずに自宅でしたので、住職がやって来たのです。やって来ると戸主の座るヨコザを戸主が空けて「さあどうぞ」とヨコザに据えます。お茶を一服たてて、それを飲んでいただきます。普通は、お客様が来たときにお茶は一服では駄目で二服以上というのが常識なのに、そのときだけは一服だけしか差し出さないのです。そして住職さんがお茶を一服飲んだら仏間に案内します。仏間にはお客様が一杯待っています。そして法事が始まり、法要が行われます。「猫馬鹿坊主に火吹き竹」とも言います。女の人では力がないので、火をおこすときに火吹き竹を使うのは男の人です。ヨコザに戸主がいれ

ば戸主が火吹き竹を取ってフーッと吹くわけです。ということから「ヨコザに座る者、猫馬鹿坊主に火吹き竹」という言葉が山形県などには広がっています。

それほど囲炉裏というのは大切なところなのです。具体的に当てはめると、昼間は若い両親は田んぼや畑で働かなければいけない。子どもは時には邪魔になるわけです。だから子どもはおばあさんに預けて、囲炉裏端でおばあさんから昔話を聞いて楽しんで育っていくという形を取っていたのではないかと思います。数の面から言っても、囲炉裏端で聞いたという人が一番多いと思います。これは大体室町時代くらいまでだと思います。やがて、室町時代のころから笑話が入り込んできます。

室町時代の戦乱と大道芸、笑話の始まり

これも関敬吾先生からお聞きした話ですが、室町時代に京都は散々な目に遭うのですね。例えば嘉吉の乱かきつという乱が起こりました。足利氏の部下の連中がこれをやりました。そして火事になって京都の3分の1が焼けた、とある記録には残されています。1回で終わりかと思っただけで大きな乱がその後起こりました。応仁の乱です。このときも京都は大火事になって約3分の2が焼けました。当然、そういう状況ですからこのころから地方に豪族が姿を現し始めます。金閣寺が出来上がったころまでは足利氏もかっこよかったのですが、やがて銀閣を作ろうとして建物は建てたが、銀箔を買って貼るだけの力がなかったと言われます。ただ、よかったことは、銀閣の方は焼けないで残されたわけです。金閣の方は、ある坊主、ある小僧が放火して焼けてしまいました。ただ、前の設計図があるので、全く同じように復元したのですが、銀閣はお金がなくて、建物だけで終わってしまったというわけです。

それと反対に、お武家様より町人の方が金持ちになる連中が増えてくるわけです。そこで文化の面においても町人が手を出し始めます。ご存じのように、能、狂言は室町時代に芸能として完成の域に達します。しかし、京都にいるわけにいかない下っ端の弟子の連中は皆リストラに遭い、行く

場所がないので地方都市に分散します。とにかく飯は食わなければならないので、そこで大道芸が始まります。例えば「猿若」というものがあった、「なんだろう」と調べてみたら一人能なのです。猿を1匹連れ、猿を人間に見立てて、能の名せりふなどを猿に一生懸命教える格好をします。猿は騒ぎますから、あたかも答えているように見えなくもないのですね。ということで、いわゆる大道芸が始まります。江戸時代になって書かれた本ですが『人倫訓蒙図彙』という資料があります。名前を見るといかにも難しい本のように感じますが、面白いのは全部絵が入っていることです。下の方に、これは一人能だと解説が書いてあります。だから大道芸ですよ。ということで、地方の小さなお城のあるところで大道芸をやって飯を食う連中が増えてきたと言ってよいと思います。

城下に住んでいる連中は、少し偉い気がします。すぐ隣にお城があってそこに殿様がいる。「我々は殿様のすぐそばに住んでいるんだぞ。田舎の百姓とはレベルが違うんだ」というので、冷やかし半分に田舎の百姓どもを笑うというのが笑話の始めだ、というように関敬吾先生は分析してくださっています。

木小屋話けごやばなし

こんなふうにして語る場所が変わってくるわけです。今までは囲炉裏端であったのが、今度は門付けをやる連中が出て長々と物語を語るという形式が変わって、その第1号が「木小屋話けごやばなし」と言われるものです。「木小屋」と書いて専ら「けごや」と発音します。これは「ハレ」、「ケ」の「ケ」でないかという理解もありますが、そんなことはどちらでもよいと私は思っています。

冬になって外で仕事ができなくなると、若い連中は柱を1本、カヤを手で持てる範囲で持ってきて、あとは柵を作ったり下にむしろを敷いたりして、村の広場を借りて若い衆の集まる場所を作ります。外はしんしんと雪が積もるので、若い連中はその木小屋に入り込んで火をたき、火に当たりながら仕事をします。私が実際見せてもらったところでは、わらじ作りの競争をしていました。皆出来上がったわらじを1足ずつ柱にぶら下げ

て、1等、2等、10等くらいまで決めます。10等までは町に持って行けば売れると言うのです。そこで競争して10等まで、売れそうだと思うものを、若い連中が手分けをして城下町である米沢に行って小間物屋さんに売るのです。買ってこれれば大もうけ。帰りは大体菓子屋に寄ってお菓子を買って戻る。そういうわら仕事の場所になるのが木小屋です。

上杉鷹山を始めとして、米沢などでは、関東地方に負けないくらい養蚕が盛んです。今でも蚕桑村という村があり、1軒だけですが蚕を飼っています。当時は蚕を飼う家が多かったのです。あれは、こんな小さな粒のようなものから、繭を作る段階になるとこれくらいになりますよね。ものすごく大きくなって家の人が寝る場所がなくなるというので、養蚕小屋を作ります。蚕は非常に寒さに弱いのですが、春蚕、夏蚕、秋蚕、晩秋蚕、晩々秋蚕、無理すれば年間5回作れます。ですから1回目でも失敗してもあまり心配しません。しかもこれは全部女の仕事です。男は田畑に出て女の人は蚕を飼う、というやり方を当時は採っていたようです。しかし終戦後、固定資産税があまりにも高いので、大きく作った蚕小屋そのものは年々なくなり、今はほとんどなくなってしまいました。

蚕は寒さに弱いので、必ずそこに囲炉裏を作ります。それを利用して、冬はその周りに集まって木小屋にするのです。ある村では、村中の若手の連中が、12、3歳から結婚するまで、冬の間は毎日そこに集まってわら仕事をします。理由は簡単です。うちでわら仕事をするとわきにお父さんがいて、競争すれば勝てるわけがありません。そして「お前は下手くそだ」などと言われるとしゃくに障るわけです。といって親父と大げんかをするわけにもいかなないので、そんなところよりは若い連中だけが集まる場所に行って、雑談をしながらわら仕事をした方が気分がよいのは当然ということになるわけです。

とんち話

そういうことで、木小屋でのわら仕事の合間には、大体大分県の「吉四六ばなし」のような笑話が非常に盛んです。とんちのお話です。とんちで

殿様をやっつけたというような話もあります。

馬鹿みたいなお話なのですが、一つだけ例を挙げます。あのやつは沼に集まるサギを鉄砲で撃つのがうまい、是非おれも一度見たいと殿様が言うので、殿様を従えて沼に鉄砲を持って出掛けるのです。そのうちにサギとかカモとかが水面に浮かんでいるのですが、狙いをギューツと定めている間に、あまりに緊張したために屁をひってしまうのです。それが殿様の鼻の前なのです。殿様が「臭い」と言ったら、「しーっ。声を立てると鳥が皆逃げるので黙っている」と言われて、殿様も黙ってしまったというお話です。馬鹿みたいなお話ですが、そういうお話をお互いに出し合って、楽しんだのではないかと思います。

「吉四六ばなし」というのは、大分県の真ん中辺りにある地域に伝わるとんち話です。私のいる山形県でも、佐兵次という男が大変とんち者であったということで、私が「佐兵ばなし」を集めてみたら、50くらいありました。そういうものを楽しんだのではないかと思います。もっとも、私が「佐兵ばなし」、とんち話を聞いたのは、半分以上女の方からです。男の語りと女の語りを比べると、とんち話のようなものは、男の方がうまいというか、聞きやすいです。

ということで、「佐兵ばなし」といいます。全国的に集めてみると、村を一つ違えると別の村では佐兵の話は一切しないのです。あるいはうちと関係ない、といった言い方をついてしまうのです。とんち話は「吉四六ばなし」を始め楽しいのですが、どうも各地域に独特の語り口が生まれてきたのではないかと思います。ご存じのように、南から北まで一杯あるのです。

南の方から言いますと、沖縄とか奄美大島の辺りでは「モーイ」という主人公がとんちを發揮しますが、面白いと思ったのは、鹿児島県では「侏儒」、背丈が伸びない大人です。これは差別語ですから、歴史資料としてお聞きいただければありがたいと思います。そのほか、「鎌田びっちょ」というのが主人公になるとんち話があります。いかにもとんち話の主人公として面白い名だと思えます。お隣の宮崎県では「半ぴ」、こんな名前の人間は現実にはなかったと思えますが、そういう

例もあります。

全国的に知られているそういう人の名前は、何と言っても熊本の「彦一ばなし」ではないかと思います。割合に南の方にそういうのが非常に多いというのは、冬でも農作業がある程度やれるからだだと思います。だから、ちょっと田んぼの端に腰を下ろして「お前こんな話知っているか」と吉四六の話が出る。東北のように雪が積もって外に出るわけにいかないという場所では、腰を据えて話をしないことには聞く方も語る方もうまくいかないと思います。

とんち話は南の方に多いとあってよいと思いますが、北の方にもないわけではございません。例えば、北海道の鯨場^{にしんば}、ニシンがよく取れて網元、船を持っている連中が秋田県、山形県辺りまで降りてきましたが、そこには今でも文化財に指定されて残されている当時のニシン御殿と言われる立派な家が残っています。当時はどこに行っても2階建てではなかったかと思いますが、茨城県の岩井市、牛久市は、今はネギの本場ですね。ネギ御殿といって畑のど真ん中に3階建ての堂々たる農家があちこちに建っています。山形県でも、海老名家という大きな農家では、昔から農家でありながら3階建てです。しかも、丘の高いところに建っていますからどこからでも見えます。秋田県の山形県境に湯沢町という町があるのですが、そこにも3階建てのニシン御殿が立っています。そういう者の間に広がったとんち話、北海道では「繁次郎^{しげじ}ばなし」と呼んでいます。次第に語る場所が広がってきたと言ってよいと思います。

赤本のこと

今映してもらっているのは、赤本です。貞享年間、元禄の一つ前の元号ですが、そのころから絵本が登場します。しかもこれは子ども用です。非常に安く買えたと言われていました。大きいもので18ページ、無理に大きくしたもので24ページ、これが最高です。ひどいのは8ページくらいでごまかしてしまう。本棚に入れられないので店の台に積み重ねるわけです。すぐ子どもらに分かるように表紙を赤く塗ったのですね。これを赤本と言います。初めは物語全部、「昔あったとき」と書い

てありましたが、次第に絵の方が中心になって言葉が少なくなってきました。

残念なことに、子どもの小遣いで買える本なので、1回読むとぼろぼろになってしまい、あとはちり紙と一緒に使って捨ててしまうということで、当時どのくらい出版されたかよく分からないのです。一流の版画家、浮世絵師が書いたものもあるし、浮世絵師を目指す弟子どもが書いたものもあります。見ると上手下手がすぐ分かります。上方と江戸では中身が少し違ったりしています。

それはともかく、赤本が一番残っているのは国立国会図書館ですが、天理大図書館にもよく保存されていると聞いています。幕末になって、売れるのではないかと、前の版本をそのまま使ってまた出版しました。赤本ではまずいので黒本、一部は青本になりました。表紙を薄い黒や薄い青に塗ったりして、明治辺りまで生き残りました。

これによって昔話の鑑賞の仕方が変わりました。それまでは語りが中心でした。山形で言えば「昔あったけど。あるところにじさまとばさまがいたけど。ばさまが川に洗濯に行ったら川の上の方から赤い桃と青い桃が流れてきたけど」。欲のないばあさんは「赤い桃こっちゃこい」と呼ぶのです。青い桃は要りませんから「青い桃そっちゃ行け」と言うと、赤い桃は呼ばれたからニコニコしながら流れてくる。これを拾ってじさまが山から帰るのを待って、割ろうとしたら自然に割れて、中から男の子が誕生した。桃太郎ですね。

私が面白いと思うのは花咲かじいです。明治に入ってから小学校の国語の本に「花咲かじい」という名前で登場します。ところが、私があちこちで聞き回って「おばあさん、ひとつ花咲かじいの話をお願いします」と言うと、「そんな聞いたことない」と言うのです。しばらく考えて「赤い小箱こっちゃこい、白い小箱そっちゃ行け、のあの話よ」と言うと、「ああ」と言うのです。東北地方、少なくとも山形では「花咲かじい」とは言わないのです。「クイゴコムカシ」と言います。「クイゴコ」というのは子犬のことです。箱を開けたら子犬が入っていて、うちに子どもがいないのでそれを育てるのです。ある日、「おれの背中に吠^{かます}を付けろ、鍬^{くわ}も付けろ。じじもばばも乗れ

と言うので、とことこ荒地に行きます。「ここ掘れ、ワンワン」と言いますが、いつもかわいがってくれる主人に向かって犬が「ワンワン」とは決して吠えないと言うのです。では何と言うのか。「ここ掘れ、クエンクエンクエン」と言うのです。「ここ掘れ、クエンクエンクエン」の話は、そういうふうには聞かないと話が出ない。ところが、国語の教科書では、おじいさんは初めから犬を飼っていることになっています。振り返ってどちらが楽しいかという、やはり「赤い小箱こっちゃこい」の方が、聞く方は楽しいと思います。

『河童よ、出てこい』

河童のお面は日本橋にある水天宮様の護符、お守りです。安産のためにあそこにお参りをすると、もらい受けることができます。島原の殿様が明治維新のときにうちに持って帰らないであそこに置いて、近辺の方々にお参りしてくれと言って置いていったと言われます。この話を絵本（『河童よ、出てこい』）にしてもらったのですが、ある男の子が親戚の大学の先生のところに来まして、「河童のことなら教えてやるから聞いてみろ」と言ったそうです。「よく勉強したね。何で勉強したの」と言ったら、この本を持ってきたそうです。

もともと河童というのは中国の黄河にいて、漢の武帝が邪魔になると追っ払ったので日本に渡ってきて、熊本を流れる球磨川くまがわに上陸し、日本に入り込んだと言われています。これを一部では「エンコウ（猿公）」と呼んでいます。「エンコウ」とは猿のことです。猿と河童は親類関係に当たります。

大阪の堺市の方が、河童事典を数年前に出しました（『河童伝承大事典』）。私も東北地方の河童を調べて差し上げたつもりです。『遠野物語』にも河童が出てきます。『遠野物語』の河童は、顔が赤いのです。でも全国的に広がっているのは、芥川龍之介が『河童』を書いたときに扉に1枚はさんだ絵の、顔が真っ青な河童です。だから河童というのは江戸時代から描かれてはいますが、芥川龍之介の『河童』が我々の頭に染み付いてしまったのではないかと思います。

語りの座のこと一通夜の晩

今まで、囲炉裏と木小屋が語りの場になった例を挙げましたが、それ以外にも非常にいろいろな場所で語りが行われました。

秋田の県立博物館の方の紹介である家に行きましたら、そこのおじいさんが「親戚に面白い話をする人がいる」と言いました。その人から聞いた話はどういう話かと言ったら、お通夜の晩にする話だということです。そんな仕来りしきたりがあったのかどうかということについては、あちこちの研究者から資料をいただきました。沖縄では今でもしているそうですし、隠れキリシタンの島である長崎県の五島列島でもしていると聞いていますが、私が聞いたのは秋田での話です。

どんなお話か。何ていうことはない、「蛇女房」のお話です。ある若者が山に行こうとしたら、岩に挟まれて苦しんでいる蛇がいたので「かわいそうだ」と岩を取りのけてあげた。その晩、きれいな娘がやってきて「足をけがしたので一晩泊めてもらえないか」と言った。若者は喜んで泊めてあげた。翌朝、目を覚ましたら台所からよい匂いがしてきた。起きたら娘が「足は治った。朝ごはんができたからどうぞ」と言う。「こんな女房がいたらよいな」と言ったら、「そうですか。では嫁にしてください」と言った。早速夫婦になり、男の子が生まれた。ところが、本性なしに寝てしまうと、本当の姿を暴露する。横になって子どもにおっぱいを飲ませているうちに眠ってしまい、元の蛇になってしまった。それを見て子どもが泣き叫んだ。とてもいられないということで書きをし、目玉を一つえぐり取って、子どもの口に入れて、元々生活していた琵琶湖に入ってしまう。

子どもはべろべろと母親の目玉をなめて育つのですが、目玉がなくなってしまう。そこで和尚さんに聞きに行ったら「琵琶湖に行って、かかあの名前を呼んだら出てくるよ」と言うので、子どもを背中にくくりつけて行き、呼んだらなるほど妻の姿になって戻ってきて、もう一つあめ玉をくれると言うのです。あめ玉ではなくて目玉なので、もう一つやったら完全に目が見えなくなってしまうわけです。でも子どもがかわいいから、やるのは一向に構わない。ただし、今、昼である

のか夜であるのかさえも分からなくなってしまう。そこで、子どもを琵琶湖の側にある三井寺で朝夕鐘を突く小僧にしてもらいたいとお願いして、もう一つの目玉を子どもに与えた。その子はやがて三井寺の大和尚になった、という話です。

東北地方の代表的な例ですと、お通夜には友人しか集まりません。近所の何人かか、一晩冷酒を飲むことになっています。酒は一升瓶から茶碗に注ぎます。おかずは数の子以外出ません。初めは「こいつもついに亡くなったか。走りっこではいつも1等だった」などとほめ言葉が出ますが、中には酔っ払って悪口が出ないとも限りません。「あいつが喧嘩をして、俺がぶん殴ってやったことがある」などという話が出ると困るので、そのようなときにこの話をして喜ばれたことが何回もあるそうです。

語りの座のこと―産屋など

ついでにもう一つ。昔は産婆さんが全部お産のことをしてくれたのですが、山の神講の胴元をしている産婆さんが山形県にいらっしゃいました(3年ほど前にお亡くなりになりました)。この人に頼むと、お産まで必ず週に1回ずつ来てくれて、神様のお話と称して山の神がどんなにお産に役に立っているかをお話ししていく、という例があります。産室で語りが行われたという例が、つい先だってまで見られました。

言ってみれば当然ですが、語り手がいる一方で聞き手がいる。「動物昔話」は満2歳から4歳くらいまで。「本格昔話」は5歳前後。「笑話」は7歳から。7歳というのは、神様の子どもから人間の子どものなる年です。「七つまでは神のうち」という言葉があります。7歳になったら人間になるのですが、半人前です。田植えや稲刈りのときには、半人前の仕事をさせられます。そのころが、大体7歳から13歳くらいまで。昔は、15歳になると一人前と言われていました。

これに加えれば、農繁期、田植えのころ、面白い仕来りがあるのです。田植えのときに股引などをはいて苗を植えると泥だらけになりますが、田植えが全部終わるまで洗いません。なぜかというところ、そこできれいに洗うと土が皆流れてしまっ

根付きが悪くなるのです。自分の田んぼが全部終わるまで洗いません。そして田植えが終わるとそれを全部嫁さんが実家に持って帰って洗います。実際に洗うのはお母さんです。そのことを「五月洗い」といって、そのころが女性の同窓会の一番盛んな時期です。洗うのはお母さんで、自分は久しぶりに実家に帰って寄り集まって、という形が一般的です。

語りの座のこと―風呂貰い

お互いに忙しいので、風呂貰いをします。このときにはこういう仕来りがあります。10軒くらいのうち1軒が「今日風呂をたてたからうちに入りに来なさい」と触れを回します。最初に入るのは子どもです。2番目に入るのは女の人です。3番目に入るのが男の人です。最後にその家の嫁さんが、おけをきれいに洗って次の日の準備をやる。明るく日は別の家でたてるのでそこへ風呂貰いに行く、という形を取ります。

そのときに、話の好きな男の人などが囲炉裏のわきに座って、「吉四六ばなし」のような話を子どもたちから大人にまで話します。大人であれば大人に合ったようなお話、子どもであれば子どもに合ったようなお話が出るのは当然のことです。

そのほかにも年中行事にからんだお話もありますが、最後まで時間がありませんので、プリント6番目の「早物語」は割愛します。一応5番目までということでお話しします。

昔話の伝播―警女、祭文語り

越後の警女さんが、「米沢歩き」と称して毎冬やって来ます。こちらに来て亡くなったという警女さんのお墓もあちこちに見られます。そのほか山形には「祭文語り」という、男の人がする芸があります。このような連中も、子どもがいれば昔話を語ってやるというやり方で、横に広がっていきます。祭文語りは後に浪花節になっていきます。

だから、伝承と伝播は、はっきり区別するわけにはいかないのです。初めて聞いた子どもにとっては、伝承です。「ああ、そんな話があったな」と思いながら聞くのは伝播と考えてもよいのではないかと私は勝手に思っています。

時間がなくなったので、私のお話はこれくらい
にさせていただきます。どうもありがとうございました
ました。 (たけだ ただし 山形短期大学名誉教授)

「昔話の伝承の実像」紹介資料リスト

(本館)→国立国会図書館東京本館所蔵

※→国立国会図書館東京本館にも所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	佐藤家の昔話	佐藤孝一 (述) 武田正編	桜楓社 1982.8	YL31-58 ※
2	日本昔話の伝承構造	武田正著	名著出版 1992.5	KG745-E58 ※
3	昔話の伝承世界：その歴史的展開と伝播	武田正著	岩田書院 1996.3	KG745-G15 ※
4	昔話の語りと変容	武田正著	岩田書院 2001.9	KG745-G99 ※
5	さるとびつき (こどものとも：320号)	武田正再話 梶山俊夫画	福音館書店 1982.11	Z32-210
6	さるとびつき (こどものとも、年中向き：通巻91号)	武田正再話 梶山俊夫画	福音館書店 1993.10	Z32-863
7	河童よ、出てこい	武田正文 梶山俊夫絵	福音館書店 1998.4	Y8-M99-35
8	日本近代文学大系 45 柳田国男集	柳田国男著	角川書店 1973	KH6-5 (本館)
9	図説日本の昔話	石井正己著	河出書房新社 2003.7	KG745-H13 ※
10	昔ばなしとは何か	小沢俊夫著	大和書房 1983.6	KE178-39 ※
11	昔話の発見：日本昔話入門	武田正著	岩田書院 1995.9	KG745-G6 ※
12	昔話の発見、続	武田正著	岩田書院 2003.12	KG745-H33 ※
13	人倫訓蒙圖彙	朝倉治彦校注	平凡社 1990.6	GB341-E29 (本館)
14	河童伝承大事典	和田寛編	岩田書院 2005.6	GD38-H53 ※

レジュメ

日本昔話のアジア的展望

君島 久子

日本人に親しまれてきた、羽衣や花咲かじい、さるかに等、昔話の多くは、その源をたどれば、中国を中心に広くアジアに分布しています。その一方で「九人の兄弟」や「銀のうでわ」のように、アジアでは広く伝承しているのに、日本にはあまり語られていない昔話もあります。今回はこの二つの問題のうち、前者を中心に、後者の謎も考えてみましょう。

(一)

1. 羽衣 『天女の里がえり』 ミャオ族・貴州省
 (『けものたちのないしょ話』岩波少年文庫)
 『たなばた』(福音館書店)
 「くじゃくひめ」 タイ族・雲南省
 (『白いりゅう黒いりゅう』岩波書店)
2. 花咲かじい 「歌をうたうねこ」 タイ族・雲南省
 (『けものたちのないしょ話』岩波少年文庫)
 「畑を耕す犬」 漢族
 (『けものたちのないしょ話』岩波少年文庫)
3. さるかに 「今夜妖怪がくる」 トウ族・青海省
 (『けものたちのないしょ話』岩波少年文庫)
 「ひよこの仇打ち」 ミャオ族
4. ねずみの嫁入り 「ネズミ美人」 カザフ族・新疆ウイグル自治区
 (『けものたちのないしょ話』岩波少年文庫)
 『かみさまになりそこねたサンダル』 インドネシア
 (講談社)
 「猫の名は猫」 ベトナム
5. こぶとり 「妖怪にもらったこぶ」 シボ族・ウイグル自治区
 「こぶとり」 朝鮮、韓国
 (ベトナム 肩のこぶ。 インド 背中のこぶ)

(「羽衣」は伝承する地域や民族によって、伝説の場合や昔話、あるいはナシ族のように神話になることもあります。)

(二)

『王さまと九人のきょうだい』

(イ族 雲南省 楚雄 岩波書店)

『ゆうかんな十人のきょうだい』

(リー族 海南島 講談社)

その他 チワン族八人兄弟、漢族十人兄弟、朝鮮族六人兄弟等多数
分布図一別紙

『銀のうでわ』 (シンデレラ型)

(イ族 四川省 涼山 岩波書店)

「ターカ・タールン」

(チワン族 広西チワン族自治区武鳴 『月をかじる犬』 筑摩書房)

「靴のゆくえ」

(朝鮮族 吉林省 『けものたちのないしょ話』 岩波書店)

日本昔話のアジアの展望

君島 久子



皆さんこんにちは。こうして皆さんの若々しい顔を拝見していると、私、実は八十路の坂をとうに越えましたとはとても言えない。去年までは澄ました顔をして、「山の中で二人の仙人が碁を打っていましたので、私は黙って仙人にお酒をつぎ、ぺこぺこ頭を下げたら、片方の仙人が『じゃあ何かお礼をしよう』と手帳を出して、私の年齢をグイーとひっくり返してくれたのです。というわけで御年18歳であります」と言えたのです。皆さん、自分で18だと本当に思ってご覧なさい、ご自分もその気になるから不思議ですよ。

ところが去年、白内障の手術をして、待望の眼帯を外して真っ先にパッと見えたのが、なんと鏡に映った自分の顔のしわ。しわに囲まれた我が顔を見てがく然としまして、それ以来、仙人に頼むことを遠慮しました。内心ちょっと残念ですけども、考えてみたら、「むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがおりました」です。いいじゃないですか昔話。だって「むかしむかし、あるところにお母さんとお父さんがおりました」とは余り聞かないですよ。そうすると、昔話というものはやはり私のような年寄りにとっても力を与えてくれるものがあると、大いに意を強くしました。

と申しますのは、かつて私が訳出したものの中でも、もう働けなくなった老婆がたった一人で山の中で暮らしていて、淋しくてポトンと涙を落としたら、「なぜ泣くのじゃな」と仙人が現れる、という話が結構多いのです。本当に一人ぼっちというのは多いです。若者でも、たった一人の若者、これは嫁さんもない、孤独な若者ですね。それから孤児。そういう人たちがパッと救われる日が来るのです。

昔話というのは、小澤先生がおっしゃる子どもの成長、子どものためにが第一ですが、さらに年寄りのためにも、もう一度元気を出し、再生して、これから歩いていこうという希望を持たせる力もあると思うのです。

昔話の力

1977年の春だと思うのですが、初めて南北両ベトナムが統一された後、青年の船というのがございました。コーラルプリンセスという1万トンの船でベトナムまで行きました。青年の船ですから、私は講師を頼まれて話をするようになっていたのです。それで、ハノイに着きますと、さっそく街の本屋さんへ行きました。あのころは長いベトナム戦争が終わったばかりですから、少ししか本がなかったのです。でも1冊の絵本を選んで、船の中へ戻ってきて、見ていたのです。それで何か話をせよと言われ、その絵本を見ながら、皆さんの前で話をしました。

皆さんの中にもきっとご存じの方がいるかと思いますが、「三つの願い」です。ある貧しい絶望している若者が、お釈迦様のところへどうしたら希望が持てるか、自分に希望を与えてほしいとお願いをしに行きましたが、途中で寄った村で泊めてもらおうと、うちの娘は口がきけない、口がきけるようお願いしてきておくれ、と頼まれ、その次は、どうしてもうちの梅檀しやかんの木の花が咲かない、咲くようお願いしてきてくれ、その次は、川の中のコイが、自分はもう何十年何百年も修行しているけれどもどうしても竜になれない、それを聞いてきてくれ、と頼まれた。若者は苦心さんたん惨憺してやっとお釈迦様のところへ行き、頼もうとしたら、お釈迦様が「願いは三つまでじゃ」と言われて帰っ

てくると、帰りに全部それぞれの願いがかなえられ、彼は、娘と金銀真珠をもらい幸せになったという話です。

ベトナム語は少しも分からないのに、絵本を見たら分かったのです。で、めぐりながら、次はこうですと、したり顔をして話し、無事に済みました。とっても不思議でしょう。ベトナムは初めて行った所です。ところが、私がなぜその話ができたとかという、南の広西チワン族自治区辺りや広東省に似たような話があるのです。もちろん日本にもございます。そういうお話を知っていたということで、絵本のストーリーが全部読めてしまったのです。これは不思議な体験でした。昔話の力ってすごいものだとそのとき思いました。国境も民族の違いも平気で越えて、互いに分かり合える力を持っているのですね。

昔話の不思議

それから後、1970年代後半に、初めて雲南省の少数民族のプーラン族を訪れました。山の中に入り、もちろん電気もない、乗物もない、歩いて行かなければならないのですけれども霧がかかっている山のふもとまで行きました。なかなか外国人は入れませんで、日本人がプーランの所に入ったのは初めてぐらいで、むしろプーラン族の人たちが私たちを見に来ました。

そのプーラン族に「巨人グミヤー」という話があります。このお話は昭和39（1964）年に、岩波の『白いりゅう黒いりゅう』の中で訳しています。私は1970年代後半にプーラン族の所へ行ったのですから、訳の方が早いです。

1949年に中華人民共和国が成立しまして、その後すぐに民間文学研究会というのができ、少数民族のお話を全国にわたって調査されたのです。その結果、いろいろな話が日本にも入ってきて、その中でも特に面白い民話を選んで訳したのが、『白いりゅう黒いりゅう』です。そこに「巨人グミヤー」を入れたのです。その後、「こういうの大好き」と小野おるさんが絵本にしたのが『巨人グミヤーと太陽と月』です。

これはたくさんの太陽や月が現れて人々を困らせます。最後の方ですが、グミヤーがどんどん太

陽や月を射落として、残った月と太陽が隠れてしまう、今度は人々が困って呼び出そうということになるのです。力持ちのイノシシが岩戸に体当たりして岩戸を開け、太陽と月を呼び出します。それは日本の神話の中の手力男命てぢからのおのみことが天の岩戸を開けるときとまったく同じモチーフです。それから、今度はオンドリが鳴いて呼び出します。これも日本と同じですね。オンドリが太陽を呼び出すのはほかにもありますが、岩戸を力持ちが開くモチーフは極めて少ないのです。太陽は女性で、月が男性です。あなたの顔をじろじろ見るやつは、針の光でもって突き刺してやりなさい、みんなに見られないから、と言って、月が太陽を慰めるところがあります。太陽は女性なのです。

ところが、意外に太陽が男性である民族の方が多いのです。まず、中国の漢民族では太陽は男です。それから、少数民族で一番多い広西チワン族自治区のチワン族も、太陽は男です。太陽はガラガラして意地悪で、我が子のことを食い殺してしまうような強い男です。そして星たちはみんな子どもなのです。父親が怖いから、いつも優しい月の母親の側にまわりついて、夜出て一緒に回っているのだというお話があります。チワン族では大体太陽は男性です。ところが、チワン・トン・タイという、同じ語族の系列に属しているトン族の方は、今度は女神様です。創世の女神です。私は、いろいろな民族の表を作ったことがあります。ここは男、ここは女というように。

でも複雑な場合もありますよ。例えば、広西チワン族自治区辺りのミャオ族は、日本と同じように太陽を信仰しているところがあって、朝日が昇ったら太陽を拝む。そういう習慣があるかと思えば、同じミャオと呼ばれる人でも、今度は雲南省のミャオ族では、太陽は男です。グミヤーの話に構成は似ていまして、やはりたくさんの太陽と月が射落とされて残った太陽と月はかくれます。呼び出されたときに、太陽は男ですから、「自分は男だから先に出る。君は、女性だから後から来たまえ」とみえをはって出て行くのです。

そうすると、同じパターンのお話の中でも、片方の民族は太陽が男で、片方の民族は太陽が女だということもあります。これはいろいろ深い意味

があって、ミャオ族も単純ではありませんし、民族識別というのは、解放後なされたものですから、一つの民族でもいろいろな歴史を持っていますので、単一ではないのです。単純に今、ミャオとかヤオとかシェとかチワンとか言っていますが、それぞれが深い歴史を持っていて、一緒に混合されたり、それから分裂したり、一概には言えないと思います。大体、中国大陸の漢民族では、太陽は男性、それから近くのチワン族も男性です。なのに、雲南の外れの方のプーラン族、しかも、プーラン山の上の方にしか、このグミヤーの話は伝承していないのです。私たちが何とかたどり着いたふもとの方には、この話は伝承していないのです。そういうふうに、電気も、もちろんガスもない、車もない、何もない、そんなところにぽつんと住んでいる人々の中に、「太陽が女性」、「天の岩戸」などアジアの東の果ての日本の神話と同じものがあるのかと、当時は非常に驚きました。

これから皆さんにお渡しした資料に、日本とアジアに共通にあるようなお話「羽衣」、「花咲かじい」、「さるかに」、「ねずみの嫁入り」などを挙げ、次に日本には余り例を見ない「王さまと九人のきょうだい」や「銀のうでわ（シンデレラ）」について時間の許す限り述べてみたいと思います。

1. 羽衣

皆さんご存じの羽衣の話は、三保の松原に舞い降りた天女が漁師に羽衣を奪われるが、やがて返してもらい、舞を舞いつつ天に昇っていく。とても美しいお話ですが、実は漁師は羽衣を返していないのです。

あれは謡曲の「羽衣」で、すばらしい芸術だと思います。けれども、実際の三保の松原の伝承は「神女之を乞へども漁人與へず」とあり、漁師は衣を返さないのです。そして妻にする。天女は「蓋し已むを得ざるなり」、いやいやながら奥さんになったという感じです。で、何年か暮らして天女は羽衣を見つけて天に帰ります。その後漁師はどうしたかということ「其漁人も亦登仙しけりという」。漁師もまた追いかけて天に昇ってしまった。そういうことなのです。羽衣はたやすく返さないのが普通の心理のようですね。

さて、それからどうなるかという、皆さんご存じの、余呉湖、近江の琵琶湖よりちょっと北の方です。天の八乙女が白鳥となって降りてくる。伊香刀美という人が、衣を隠す。それも犬を使って隠すのです。おそらく彼は獵人だろうと思います。そして天女を奥さんにして、子どもを4人生んでいます。その子どもたちは一族の始祖になっているのです。

もっと古くなると『搜神記』という中国の4世紀、晋の時代に書かれた本に出ています。江西省にある鄱陽湖という大きな湖のちょっと西の方に予章という所があります。「予章新喻県の男子田中に六、七女あるを見る」つまり、田の中に6、7人の女がいた。でも、それは本当は鳥なのだけれども、皆分からなかった。男がこっそり行って中の一人の衣を隠し脅かすと、皆飛び去って、一人だけが残り、男の妻になって、3人の子どもを生む。稲束の中に男が衣を隠したのを子どもに教えられた天女は、男の留守に羽衣を見つけて飛び去ってしまうのです。その後「三女もまた飛び去るを得たり」つまり子どもたちも飛び去ることができた、ということ、子どもたちも連れて飛び去ってしまった、ということ2種類あります。

次は唐の時代に『敦煌変文集』という本の中に、「搜神記」があり、その中に羽衣の話があります。19世紀に敦煌の洞窟から発見されたものです。『敦煌本搜神記』というのですが、それは、天女が羽衣を見つけて飛び去った後、子どもが大きくなって、母を慕って天上に行きいろいろと薫陶を受けて帰り、難題を克服して偉い人になったという話です。

今挙げたものは、中国の古い文献に書かれたものですけれども、民間伝承ではどのように伝承されているかについて、皆さんに私が昔作った分布図をお渡しいたしました (p.73 図1)。今はこれよりもさらに多くの分布図になると思います。

現在中国に伝承している羽衣のお話は、七夕型・七星型・難題型の三つのパターンに大きく分けることができます。

まず、「七夕型」のお話は、天の川の東に7人の天女。西側は人間の世界。牛飼いが牛に教わり、天の川に水浴にきた天女の衣を隠して妻にし、二

人の子が生まれる。西王母がこれを知り、天女を連れ戻し、天の川を天高く引き上げる。牛の助けで牛飼い父子は追いかけて行き、天の川の水をくみ干そうとする。それを見て王母は哀れみ、年に一度カササギに橋を架けさせ、天女と父子は会うことができた。福音館の『たなばた』の絵本は一応「七夕型」としてこの分布図に記した白い丸です。大体北の方ですが、今はもう南の方にも、大分あります。

お芝居にもなっています。昔、私は梅蘭芳^{めいらんぷあん}という京劇の有名な女形が日本に来たときに観ましたけれども、私の先生格の方が留学中に中国で観た京劇の七夕は織女を梅蘭芳が演じたそうです。

昨年の春でしたか、坂東玉三郎が北京で崑劇に挑戦し、成功を収めましたね。すてきな舞台だったようですけれど、残念ながら私は写真でしか見ることができませんでした。今度玉三郎が織女を演じたらどうかと、私はひそかに思っています。

美しいと言えはこの初山滋さんの『たなばた』の絵本も美しいですね。当時としては思い切ったヌードの天女でした。出版当初、子どもよりもお母さんの方に人気があったそうです。原画はいっそうきれいでした。

七夕というと短冊に願い事を書いて笹の枝につるしたのを思い出しますが、かつて私が広州から香港の離島まで調査に行ったとき、現地の子どもたちが「七夕が来るよ」と言って指さす方を見ると、お芝居の小屋掛けをしていたのです。中国では七夕には天女（織女）のお芝居がかかることを皆楽しみにしているのですね。

そういう意味では、今はもう南の方でも全部この白丸（七夕型）は分布図の中に数多く付けられるかと思います。私がこれを調べ始めたころは、50年も前のことで、当時フリッツ・ルンプという研究者が世界の羽衣の話の分布図を発表したのです。しかし中国の地図上には一つか二つしかない。「だからあなたがやりなさい」と関敬吾先生に勧められ、それで初めてこういう分布図を作ったのです。

次は「七星型」。「七星型」というのは、南の方に多く、沖縄や東南アジアなど、周辺にあります。天女が地上の若者の妻になり子どもを生んでのち

昇天する。やがて子どもは母を探しに行つて、山の湖に7人の天女が水浴に降りてくる、その中の一人が母だと教えられ、天女の衣にすがって母さんと叫ぶと、天女は子どもに宝物を与えて再び昇天する。だが、母は子どもを思って泣いているので、一星だけが光が薄い。これはスバル伝説と結びついています。スバルというのは七つあるのですけれども、一つの星の輝きがとても薄いのです。

わたしもラオスに行ったときに「あれが天女の7姉妹ですよ」と現地の友人に教えてもらったのもスバルでした。

タイの北部、ミャンマーとの国境近く、チェンライ、メイサイ地区のヤオ族の村で聞いた話は、7姉妹の中の天女が若者の妻になり、やがて昇天するが、若者も追いかけて天に昇り、天女の父から難題を出されて天女の援助で果たし、二人は地上に降りて暮らす。そのため一星には光がないのだという話ですが、これも外に出て「あれだ、あれだ」と教えてくれたのはやはりスバルでした。この話は「七星型」というより、次の難題型に近いかも知れません。

最後の「難題型」は中国の全土にわたって分布しています。男が天女を追いかけて行き、天でいるいろな難題を出される。その一つの例がこの『天女の里がえり』です。この話も、私が貴州省の施洞という所でミャオ族の古老から直接聞いた話です。小野かおるさんが是非絵本にしたいと言われて実現したのがこの絵本『天女の里がえり』です。

天女の父からの難題は、「木の皮をはぐ競争をせよ」とか、「一日でこの山の木を全部切れ」とか、「下から火をつけるから、上で見張っておれ」とかいうものです。焼き殺されそうになったら天女が持たせたカニが穴を掘り、穴の中で、火が通り過ぎるのを待っていた。これは日本神話にもあります。最後は銅鼓を盗む難題ですが、音がして見つかってしまい、番人と山犬に追いかける。そのため、今度は物を投げながら逃げていく。最初はトゲの種を投げると、いばらの垣根となり、次には竹の種を投げたらタケノコが生えて、追手が食べているうちに又逃げて、最後は山水の種、山と水の種を投げたら高い山ができて、大きな川ができて、とうとう追いかけてこなかったという

お話です。こういうふうにして「めでたし、めでたし」になるのですが、ここはもう一ひねりひねって、最後に毒を飲まされ殺されてしまった。けれども天女の計らいで、天の川から死体を流したときに、蛇を呼び、毒を吸い取らせて生き返り、地上で幸せに暮らしました、という話です。

ほかにも天女の話はたくさん聞きました。4種類から5種類ありました。「これはきつともう一つの類話が結びついたと思う」と語り手も言っていました。最後に銅鼓を無事に持ってきた。そこでお祝いになって、そのときに銅鼓をたたいたら天女の父親のおなか割れた（天女の父親はいつも悪役なのです）ので二人はまた下界に戻り幸せにくなりました、というお話もあるのです。

だから、少し複雑になっておりますけれども、ここで出された難題は、焼畑耕作の一連の過程です。（後でスライドの所で説明したいと思いますが）「難題型」の中には山地民と平地民の場合があります。平地民の中ではタイ族の「くじゃくひめ」の話が『白いりゅう黒いりゅう』の中にあります。王子がくじゃく姫の衣を隠して妻にする。これをねたんだ側近たちに謀られ、王子が出征した後で姫は殺されることになった。くじゃく姫は飛び去ってしまい、追いかけて行った王子がくじゃく姫のお父さんから難題を出される話です。そのときは、「大勢のくじゃくから姫を選べ」とか、「米と粟あわを選り分けよ」とか、「岩山を射抜け」とか、そんな難題です。平地民の場合はそれほど生業形態が表れてはいない難題があります。山東省の方の難題などは、日本の神話にそっくりな「虫蛇の害」などもあります。

以上のような「難題型」の羽衣は中国で一番ポピュラーな形として今も語り伝えられています。後でスライドを少しお見せします。

2. 花咲かじい

中国では「狗耕田」、「畑を耕した犬」やこの「歌をうたうねこ」（『けものたちのないしょ話』所収）があります。

「畑を耕す犬」は欲張りの兄が弟に犬1匹与えて、分家させます。弟は手作りのスキを犬に引かせて畑を作り豊かになります。兄が犬を借り、やらせ

たが犬は動かず、怒って犬を殺す。弟は犬のなきがらを埋めると、そのお墓から竹が生えて、それをゆすると金銀が落ちてくる。兄がまねをすると、汚いものが落ちてきてひどい目にあう、というお話です。

「歌をうたうねこ」の方は、弟が歌を歌う猫を見つけて抱いて帰り、大切にしている。猫はいつもベランダで歌を歌っている。すると、猫の歌声を聞いて獣たちが集まってうっとり聞きほれる。その歌声を聞いた病気の子どもは元気になり、腰の曲がったお年寄りもシャッと腰を伸ばす。とてもよいことばかりです。

それを欲張りの兄が聞きつけて猫を抱えていき、無理に歌わせようとしたけれども歌わないので、猫を殺す。弟が猫のなきがらを埋めると、太い竹が生える。弟がその竹で豚のえさ箱を作ったら、えさがどんどん増えて豚が丸々と太る。兄がえさ箱を担いで行って自分のところで使ったら、豚は見る見る死んでしまうし、えさは無くなる。兄が怒ってえさ箱を打ち壊すと、弟は壊れた竹でたらいを作る。それで行水をするすると金銀が浮かんでくる。兄がまねをするが、失敗。兄はたらいを砕き、弟がお箸を作る。そのお箸で弟がご飯をいくら食べても減らないけれども、兄が食べたなら死んでしまった、という結末です。

最後に、もう一度墓から竹が生えてくる。弟はそれを切って笛にすると猫の歌声が聞こえてきた。弟はその笛を持って行って、ベランダで吹くと猫の歌声がして元のおりに獣たちが集まってくるうっとり聞いている。いつかきつと竹の中からもう一度歌う猫が出てくるのではないか、それを信じながら待っている、という話なのです。

チワン族にも「歌う猫」があります。ここでは、竹が切られて、兄が失敗するたびに破壊し、最後にお箸から弟が釣り針を作ります。

弟は釣り針で「海幸山幸」と同じように海で釣りをしている針を落とし、竜宮に行きます。実はそこで乙姫様が「あなたは王様が何を欲しいと尋ねても要らないと言って、猫をもらいなさい」と教える。竜宮から猫をもらって帰ってくると、その猫が乙姫様だったという話です。

次に行きます。次は「さるかに」です。

3. さるかに

「今夜妖怪がくる」（『けものたちのないしょ話』所収）、これは子牛とおばあさんの関係ですけれども、かわいがっていた子牛が妖怪に食べられてしまい、妖怪が「今夜はまんぷく。だが明日の晩はお前を食べに来るぞ」と言う。これはさるかにの「仇討型」の部分です。そこで、おばあさんが泣き泣き歩いていると、卵が「おばあさんどうしたの」と声をかける。「まあ卵さん聞いてくれ、今夜妖怪が私を食べに来るんだよ」、「大丈夫、僕が助けてあげるから」と卵が胸を張る。その次出会うのがぞうきん、カエル、火ばさみ、こん棒、牛の糞、石うすです。

これはトゥ族のお話でモンゴルに近い所です。ジンギスカンが支配して引き上げて行ったあと、ジンギスカンの後裔たちと現地民とが一緒になってできた民族です。このお話の中で、ボルというのは石のローラーみたいなもの。それから火ばさみというの、私は分からなかったのですが、国立民族学博物館にたまたま蒙古の展示場ができていて、テントの中に火ばさみがありました。こういう道具は民族の特色が出ております。ここでは小澤先生がおっしゃっているようなくり返しが省略されています。それはきっと皆さんは勉強してらしてご存じだと思います。卵が来て「おばあさんどうしたの」と聞いたら、おばあさんは「こうなんだよ」。その次ぞうきんが来た。「おばあさんどうしたの」、「こうなんだって」。それがずっとくり返されたと思います。ところがこれらの原文は、くり返しが省略されています。多分これは話者が省略したか、それをまとめた人が省略したと思います。

もう一つ、「ママの仇討ち」という、これはミャオ族の話なのですが、この話を皆さんに本当は時間があれば紹介しようと思っていましたが、時間がないので、一部分だけ紹介します。「ママの仇討ち」は、雌鳥が山猫に食われてその子のひなどりたちが仇討ちに行く話です。

途中で縫い針に出会い、それから牛の糞に会って、カニに会って、木槌に会って毬栗に会うのです。そのときにいちいち面白いくり返しがあります。例えば初めの縫い針は「ひなどり君たちどこ

行くの」、「山猫のところへ、ママの仇討ちに」、「ぼくもいっしょにつれてって」、「そんな細い目で何が出来るの」、「行けばわかるさ。役に立つよ」。ひよこはちょこっと考えて「よし、それならいっしょにいつてくれ」。縫い針はサッサッサッと機織りの杼のように付いてきた。その次牛の糞はべったんべったん。次のカニは原文だとパーヤパーヤと、多分カシャカシャカシャと付いてきた。次は木槌がポンポンポンと付いてきた。その次の毬栗はコロコロコロと付いてきた。

ずっと擬音になっていて、これは採集者が見事でした。この方は、私も知っている唐春芳というベテランが採録したものです。

今回なぜこの「今夜妖怪がくる」を挙げたかという、これも孤独な老婆です。例えば『月からきたトウヤーヤ』もそうですが、ぞうきんが出てきたり、火ばさみだとかこん棒だとか、本当に身近なもの、自分のわらじを編む棒だとか道具だとか、それらに皆ポンポンとかコンコンとか名前を付けて子どもみたいにかわいがって、物たちが人間のようにおばあさんを助けています。こういうのが孤独なお年寄りを元気づけるのではないかということで、今こういう本にとっても注目しています。昔話はやはりお年寄りのためにも絶対必要だと思っています。それでこのお話を選びました。

4. ねずみの嫁入り

「ねずみの嫁入り」も一言で申し上げます。日本のお話の場合、ネズミにとって一番いいお婿さん候補は太陽です。太陽、雲、風、壁の順で、壁は最後にネズミにかじられてしまうから、やはりネズミがいいということになります。大島先生に伺いたいのですが、多分『宇治拾遺』にありますね。そこでは築地だっと思いたいますが、築地というのは、やはり壁です。壁の塀のように上に屋根が付いているのを築地と言うそうなのですが、日本でも古いものはやはり壁の一種です。

この「ねずみの嫁入り」は、アジアには大そう広範囲で広がっています。西も東も南のインドまで全部です。ここでは西の方、新疆省のカザフ族の話、「ネズミ美人」（『けものたちのないしょ話』所収）というのを選びました。この場合は、ネズ

ミは自分で「私は美人だから、私が自分でお婿さんを探すわ」と言って太陽の所へ行って、「あなたすばらしいわね。私のことお嫁にしてくれない」と言うと太陽が「本当に君は美人だね、でもね、夜になると僕は駄目なんだ。月の所へ行ってごらん」と太陽に言われて月の所へ行くと、「やっぱり僕は雲にはかなわないのさ。雲には隠されてしまうから」と言います。彼女は雲の所に行きます。雲は風に飛ばされる。その次に何が来るかという、この「ネズミ美人」の話では、「風はいくら吹いても山を飛ばすことはできない」と、山が出てくるのです。山の所へ行くと、「自分の体のあちこちにネズミが入り込んで、食い荒らされてひどくて辛くてたまらないからネズミが一番すごい」ということで、「じゃあ、ネズミにするわ」と言って彼女は自分の意志でネズミにお嫁に行きます。

この話は新しいのではないかと初めは思いました。重要なのは、結局風を遮るのは何かということです。壁のある家屋・生活の民俗です。これは調べていけば大分西の方まであります。壁が遮るところが壁がなくて生活している人がいるでしょう。テントの生活だとか砂漠だとか草原だとか。では草原はどうしているだろう、蒙古の人たち、ゲルの人たちは壁がない、では風をだれが遮るかと思って、草原に住む蒙古の話を探しました。

そうしたら樹木なのです。その木は何の木かと言うと、白檀びやくだんの木、つまり栴檀の木です。木なら理解できます。確かに草原の中で木というのは非常に貴重な存在だろうと思います。なぜ白檀か、栴檀かと考えたときに、蒙古の民話はインドから、チベットからずっと宗教的な影響を受けています。だから蒙古の話にはライオンなど平気で出てくるのです。蒙古にライオンはいないでしょう。でもライオンの話があるのです。昔話は単なる生活環境とかそういうものだけではなくて、いろいろな宗教とか民族移動が影響していると思います。大体栴檀はインドネシア原産ですから、栴檀の木、白檀の木というのは南の方に多く出てきます。仏教説話にもたくさん出てきます。蒙古の草原で白檀の木が風を遮って偉いと言われるのです。それは多分インドとかそちらの影響だろうと

私は思います。ですから昔話はなかなか一筋縄では行きません。

さて、この話は、種を明かせばインドの「パンチャタントラ」にあるのです。大もとの紀元前のこの話の場合、何があるかといえば、やはり太陽神、雲、風、山で、山はやはりネズミにやられるからネズミがよいということになっていました。この場合ネズミは養い親も一緒に探して歩くのです。

すると、娘の方が「私あの男はいや」と言うのです。太陽もいや、その次に雲もいや、月もいや。太陽も「僕よりも彼の方がいいよ」と言うのですけれども、その前にネズミの娘自身が「私はあの好きじゃない」と自分の意志で拒否するのです。そして最後にとうとうネズミのところへお嫁に行くという話です。

とすると、このカザフ族の話は別に新しいわけではない。ネズミ娘が自分の意志で決めることも、それから最後に風が山に遮られることも同じで、むしろ大もとに近いわけでは。

東南アジアも調べてみました。するとミャンマーの話で「太陽、あなたが一番力があってすばらしいと聞いたけれども」と、ネズミの親が太陽に聞くのです。「うちの娘の婿になってくれまいか」と言うと、「いいですとも」と喜んで太陽はOKするのです。ところが親ネズミの方が「この男でいいのかな」と疑ってしまって、「でも、本当にあなた最高なの」ともう一度念を押します。そうしたら太陽も考えてしまって、「そう言われてみれば雲の方がいいかな」となるのです。順々に。そういう何か、人情の機微に触れるものがあって、そこにほのぼのとした、何とも言えない味わいがあります。

中国にはネズミのほかに「いや、ネズミよりも猫が偉い」と最後に猫が選ばれるものもあります。ネズミがいそいそと花嫁衣装を着て猫のところへお嫁に行く。するとパクッと食われてしまう。そういう話が結構あります。中国へ行かれた方から「中国ではネズミよりも猫の方が偉くて、ネズミの嫁入りも猫に嫁入りして猫に食われてしまう話がたくさんあるのには驚きました」とお手紙をいただきました。それは、ネズミというのは農耕

民族にとっては、やはり敵なのです。そのことは、中国では紀元前の「詩経」という書物にも出てきます。農作物を食べられてしまうでしょう。穀物を蔵の中、小屋の中に置いてもネズミが散々食べてしまうでしょう。だから、ネズミはやっぱりその人たちに恨まれているのです。そうすると猫というものが最後に出てくる話ももっともなのですが、実はその話は「ネズミの嫁入り」ではなく、「猫の名は猫」という話が別にあるのです。これから紹介する猫の話は、ベトナムの話ですけれども、中国にも同じ話があり、猫の系列、ネズミの系列と両方あるわけです。

ある人がとても自慢の猫を手に入れたので何と名前を付けようか、天が一番よいじゃないか、天としよう、やっぱり雲に隠される。雲としよう。雲は風に飛ばされる。風は壁に遮られる。壁はネズミに食べられて、ネズミは猫に食われる。だから猫は猫。だから名前を付けるときに、天猫にしようか、風猫にしようか、ネズミ猫にしようか、やっぱり猫は猫だとなるわけです。こういうふうにならぬいろいろなお話がありまして、日本と大変よく似て、アジアでも広く広まっているものが多く見られます。

5. 王さまと九人のきょうだい (p.73 図2 参照)

9人一緒に生まれた「ちからもち」、「くいしんぼう」、「はらいっぱい」、「ぶってくれ」…など珍妙な名前の子どもが、それぞれに特技を発揮する、痛快なお話です。ところが生まれる理由は裏腹に孤独、悲惨、涙なのです。では物語の発端と結末とに絞ってお話しましょう。

話の発端は、孤独な悲しい老婆とか、子のない年寄り夫婦が悲しみの余り涙を落とす。すると「なぜ泣くのじゃな」と仙人が声を掛ける。子どもがいないとののしられ首をくくって死のうとした嫁に「これ、死ぬでないぞ」と仙人が止めてくれる、そういう悲しい、寂しい、孤独を救われるような話の発端が多いです。そのとき仙人から丸薬をもらう場合もあれば、果物をもらう場合——桃とかみかんとかいろいろありますが、それを一度に食べて、その数だけ子どもが生まれ、やがて大活躍の元気な話へと転換するのです。

では話の結末はどうかといえば、例えばイ族の9人の兄弟は、水くぐりがバツと水を吹き掛けて、王様も御殿も全部押し流してしまった、という痛快な締めくくりです。

それから、リー族の『ゆうかんな十人のきょうだい』の場合は、最後に10人兄弟の中の泣き虫が泣いて泣いて涙で洪水を起こし、王様の御殿を揺るがしてしまったので、王様は降参して兄弟たちの要求を全部聞き入れた、にとどまります。イ族のように王様を完全にやっつけてしまっただけではありません。

それから朝鮮族、ここでは6人兄弟です。話の最後に6人兄弟の家族が全部崖の下にくくられてしまうのです。以前、私の文章に瀬川康男さんが面白い挿絵を描いてくれました（『民話集』）。そして崖の上から大きな岩を落とすのです。そうすると、全部つぶれてしまいますから。6人兄弟が特技を持って抵抗するので代官たちは、今までどうしてもかなわなかったわけです。だが一家をこれで全部やっつけたと得意になって、彼らは大蛇のようにのろのろと腕を組んで帰って行った。ところが、つぶされたと思った6人兄弟の家族は代官たちが立ち去ってからこっそり立ち上がった。それは六男のつぶれないが頭で大岩を受けとめ、両手で支えて家族は一人また一人とそこから出て行って全員が出て、どこへともなく逃げ去ってしまったという結末なのです。

これは吉林省、延辺の朝鮮族が伝承しています。17世紀以降朝鮮半島からいろいろな理由で逃れてきた人たちによって伝承されてきた話の結末が、このように最後まで絶対に負けないで、殺されないで逃げおおせるというの、この場合勝利ではないでしょうか。逃げた先にはまた何かよい天地が待っているだろうという希望を残して終わっているのです。

ヤオ族にも同じ6人兄弟の話がありますが、ヤオ族の場合は末弟のつぶれないが、石堀にくくりつけられ、兄弟がやっぱり崖つぶちを押されて、代官の家来たちが大勢で石堀を押すのです。押され、今にも押しつぶされてしまいそうになったとたんつぶれないがバーンと跳ね返すと大きな石堀が逆に代官たちの方に倒れて代官たちは全部死ん

でしまった、という結末なのです。非常に似ているのです、6人兄弟のお話が。似ていて結末が違うわけです。ヤオ族というのは、「評皇券牒」というお墨付きの文書を持って、焼畑をしながら移動をしていた民族で、かなり気概を持っている人々です。結末のところしか今日は話ができませんでした。とても中途半端で心残りですけれども、スライドをお目にかかる時間を残さないといけませんので、お話の方はここまでにしておきます。皆さんご清聴ありがとうございました。

6. 銀のうでわ、ターカ・タールン

少し時間が残っているそうなので「アジアのシンデレラ」について一言話させていただきます。

『銀のうでわ』は、イ族、『王さまと九人のきょうだい』と同じようなイ族の話ですけれども、『銀のうでわ』の方は涼山イ族で、奴隷社会が中国の開放まで続きました。『王さまと九人のきょうだい』の方は楚雄という所のイ族で、もう少し緩やかな生活をしていたようです。『銀のうでわ』の場合は靴の代わりに腕輪ですけれども、チワン族の「ターカ・タールン」の方は靴です。実は『けものたちのないしょ話』にも「靴のゆくえ」という朝鮮族の話を入れております。シンデレラの話はやはり『西陽雜俎』という唐の時代に書かれたお話が一番古いと言われております。

唐の時代の話は、葉限しょうげんという女の子が継母にいじめられて、ふだん深い谷へ水くみに行ったり山へ木を取りに行ったり、いろいろさせられていた。ある時彼女が金の目の小さな魚を川で捕ってきて、たらいの中で養っていたがどんどん大きくなったので池で飼うことにした。彼女が池に行くと魚は必ず岸辺に顔を出すけれども、他の人にはだれにも顔を出さなかった。

ある時継母は、彼女を遠くの方まで水くみにやって、彼女の着物を着て池に行くと魚を呼び、魚が顔を出したときに刀で切り殺してしまう。魚は死んでしまった。彼女は帰ってきて、もう魚が顔を出してくれないので泣いていると、天から被髪粗衣はつの人が（これは神様かあるいは亡き父か）降りてきて「骨を取って隠しておくように。欲しいものを骨に祈ればかなえられる」と言います。

その魚は家族に食べられてしまうけれども、葉限は骨を集めて、隠しておく。試してみると骨が何でも願いをかなえてくれる。村祭りの時に継母と妹は彼女に庭の果実の番を命じ、出掛けて行く。その後で、葉限は骨に祈り、翠紡くつの上衣に金の履というすばらしい衣裳で祭りに行く。

そうするとその祭りの会場で、「あ、あれお姉さんじゃない」と妹が疑ったので、「まさかあの子は来てやしないだろう」と継母は思いましたが、葉限はあわてて逃げ帰ってくるのです。そのとき履を片方無くしてしまう。無くしたまま帰ってきて、また木を抱えて寝ると二人が帰ってきて、「やっぱりここに寝ているじゃないか」と言って安心してその日は済むのです。

葉限の無くした履は村人に拾われて、それが流れ流れて陀汗国ダカンという国の王様の手に入ります。王様は、この履の主をさがし、国中の娘たちに履かせたが合う者がいません。方々を探して歩いて葉限の家にも来るのです。葉限の家に来たけれども、もちろん妹が履いても合わない。

この履は不思議な靴で、「軽きこと毛の如く、石を踏んでも音無し」。さらに大きな足の者が履けばもちろん入らず、小さな足の者が履いても合わない。ところが葉限が履いたらぴたっと合った。葉限はもう一つ片方の靴を懐から出し、両方を合わせて履くと天女のように美しかった、という表現があるのです。中国の場合は「ターカ・タールン」もそうですけれども、対になることが多く、両方合わせてやはりそうだと納得するのです。

その後葉限は王様のお妃になって一緒に陀汗国に連れて行かれる。いっぽう継母と妹は「飛石に打たれて死ぬ」とありますから、懲罰を受けたということなのです。

この話は9世紀に書かれたものですが、著者の段成式が邕州生まれの使用人から聞いた話だと記しています。邕州は今の広西チワン族自治区の南寧辺りなので、私も1980年頃にその地に行き、チワン族の村で聞いた話が「ターカ・タールン」という話です。ストーリーは『銀のうでわ』とほとんど同じ展開ですけれども、ターカという少女が飼っていた牛が助けてくれるが、その牛が継母に殺されて、殺された牛の骨から衣裳や靴が出てき

ます。それらを身に着けて祭りに行く途中、橋の上を渡ったときに「王子様のお通り」という声を聞いて、彼女は急いで橋を渡り川の中に靴を落としてしまう。王子様が川の中の輝く靴を見つけて「あのきれいな靴はだれのだ」とたずね、祭りの場で高く掲げて探すのです。けれども、だれもその靴に足が合わない。彼女の所までずっと探しに来て、彼女の足がびたりと合う。そのときターカも懐から靴を出して合わせて履き、王子様と結ばれます。

『銀のうでわ』もそうですけれども、里帰りして継母と妹に殺されて、彼女は鳥になり、それから殺されて竹に転生し再生して、最後に竹も燃やされて、隣の老婆が火吹き竹を探しに来て、それを持ち帰っておくと、そこから美しい娘が現れる。竹がいつも死と再生の役割を果たしているようですけれども、「ターカ・ターレン」の場合もそうです。竹から現れて、そして老婆が事情を聞いて元の夫に知らせます。

すると妹も頑張ります。お姉さんが再生して元のさやに納まっても、「だって私は器量が悪いから、こんな運命になったのよ。お姉さんどうしてそんなにきれいな、どうしてそんなに色が白いの」と聞くのです。するとターカもそ知らぬ顔をして、「穀物がつかれて白くなるように、うすの中に横たわってつかれてごらんなさい、そうすると私のように白くなるのよ」と言うのです。そのうすを、私は初めてチワン族の里で見ました。棺かん桶おけくらい、人が横たわれるような穀物をつくうすなのです。妹は本気になって、うすに横たわり里の母親についてくれとせがみます。母が言われたとおりにすると、娘は死んでしまい、それを見て母親も死んでしまったということです。この最後の懲罰はすごいなと思いました。アジアの場合はそういう悪いことをしたら悪い報いというのははっきりしています。

大変残念ですけれども時間が来てしまいましたので、この辺で終わらせていただきます。

7. スライド

(1) タイ族（雲南省）



先ほど「羽衣」の中で話をしたタイ族で、くじゃく姫の話を伝えている人々です。ここは東南アジアのタイとの国境地帯、シップソーンパンナという所です。この日は水かけ祭りの正装をしています。パラソルをさして、ブラウスと巻きスカートのような感じの、筒になっているスカートです。

この後ろに見えますのはお寺です。お寺の中には大きなお釈迦様が安置されています。そのお釈迦様のお顔はすごく眼が大きくて、日本のお釈迦様のように悟ったやさしい落ち着いたお顔ではありません。現世で救ってあげようというしっかりしたお顔をしています。

(2) 水かけ祭り



これは水かけ祭です。4月の中旬ですけれども、タイ暦のお正月です。ある所にお水をたくさんためておいて、水をかけ合うのです。かけることによって災いを払い、幸せを招来することや、稲作に対して降雨を願うことなど、いろいろな意味があるようです。

(3) くじゃく姫



これが先ほど言いました「くじゃく姫」を歌劇にした舞台です。1979年です。最初に行ったときの古い写真を探してきたのですが、今はもう本当が変わったそうです。少数民族だから古いものをもとって探してきましたが、カメラも、私の腕もぼけています。

7羽のくじゃくが湖で舞を舞っているところです。その中の1羽のくじゃくの衣を隠して、王子様が妻にして、やがてそのくじゃくは悪い大臣たちのごんげん讒言によって殺されることになるのです。それで、「死ぬ前に1度だけ羽衣を着て舞いたい」と言って返してもらい、舞いながら飛んでいってしまう。あとで王子が帰ってきて、探しに行き、くじゃく姫の所でそのお父さんから難題を出されます。

(4) 舞台



この劇団の団長は、くじゃく姫のお母さん役です。日本の宝塚のように女性が多いですけれども、男性もいます。ここではくじゃく姫のお母さんが王子様に難題を出します。このとき私は舞台に見入っていました。するとふいに「タイ族のこの話を日本で紹介してくれた翻訳者が来られた」と、むりに舞台に出されてしまいました。このタイ族は皆すらっとしていたので、私はとても恥ずかしかったですね。

(5) チワン族（広西チワン族自治区）



これはチワン族です。広西チワン族自治区に住んでいます。この地の武鳴ぶめいという所で「ターカ・タールン」を聞きました。この民族には「8人兄弟」の話もあります。最後の「大泣き」が泣いて泣いて、王さまや家来など全部流してしまう痛快なお話です。それから『チワンのにしき』はご存知でしょう。これもこの人たちが伝承しているお話です。

(6) イ族（青イ）



この方はイ族です。イ族も7種類ぐらいあります。このイ族は北の方の雲南省、四川省、貴州省の境の馬街という所に住み、せい青イと呼ばれています。ここの人たちは、竹から生まれた5人兄弟がそれぞれイ族の支系の先祖になった話を伝えており、竹細工をしています。海拔が高いですから太い竹ではありませんが、雲南省から移住してきたということです。雲南省の方の竹は太いです。この方に初めてポラロイドの写真を撮って記念に差し上げました。とてもいい顔をしているでしょう。

(7) イ族 (竹細工)



左は娘さんです。右はおばあちゃまです。生まれて初めて自分の写真を見たと、顔をほころばせました。これはイ族のうちの、青イ^{せい}とって、青い着物を着ているので、そう呼ばれた人々です。「竹の息子たち」の話を伝えており、この人たちは5人兄弟のうちの末の息子の子孫だそうです。

(8) イ族の女性



これは、雲南省の楚雄に住むイ族の娘さんだそうです。『王さまと九人のきょうだい』はこの地域一帯に広く伝承している話です。

(9) 涼山イ族



これは四川省の涼山に住むイ族で、『銀のうでわ』はこの地方のお話です。両方の手首に銀の腕

輪をしています。小野かおるさんの絵で絵本になりました。

シンデレラの話は中国でも多くは靴です。靴に合う娘を探して歩く話が多いのですが、腕輪のときもあります。岩波の編集者と相談したときに「やっぱり腕輪の方が面白い」ということで、腕輪の話を選んだのです。

(10) チベット族



これはチベット族のお嫁さんです。地方によって色々違いがあり、この方は四川省のアバという所のチベット人だそうです。

(11) リー族 (海南島)



これは『ゆうかんな十人のきょうだい』のお話を伝えた海南島のリー族です。これは勇ましいミニスカートです。リー族にはたいへんおもしろい話がたくさんあります。

(12) リー族の機



機を織っているところですが、足を開いた幅です。この足の幅、機の幅によって、布の幅が異なります。リー族はこういう狭い機で織っております。民族衣装のデザインもおのずから異なります。

(13) ペー族 (洱海のほとり)



これは雲南省ペー族です。洱海という湖は『白
いりゅう黒いりゅう』が戦った所です。ちょうど
これは、冬至のお休みのときだったと思います。
娘さんたちが三々五々遊んでいたのが偶然こんな
構図になりました。

(14) ペー族の建物 (大理)



ペー族の人たち、これは特別な家ではないので
す。でも彫刻がこんなにすばらしい。大工の匠、
名人といますか、彫刻家といますか、非常に
すぐれているのです。外国に出て行ってお仕事を
する人もたくさんいるそうですけれども、だから

『白いりゅう黒いりゅう』の物語のように竜を自
分たちで彫って悪竜と戦わせようというような発
想が生まれるのですね。

(15) ペー族の彫刻



これは同行してくれた社会科学院の民族文化研
究所長のおばさまの家です。これこそ普通の家で
す。立派な彫刻でしょう。非常に豪華なものです。
ちなみに、さきほど娘さんたちが赤いベストを着
ていましたが、あれは未婚の方です。結婚すると、
この方のように少し地味なベストになります。

(16) ミャオ族 (貴州省)



これは貴州省のミャオ族です。6月下旬に施洞
という所で龍舟祭が行われます。ちょうど日本の
お正月のように、いろいろな行事が合わせて行わ
れ、とても盛大です。その祭のために子どもが盛
装したところです。

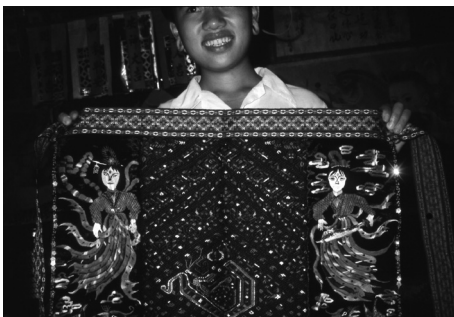
(17) ミャオ族 (男性の服装)



これは後ろに赤羽先生が見えるでしょう。私が

最初この地に入ったときはまだ男の人がこういう服装だったのですが、赤羽先生をご案内するころは、もう普通の服装でした。男性が民族の中で一番早く服装が変わります。どの民族でも女性の方が民族衣装を伝えていますね。『あかりの花』にはトーリンという若者が出て来ます。ところが男の方は民族の衣装を着ていません。それでわざわざスケッチのためにこの服装をしてもらったのです。

(18) 天女の刺しゅう



これは龍舟祭の朝です。5時ごろ村の家々を回りましたら、この女の子が家の奥からかけ出してきた「出来たのよ」と言ってぱっと開いて見せたのがこの見事な刺しゅうです。これは5年くらいかけて天女を刺しゅうしたものですが、お相撲さんのまわしのように民族衣装の前に付けるのです。天女の話はこの地でたくさん伝承しています。先ほどの「天女の里帰り」のような天女のイメージを民族衣装に何年もかけて刺しゅうするので、それを真っ先に見せてくれたのです。うれしかったのですね。ですから、彼女たちの考えている天女というのは大体こんなイメージなのかなと

思います。

(19) ミャオ族の正装 (口絵参照)

これは正装したミャオ族の娘さんです。今の天女の意匠もここに付けるものです。その村々によって民族衣装が違います。大体銀の飾りを付けてまして、それぞれにいろいろなデザインの腕輪をしています。腕輪をみんな両方に付けています。

(20) ミャオ族のお嫁さん



これはミャオ族のお嫁さんです。お嫁に行くときに高い敷居をまたいでその家にお嫁に行くということです。日本でも敷居が高いなんてよく言いますね。

スライドはこれでおしまいです。ちょうど4時半までというお約束ですから、ここで終わりにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

(きみしま ひさこ 国立民族学博物館名誉教授)

「日本昔話のアジア的展望」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	天女の里がえり：中国のむかしばなし	君島久子文 小野かおる絵	岩波書店 2007.10	Y17-N07-H1388
2	白いりゅう黒いりゅう：中国のたのしいお話	賈芝、孫剣冰編 君島久子訳	岩波書店 2003.5	Y9-N04-H136
3	けものたちのないしょ話：中国民話選 岩波少年文庫	君島久子編訳	岩波書店 2001.11	Y7-N02-6
4	王さまと九人のきょうだい：中国の民話	君島久子訳 赤羽末吉絵	岩波書店 1969	Y7-1854
5	銀のうでわ：中国の民話	君島久子文 小野かおる絵	岩波書店 1997.11	Y17-M98-419
6	巨人グミヤーと太陽と月：中国のむかしばなし	君島久子文 小野かおる絵	岩波書店 2000.1	Y17-N00-159
7	月からきたトウヤーヤ	肖甘牛著 君島久子訳 太田大八絵	岩波書店 1969	Y7-1529
8	ねずみのおよめさん (こどものとも、年中向き：通巻238号)	小野かおる再話・画	福音館書店 2006.1	Z32-863
9	たなばた	君島久子再話 初山滋画	福音館書店 1977.4	Y17-M98-807
10	ほしになつたりゅうのきば：中国民話	君島久子再話 赤羽末吉絵	福音館書店 1963	Y17-2939
11	ゆうかんな十人のきょうだい かみさまになりそこねたサンダル	君島久子文 馬場のぼる絵 さとうわきこ絵	講談社 1990.2	Y18-4725
12	月をかじる犬：中国の民話	君島久子著	筑摩書房 1984.7	Y8-1806
13	中国の神話：天地を分けた巨人	君島久子著	筑摩書房 1983.2	Y8-458
14	民話集	君島久子訳	盛光社 1967	(所蔵なし)

レジュメ

参考図書紹介－日本の昔話を知るためのブックリスト－

石渡 裕子

参考図書紹介
－日本の昔話を知るためのブックリスト－

国立国会図書館国際子ども図書館
平成20年度児童文学連続講座
平成20年11月10日
資料情報課 石渡裕子

1

参考図書の紹介

- 1. 入門書
- 2. 日本昔話資料集
- 3. 日本昔話文献目録
 - (1) 辞書・事典類
 - (2) 書誌・図書目録
 - (3) 研究書
- 4. レファレンス

2

1. 入門書

1. 入門書

- 1. 小澤俊夫『昔話入門』
ぎょうせい 1997

4

1. 入門書

- 第1章 昔話とは何か
(昔話の考え方、昔話の研究、現代における昔話の位置)
- 第2章 昔話のおもしろさの秘密
(昔話のおもしろさの分析、昔話のおもしろさの特徴、普遍的知恵をもっている昔話)
- 第3章 グリム童話の成立と特徴
(『グリム童話集』の成立、『グリム童話集』についての誤解と問題点、『グリム童話集』の文体、『グリム童話選集』)
- 第4章 子どもに昔話を！
(ストーリーテリング、昔話絵本について)
- 第5章 昔話の種類
(「昔話の種類」、「AT主要話型」)
- 第6章 日本昔話と関係の深い海外の昔話

5

1. 入門書

- 2. 稲田浩二、稲田和子
『日本昔話ハンドブック』
三省堂 2001

6

1. 入門書

- 第一部 日本昔話への招待
(日本昔話とは何か、日本昔話の国際性、
古典の中の昔話、昔話研究史、日本昔話の
分布地図)
- 第二部 日本昔話二百選—あらすじと解説
- 第三部 日本昔話の継承と普及
(日本昔話の継承、ストーリーテリング、
昔話(民話)をテーマにした施設と活動)
- 第四部 資料編
(昔話の用語、日本昔話資料集目録、日本昔
話文献目録)

7

2. 日本昔話資料集

2. 日本昔話資料集

- ①日本昔話名彙 1948
- ②日本昔話集成 1950—1958 全6巻
- ③日本昔話大成 1978—1980 1-12巻
- ④日本昔話通観 1977—1990
資料篇1-29巻
研究篇2巻

9

2. 日本昔話資料集

- ⑤全国昔話記録 1942-1944 全13巻
● 『日本昔話記録』と改題して、1973-1974 復刊
● 『日本昔話記録』のまま、版型を大きくして2006年
● 10月復刻版を刊行。全13巻
- ⑥昔話研究資料叢書 1968-1991
● 全18巻別巻6巻(ソノシート付の巻あり)
- ⑦日本の昔話 1972-1980 全30巻
- ⑧全国昔話資料集成 1974-1984 全40巻
- ⑨日本の民話 1979-1986 全12巻
● 『日本の民話』新装版 1-12 1995年

10

3. 日本昔話文献目録

3. 日本昔話文献目録

- (1)辞書・事典類
- ①稲田浩二〔ほか〕編
● 『日本昔話事典』1977
- ②志村有弘、諏訪春雄編著
● 『日本説話伝説大事典』2000
- ③DBジャパン編
● 『日本の児童文学登場人物索引
● 民話・昔話集篇』2006

12

3.日本昔話文献目録

- (2) 書誌・図書目録
- ① 全国昔話伝説関係資料蔵書目録：1986
遠野市立図書館編 1987
- ② 日本文学研究文献要覧：古典文学.
2000-2004 石黒吉次郎監修 2006

13

3.日本昔話文献目録

- (3) 研究書
- ① 国際比較論、起源・変遷・伝播論
- ② 古典文学との比較研究
- ③ 意味論
- ④ 構造論
- ⑤ 語り口の分析、伝承者論
- ⑥ 機能論
- ⑦ 再話・翻案・再創造に関する研究
- ⑧ 今日的伝承に関する実践研究
- ⑨ 論文集

14

3.日本昔話文献目録 (3) 研究書

- ① 国際比較論、起源・変遷・伝播論
「昔話が、どのような歴史的・文化的な背景の下に成立し、時代の推移や異文化交流の中でどのように変容していったのかを考証しようとするもの。国内・国外の類話の比較研究はもとより、人類学・考古学・生物学・言語学など、さまざまな領域の知見を取り入れながら研究が進められている。」
(『日本昔話ハンドブック』p.46)

15

3.日本昔話文献目録 (3) 研究書

- ② 古典文学との比較研究
「書承の説話や歌謡、語り物など隣接する諸ジャンルの古典文学作品との関係性(影響関係や類似性など)について比較検討する研究。」
(『日本昔話ハンドブック』p.46)

16

3.日本昔話文献目録 (3) 研究書

- ③ 意味論(心理学的・社会的・思想史的解釈)
「昔話の登場者やストーリー展開にどのような意味が内在しているのかを、深層心理学・社会学・歴史学などの立場から解釈していく研究。」
(『日本昔話ハンドブック』p.46)

17

3.日本昔話文献目録 (3) 研究書

- ④ 構造論(昔話の形態や構造の分析)
「昔話の登場者やストーリー展開に一定の型(パターン)を発見し、その形態上・構造上の特質について分析するもの。言語学(記号論)や構造人類学の理論にもとづいている。」
(『日本昔話ハンドブック』p.46-47)

18

3. 日本昔話文献目録 (3) 研究書

- ⑤語り口の分析、伝承者論
「昔話^①が実際に語られる際の、テンポ・間のとり方、抑揚、アクセントなど音声学上の特徴や用語法の分析をおこなうもの。さらに歌の挿入や身ぶり手ぶりを含めた表現方法(パフォーマンス)なども分析の対象となる。」
「昔話のすぐれた語り手(語り部)の成立条件や家庭環境、あるいは個人的な資質に関する研究。また特定の説話や唱導文芸を伝承してきた職能集団、芸能者・宗教者集団に関する研究も含む。」

(『日本昔話ハンドブック』p.47)
19

3. 日本昔話文献目録 (3) 研究書

- ⑥機能論(民俗社会における意味、子どもにとつての意味)
「昔話が語られる目的や、昔話の伝承が社会や個人(語り手・聞き手)に対して果たしている役割(機能)について考察するもの。またこうした目的や機能の歴史的な変化も主題となる。さらに、「現代民話」「都市伝説」などと呼ばれる今日の噂話の、現代社会や子どもとの関わりについての考察も含む。」

(『日本昔話ハンドブック』p.47)
20

3. 日本昔話文献目録 (3) 研究書

- ⑦再話・翻案・再創造に関する研究
「文字に書き記されて伝えられた国内・国外の説話を起源に持つ昔話に関して、その説話が昔話として定着するまでの経緯をたどろうとする研究。」
「小説・戯曲・唱歌・童話・絵本・テレビアニメなど、さまざまなジャンルにおいて見られる、昔話を再創造した作品の、原話(昔話)との比較考察。また、再創造を手掛けた作家・製作者やメディアに関する研究も含む。」

(『日本昔話ハンドブック』p.47)
21

3. 日本昔話文献目録 (3) 研究書

- ⑧今日的伝承に関する実践研究
「伝統的な昔話伝承が困難となった今日、昔話を別の手段や媒体によって伝達・伝承していこうというさまざまな実践が試みられている。これらの実践を分析し批評するとともに、より望ましい伝承の形の可能性を探ろうとする研究。」

(『日本昔話ハンドブック』p.47)
22

3. 日本昔話文献目録 (3) 研究書

- ⑨論文集
『昔話: 研究と資料』
● 雑誌記事索引採録対象ではありません。
● 出版社である三弥井書店のホームページに30号までの内容細目が掲載されています。
● <http://www.miyai-shoten.co.jp/>

23

3. (3) ⑨『昔話: 研究と資料』

- 7号 南島の昔話
- 8号 昔話と教育
- 9号 昔話の語り手
- 10号 昔話と家族
- 11号 昔話と動物
- 12号 昔話と妖怪
- 13号 昔話の地域性
- 14号 昔話と世間話
- 15号 昔話と伝説
- 16号 昔話の比較
- 17号 昔話と婚姻・産育
- 18号 昔話と時空
- 19号 視る昔話
- 20号 昔話と子ども
- 21号 日中昔話の比較
- 22号 昔話の再生
- 23号 昔話と年中行事
- 24号 現代伝説－昔話研究の可能性－
- 25号 昔話と呪物・呪宝
- 26号 昔話における時間
- 27号 現代語り手論
- 28号 昔話と俗信
- 29号 本格昔話と植物
- 30号 昔話と子育て

24

4. レファレンス

4.レファレンス

- レファレンス協同データベース
- http://crd.ndl.go.jp/GENERAL/servlet/common_Controller
- レファレンス協同データベース事業には、公共図書館、大学図書館、専門図書館等が参加しています。(平成20年10月16日現在、471館)
- 平成20年9月30日、レファレンス事例の一般公開件数が2万件を超えました。

26

4.レファレンス

- (1)レファレンス事例
全国の図書館で行われた質問回答サービスの記録を検索することができます。
- (2)調べ方マニュアル
特定のテーマやトピックに関する情報源の探索方法を説明した情報を調べることができます。
- (3)特別コレクション
個人文庫や貴重書など、参加館が所蔵する特殊なコレクションに関する情報を調べることができます。
- (4)参加館プロフィール
このデータベースにデータを提供している、全国の図書館のプロフィールを調べることができます。

27

4.レファレンス

- 「日本昔話」で検索
レファレンス事例 33件
調べ方マニュアル 1件
がヒット。

『日本昔話通観』『日本昔話集成』『日本昔話事典』などがレファレンスツールとして頻出。

28

おわりに

- 参考図書は生き物です。
顔、性格をよく見極めましょう。
- 参考図書は進化します。
改版、増補に注意しましょう。
- 参考図書は増殖します。
新しい資料を見つけたら、仲間に入れてあげましょう。

29

めでたし、めでたし。

参考図書紹介

—日本の昔話を知るための

ブックリスト—

石渡 裕子



これから、国際子ども図書館所蔵資料を中心とした「日本昔話の参考図書紹介」の講義を始めます。資料情報課の石渡裕子です。どうぞよろしくお願いたします。

1. 入門書
2. 日本昔話資料集
3. 日本昔話文献目録
 - (1) 辞書・事典類
 - (2) 書誌・図書目録
 - (3) 研究書
4. レファレンス

講義の流れとしてはご覧のように4部構成です。50分ほどの持ち時間ですから駆け足になってしまうかもしれませんがどうぞご了承ください。

1. 入門書

まずは、入門書のご紹介から。

No. 1 小澤俊夫『昔話入門』 1997

小澤俊夫先生編著の昔話の入門書です。「入門」という名のとおり、とても読みやすく、話しかけるような文体で書かれていますが、その「はじめに」では、「一風変わった、しかし、実際に役立つ入門書を」とその自負が記されています。

全6章から成り、目次はご覧のようになっています。

- 第1章 昔話とは何か（昔話の考え方、昔話の研究、現代における昔話の位置）
- 第2章 昔話のおもしろさの秘密（昔話のおもしろさの分析、昔話のおもしろさの特徴、普遍的知恵をもっている昔話）
- 第3章 グリム童話の成立と特徴（『グリム童話集』の成立、『グリム童話集』についての誤解と問題点、『グリム童話集』の文体、『グリム童話選集』）
- 第4章 子どもに昔話を！（ストーリーテリング、昔話絵本について）
- 第5章 昔話の類型（「昔話の類型」、「AT主要話型」）
- 第6章 日本昔話と関係の深い海外の昔話

この中で、第1章の1、「昔話の考え方」では、昔話、民話、伝説、口承文芸というくことばの整理から入ります。そして昔話とは、「語り方に一定の型があり、時代・場所・人物が特定されない、信じなくてよい話」であるとして伝説と対比しています。

第4章では、松本なお子さんと藤井いづみさんがストーリーテリングについて、お話の選び方、覚え方、語り方などを取り上げています。また、この児童文学連続講座の講師として度々お世話になった藤本朝巳先生が、昔話絵本について執筆しています。

第5章では、タイプ(Type)の訳語であるく話型>や、昔話の構成要素であるくモチーフ>の定義から始まり、なぜく話型>が問題なのかを明らかにしていきます。

「たくさんの類話のなかから共通要素を抽出して、平均的な「話型」を作業仮説として認定しておけば、次には各地の類話を比較するときに、いわば共通の物差しを持ったようなもので、比較が楽にできるようになります」(p.220)と述べています。

フィンランドの昔話研究者であるアンティ・アールネ (Antti Aarne 1867~1925) がフィンランドの昔話のカタログ(「昔話の型のカタログ」*Verzeichnis der Märchentypen*)を1910年に試作します。これに他の国々の資料を加えて増補したのが、アメリカのステイス・トムスン (Stith Thompson 1886~1976) が1927年に出版した『昔話の型』(邦訳なし)であり、1961年に出した増補版 (Antti Aarne, Stith Thompson, *The Types of the Folktale*)こそが世界の昔話研究者の共通カタログとされているため、アールネ=トムソンの『昔話の型』番号をATという略語で示していることを説明した後、AT主要話型を挙げ、日本の類話があればその題名を記します。

第6章は、日本の昔話と関係の深い海外の昔話について、その特徴や異同を解説しています。

初めに申しましたように平易な語り口でありながら、学問としての昔話研究入門書として、読み進めることができます。日本の昔話に特化してはいませんが、日本の立ち位置を把握するためにも通読すべき資料です。

No. 2 稲田浩二、稲田和子『日本昔話ハンドブック』2001

稲田浩二 (1925~)、稲田和子 (1932~) 編による日本の昔話のハンドブックです。

本文は4部構成で、

- | | |
|-----|---|
| 第一部 | 日本昔話への招待(日本昔話とは何か、日本昔話の国際性、古典の中の昔話、昔話研究史、日本昔話の分布地図) |
| 第二部 | 日本昔話二百選—あらすじと解説 |
| 第三部 | 日本昔話の継承と普及(日本昔話の継承、ストーリーテリング、昔話(民話)をテーマにした施設と活動) |
| 第四部 | 資料編(昔話の用語、日本昔話資料集目録、日本昔話文献目録) |

となっています。

以下、この『日本昔話ハンドブック』の第四部資料編の日本昔話資料集目録、文献目録の記載に基づいて資料を紹介してまいります。以後『ハンドブック』とのみお伝えした場合は、この資料を指すことといたします。

では、本日の配布資料の「参考図書紹介—日本の昔話を知るためのブックリスト—」をお手元に出していただけますでしょうか。

このリストは、本日の講義の章立てに沿って参考文献をリスト化したものです。表の左端が通しナンバーです。今後、「ナンバー8」などと申し上げた場合は、この通し番号のことです。その次の欄に「No. 2 掲載」とありますのは、米印が付してある資料は『ハンドブック』の資料編に取り上げられていることを示します。以下、書名などの書誌事項を記し、「件名」の欄は国立国会図書館が付与した件名標目です。右端が国立国会図書館の請求記号で上段が東京本館所蔵の請求記号、下段が国際子ども図書館での請求記号となります。ただし、OPACでの検索は上段の請求記号となり、下段は検索・表示ができませんのでご注意ください。

各章立ての中の資料は、『ハンドブック』に取り上げられた資料に続き、私が付け加えた資料を原則として刊行年順に排列しています。続巻や増補、改訂版がある場合はこの限りではありません。

では、リストのNo. 1と2がただ今ご紹介した資料です。『ハンドブック』の文献目録(3)研究書の①<入門編・総説>には、小澤俊夫『昔話入門』以外に3件を挙げています。

これがNo. 3~5にあたります。

No. 3 日本口承文芸協会『昔話研究入門』1976

『ハンドブック』では、刊行年が「1981年」となっていますが、それは第2版です。初版は1976年です。リストにはこちらを記載しました。

<はじめに>には、「昔話はわからないことだらけ、と言うこともできます。昔話はなぜ、きまったことば「むかしむかし」で始まるのか、なぜ蛇と人とが結婚するのか、昔話の娘はなぜ三人なの

か、(中略) ヨーロッパやアフリカの昔話がなぜわが国の昔話とぴたりと一致するものがあるのか。一となると、だれでも簡単には答えられません。この本は、そのような昔話のなぜ話を考えて解いていきたいという方々のための、いわば昔話研究入門としてまとめてみました」とあります。入門書としてなかなか興味をそそる書きぶりです。

No. 4 福田晃『民間説話：日本の伝承世界』 1989

こちらの〈あとがき〉には、「幸い伝承資料の収集も大いに進展し、わたくしどもは相当膨大な伝承遺産を手にすることができるに至った。(中略) ようやくわたくしどもは、採集調査や資料整理に費すエネルギーを本格的な研究に傾注する時期に遭遇したと言えよう。(中略) 本書は、ささやかながら、民間説話の本格的な研究を志し、それぞれの方向のなかで展開された試論を提示するものであり、その研究の大系を期待して編集するものである」と述べられています。刊行年は1989年。このころには昔話の収集、整理が一段落したことを端的に示している文章だと思います。

No. 5 福田晃ほか『日本の民話を学ぶ人のために』 2000

〈総説〉冒頭の「民話とは何か」において、「民間に口頭で伝承されてきた説話、つまり民間説話の略称である」とし、神話・伝説・昔話・世間話の四つのジャンルに分類しています。続いて〈民話と古典〉〈民話の地域性〉〈民話と現代〉〈民話の再創造〉〈語り手と現代〉というくくりのもとで分担執筆し、章末に「参考文献一覧」を付しています。

以上のほかに昔話入門としてはNo. 6～8があります。

No. 6 武田正『昔話の発見：日本昔話入門』 1995

付一として文献案内が収録され、「昔話資料」で8件、「研究書」で11件の文献につき解説を加えています。

8年後には続編であるNo. 7が出版されました。

No. 8 小澤俊夫『働くお父さんの昔話入門：生きることの真実を語る』 2002

「あとがき」に「昔話という大事な伝承文化をお父さんに知ってもらいたいし、お父さんの声で子供の耳にとどけてもらいたくて、この本を書きました」とあります。内容は日本の昔話だけではありませんが、昔話入門として利用者にお勧めするには絶好の資料です。

2. 日本昔話資料集

次は、日本の昔話そのものが収録されている資料集についてお話しします。

本日は、範囲が「全国にわたる」資料集についてご紹介します。各県や地方別の資料については、これからお話しする資料集の資料目録などをご参照ください。

No. 9 日本放送協会『日本昔話名彙』 1948

柳田国男(1875～1962)、皆さんの中では常識でしょうが、「やなぎた」です。「やなぎだくにお」ですとノンフィクション作家、最近は絵本についても著作を出されていますが「くに」の字が違う柳田邦男(1936～)になってしまいますからご注意ください。No. 9は柳田国男が、昭和15(1940)年に日本放送協会から委嘱されて、日本の昔話を分類したもの。全1巻。昭和23(1948)年3月に第1版、昭和46(1971)年12月に改版(No.11)刊行。

冒頭の「昔話のこと」と題する柳田の文章には、「日本の昔話採集はまだ三十餘年の歴史しか持つて居りません」という一文があります。末尾に「昭和二十二年十月」とありますから、1910年代、大正から昭和初期にかけて日本の昔話の採集が行われ、記録に留められるようになったということになります。

「完形昔話」「派生昔話」に大きく二分し、それぞれを10分類183話型、5分類158話型に分けています。あわせて341の話型のうち、102を主な型として示し、他は派生したものとしています。

聴き手による変容はありながらも形の似た昔話が各地で語り継がれていることに着目し、柳田は先の「昔話のこと」で、次のように述べています。

今日私共の立場としては、せめて何年何月頃に、何處の地方で、幾歳位の人に依つて斯く語られて居たといふことだけは、正確に傳へる様になりたいと思ひます。

巻末には、「資料の解説」として、昔話の出典の書誌事項であるタイトル、著者、出版年、出版者を記すほか、昔話の題名の索引を付しています。

次は、No.12～17 『日本昔話集成』 全6巻 1950～1958

著者の関敬吾（1899～1990）は、本書の自序に「偶々柳田国男先生の「桃太郎の誕生」が契機となって、従來の研究を放擲せしめ、これが私の生涯の研究に決定的な轉向を齎らした」と記しているように、柳田国男の弟子にあたります。

自身の「日本昔話研究」の一部を成すものとして、642の話型に分類した昔話を「動物物語」「本格昔話」「笑話」の三部に分けた全6巻を、昭和25年から33年にかけて刊行しました。

第1巻「凡例」には、「本書に利用された資料は明治末年よりこの大戦の直前までに、口頭から直接採集されたものである」とあり、「資料は比較的まとまつた昔話を、出来るだけ採集されたまゝを首位に掲げ」、「文献資料の類話は出来るだけそれぞれの末尾に附記しておいた」、「類話は要約して、東北地方より行政地理的に配列した」ほか、「近隣諸民族の類話は、出来るだけその内容を簡単に挙げ」て、日本だけでなく他国の類話を紹介することで国際的な比較研究の道を開きました。

本文は通し番号に続き、昔話の題名、内容、地域名を掲げます。次いで「分布」という見出しのもと、地域名、内容の異動、出典というセットが繰り返され、『日本昔話名彙』収載の番号が付されています。

この『日本昔話集成』の増補改訂版が、No.18

～29 『日本昔話大成』 全12巻 1978～1980です。

「凡例」には、「本書に用いた資料は明治末年から昭和五十一年末までに直接昔話の語り手から採集されたものである」と記されています。「日本昔話集成」が大戦直前までが範囲でしたから、戦後30年ほどまで採集の時期が延びたことになりません。

11巻末に「『集成』から『大成』へ一跋文にかえて」という文章が掲載されています。そこには「最初、『集成』の分類に利用した話数は約八千七百であった。これから抽出したタイプはおよそ六五〇であった。今回の『大成』に用いた話数は正確に計算していないが、およそ三万四、五千ぐらいではなかったろうか。それにもかかわらず、新話型として追加しえたものは九〇ぐらいである」と記しています。つまり昔話の数は4倍近くに増えたけれども、話型は14%程度しか増えなかったことになります。

そして編纂された最も大部な日本昔話資料集が、No.30～58及びNo.240、261の『日本昔話通観』です。

稲田浩二（1925～）、小澤俊夫（1930～）の責任編集により、1977年10月～1990年7月にかけて全都道府県を網羅した資料篇26巻に補遺、昔話タイプ・インデックス、総合索引の3巻を加え29巻を刊行。研究篇を1993年と1998年に出版しています。

「編集方針」では、「口承資料にもとづいてはいても、その成立事情において文学的意図をもって書きおろされたと認められるもの、すなわちいわゆる再話作品は除く」と明記し、直接調査した昔話と再話民話集とを分けるという資料検討を行い6万余りの昔話を選定しました。

また、従来日本昔話として取り上げられることのなかったアイヌ民族のユーカラ、ツイタックなどを第1巻に加え593のタイプを認定しました。

No.56 27巻の補遺の「あとがき」で稲田浩二は、次のように述べています。少し長いですが読み上げます。

本巻は、ともかく資料篇完結のためには欠かせないと考えました。多少きめは粗くとも目にふれた既刊の資料は読者に周知しなくては、という思いです。昔話の資料集は必ずしも陽の当たる大出版社の刊行物とはならない。むしろ大多数は研究室・有志の研究会・地方自治体・地方教育委員会・老人クラブなどの自刊本であり、書店の書棚に並べられません。なかには数十部の私家版や謄写刷りが親類縁者や研究者仲間に配布されて、国会図書館はおろか地元図書館にも入っていないものも少なくありません。若い研究者は、その資料を見ることでおそらく数年もかかってしまいます。これでは困る。

と書いています。日本昔話研究の基礎資料たらんとして『日本昔話通観』に込めた熱い思いを語っていると同時に、私たち図書館員の、資料を収集し提供するという使命を今一度確認させる一文だと思います。

日本民族についてはNo.57 28巻の昔話タイプ・インデックスにおいて、「むかし語り」441タイプ、「動物昔話」156タイプ、「笑い話」583タイプ、「形式話」31タイプの計1,211タイプを認定するとともに、ATとの対応関係を記載し比較研究に資することを意図しています。

特にNo.58 『日本昔話通観』第29巻の総合索引は使える資料です。野菜の「ねぎ」が出てくる昔話を教えてほしい、というレファレンスならたちどころに分かります。注意が必要なのは2巻から26巻までの総合索引であって、1巻と27巻についてはそれぞれの索引を参照する必要がある、ということです。

リストの「出版事項/形態/注記」には、各巻ごとに資料目録の収載ページ、昔話収集年代の範囲を記載してあります。

以上が『ハンドブック』に「全国にわたるもの」として紹介された資料集です。「叢書」として記載された中から5件を紹介します。

No.59～71 『全国昔話記録』三省堂 全13巻 1942～1944

リストの東京本館所蔵としてマイクロフィッ

シュの請求記号を記しました。閲覧であれば冊子（例えば請求記号は388.181-Ta461aなど）の利用が可能です。ただし、図書館間貸出ができるのはマイクロフィッシュの方です。なお、リストの「件名」は、OPACではマイクロフィッシュには記載がありませんので、冊子の書誌データから転載しています。

No.72～84 『日本昔話記録』と改題して、1973～1974に復刊されます。

No.85 タイトルは『日本昔話記録』のまま、版型を大きくして2006年10月に刊行した復刻版全13巻です。

No.85の請求記号の欄をご覧くださいと、×が三つ並んでいます。NDL-OPACの利用の手引きには「請求記号が「xxx」のものは、作成中の仮データです。完全なデータになるまでしばらくお待ちください」という記載がありますけれども、これは関西館に納本資料より先に資料が入った場合の措置です。利用は可能ですが、書誌データ的には仮のものなので「件名」欄は空欄となっています。

続いてNo.86～109 『昔話研究資料叢書』（ソノシート付の巻あり）三弥井書店 全18巻 別巻6巻 1968～1992です。

2001年刊の『ハンドブック』には全30巻、別巻3巻とあり、No.6 『昔話の発見—日本昔話入門—』1995年刊でも「第一期第二期三十巻、別巻三巻」という記載がありますが、三弥井書店ホームページでは18巻 別巻6巻が掲載されています。

巻末に「昔話研究資料叢書の刊行に際して」という短文が付され、「貴重な昔話の伝承は、ほとんどいまの語り手をもって絶えようとしている。この叢書の課題は、かかる事態を迎えた日本の昔話を、確実な学術資料としてとらえ、あわせてその研究の現段階を示すことにある」と記されています。さらに「(昔話)研究は、語り手との対面にはじまり、終始語りによって進められなければならない」とし、「語りに即した翻字」を行い、「伝承世界の全貌を把握するために、特定の生活圏を限って調査の精密を期そうと思う」と述べていま

す。

なお、No.110は叢書1巻ごとに付された通信を合冊したものです。

全集などに数ページの付録、月報を付して刊行するのは、日本独特だそうです。これら付録類を別に取りまとめておき全集ごとに製本して図書館資料とし、目録も『国立国会図書館所蔵全集月報・付録類目録』として1996年に刊行しています。ただし現在、これらの付録は付属資料として個々の全集本体に添えて提供しています。付属資料の有無は書誌データでも確認できますので今度NDL-OPACを検索した際に気を付けて見てください。

No.111～140 『日本の昔話』 日本放送出版協会 全30巻 1972～1980

No.111 巻1巻頭の「次代のために後世のために」という稲田浩二の文によれば「この叢書の一字一語にいたるまで、みずから歩き、みずから聞いた、同郷人の調査にもとづくものです」と記されています。

No.141～180 『全国昔話資料集成』 岩崎美術社 全40巻 1974～1984

No.141 1巻は、『^{うぜんものがみおくにごう}羽前最上小国郷のトント昔コ』(昭和41年刊 限定200部 国会図書館請求記号388.125-Sa929o2)の増補改訂版です。

No.181 『日本の民話』 ぎょうせい 全12巻 1979～1986

No.182～193 『日本の民話』 新装版 1～12 1995年

No.1 『昔話入門』 「はじめに」で「日本全国の昔話を、それぞれの土地ことばのまま取めたもの」(p.4)と紹介している資料集です。

当叢書の巻頭「話のかけ橋に」にも「どの話も、話し手の村里に編者が出むいて、話されたまを文字にうつしたものです」と記されています。

3. 日本昔話文献目録

引き続きまして、文献目録を三つに分けてご紹介

介します。

(1) 辞書・事典類

まず参考図書といえばということで、辞書、事典類をいくつかご紹介します。初めの5件は『ハンドブック』文献目録(1)〈辞典・事典類〉に記載されているものです。

No.194 民俗学研究所『民俗学辞典』 1951

『ハンドブック』では1952年刊と記されていますが初版は1951年です。

No.195 大塚民俗学会『日本民俗事典』 1972

〈言語伝承〉というくくりの中に昔話、伝説、語り物があります。

No.196 縮刷版が1994年に出版されています。

No.197 稲田浩二ほか『日本昔話事典』 1977

全項目を15分野に分類した項目分類目次を付しています。15分野とは、総論、伝承・伝播、話型、昔話の形式など、モチーフ、要素(人倫・動物・植物・食物・家屋・道具・その他)、世間話、伝説、神話、語り物、民謡、ことわざ、文献記録、地方別研究、外国の昔話、となっています。

No.198 縮刷版が1994年に出版されています。

No.199 野村純一ほか『昔話・伝説小事典』 1987

No.200～201 福田アジオほか『日本民俗大辞典』 1999～2000

以上のほかに付け加えたのが、

No.202 日本放送協会『日本伝説名彙』 改版 1971

初版は1950年。

No.203 朝倉治彦等『神話伝説辞典』 1963

見出し語を50音順に排列。総論、神話、伝説、昔話、説話、歌謡、信仰の7分類に分けた項目表を巻頭に付しています。

ここで件名をご覧ください。「伝説—日本—辞書」とあります。日本の伝説の辞書だということ

がこれで分かるのですが、例えばNo.197の件名は「昔話—辞書」なので、件名だけでは日本の昔話の辞書かどうか分かりません。これは平成15年度まで使用していた『国立国会図書館件名標目表第5版』では、日本で地理区分を行う件名標目を40ほどに制限していたからで、「伝説」「神話」「民話」は日本で地理区分ができるのですが、「昔話」はできなかつたのです。平成16年度以降はこの制限を撤廃したので、「昔話—日本」という件名が今は存在します。リストの最後のNo.317がその例です。件名で資料を検索される際にはちょっと心に留めておいてください。

- No.204 平林治徳ほか『日本説話文学索引』1974
No.205 小林保治ほか『日本短篇物語集事典』1984
No.206 乾克己ほか『日本伝奇伝説大事典』1986
No.207 教育社歴史言語研究室『架空人名辞典日本編』1989
No.208 志村有弘ほか『日本奇談逸話伝説大事典』1994
No.209 志村有弘ほか『日本説話伝説大事典』2000
No.210 大隈和雄ほか『日本架空伝承人名事典』増補 2000
初版は1986年。

- No.211 野村純一ほか『日本説話小事典』2002
No.212 DBジャパン『日本の児童文学登場人物索引 民話・昔話集篇』2006

1976（昭和51）年～2005（平成17）年の30年間に出版された児童文学の民話・昔話集224冊に収録された作品6,063点に登場する人物延べ8,681人を採録しています。

(2) 書誌・図書目録

昔話に関する図書や論文をNDL-OPACの雑誌記事索引で検索する以外に、次のような書誌が出版されています。

- No.213 遠野市立図書館『全国昔話伝説関係資料蔵書目録：1986』1987

昭和61（1986）年4月から遠野市立図書館が全国3,200か所余りの市町村教育委員会に対して、昔話や伝説に関する図書（資料）の恵贈依頼の協力を要請し収集した1,000点と、全国の出版社や地方書店から購入した図書約400点の目録。都道府県別に排列。附録として、「岩手県昔話伝説関係目次一覧」を付しています。

これは、各地の図書館にとって参考になる事例ではないでしょうか。地域の昔話・伝説を収めた資料を収集し、その書誌事項ならびに内容一覧を記し、索引等で検索も可能とする資料を作成し、地域の方々の郷土研究や子どもの調べ学習に対応する、というものです。

既にこのような地域の昔話についての資料を刊行している、という図書館はございますか。いらしたら手を挙げてください。

1980年代までは『日本昔話通観』で都道府県ごとにまとまっていたのですが、その収集範囲以降刊行の資料など、地域の昔話が掲載されている資料を探す際、皆様は「件名」を使われることと思います。資料を件名で検索される、という方は手を挙げていただけますか。あまり多くないようですが、今後どうぞ検索してみてください。

例えばNo.38『日本昔話通観』第9巻は、「昔話—関東地方」です。「昔話—東京都」「昔話—千葉県」だけの検索では漏れてしまうことにご留意ください。他に、No.114は「昔話」ではなく「伝説—山形県」だったりするので注意が必要です。また、国立国会図書館の名誉のためにもごくまれにしかないと申し上げておきますが、「昔話—新潟県」とすべきところを、「昔話—福島県」としている書誌データがありました。訂正依頼を出しましたので早晩修正されることと思います。ほかに絞り込みの要件としてはNDCがあります。既にお気づきでしょうが、国際子ども図書館の請求記号YZの次はNDCです。

- No.214～219は『日本文学研究文献要覧』です。No.219の2000～2004年を対象とする巻では、「伝承文学・口承文芸」p.42～59、のうち「民話・昔

話」をp.52～59に収載しています。

No.220～222は『民話・昔話全情報』、No.223～224は民話・昔話集の『内容総覧』、『作品名総覧』です。

(3) 研究書

文献目録の最後が「研究書」です。

昔話研究は、各地へフィールドワークに出掛け、古老に会って口承資料を採集し、文献に残された書承資料を探索する、という方法がこれまで採られてきましたが、新たな昔話の採集が困難となった現在では、自然科学系の分野までを含む学際的な研究となってきています。

『日本昔話ハンドブック』p.46～48では「今日の昔話研究は、さまざまなアプローチによっておこなわれている」、と述べており、巻末には文献が列記されていますので、国立国会図書館所蔵資料から関連資料を追加しつつ、八つの昔話研究についてご紹介いたします。

八つの昔話研究とはご覧のとおりです。

- (1) 国際比較論、起源・変遷・伝播論
- (2) 古典文学との比較研究
- (3) 意味論
- (4) 構造論
- (5) 語り口の分析、伝承者論
- (6) 機能論
- (7) 再話・翻案・再創造に関する研究
- (8) 今日の伝承に関する実践研究

最後に、(9)として論文集を幾つかご紹介いたします。

なお(9)に入れたものに限らず、研究書は論文を集めた資料が多いので複数の研究項目にまたがる場合がありますが、主であると判断した項目に追加いたしました。是非実際にお手に取って内容をご確認いただきたいと思います。

(1) 国際比較論、起源・変遷・伝播論
 「昔話が、どのような歴史的・文化的な背景の下に成立し、時代の推移や異文化交流の中でどのように変容していったのかを考証しようとするもの。国内・国外の類話の比較研究はもとより、人類学・考古学・生物学・言語学など、さまざまな領域の知見を取り入れながら研究が進められている」（『日本昔話ハンドブック』p.46）

と述べられ、「日本昔話文献目録」では、初版年順に以下の10件を記載しています。

No.225～226 南方熊楠『南方随筆』『南方随筆、続』1926

平凡社の全集では、No.227 1971年刊の『南方熊楠全集』2巻には共に収められていますが、No.228～229 1984年の選集では、第3巻と第4巻に分かれて収載されています。

また、リストには挙げていませんがNo.225の複製が1992年に沖積舎から刊行されています。

No.230 柳田国男『桃太郎の誕生』1933

明日講義される武田正先生のお言葉を借りれば、「日本口承文芸研究の端緒となった記念碑的作品」であり、「本書によって昔話を学問領域にまで高めた」とされています。(No.6『昔話の発見—日本昔話入門—』p.253)

筑摩書房の柳田国男全集は複数出版されていますが、新しいのは1998年刊です。これをNo.231に記載しました。

そのほか、角川文庫やちくま文庫でも読むことができます。

No.232 石田英一郎『河童駒引考：比較民族学的研究』1948

No.233 全集には、第5巻に「新版 河童駒引考」が収載されています。

No.234 文庫版として新版が岩波文庫から出されています。

No.235 関敬吾『昔話の歴史』 1966

ヨーロッパの研究法を日本の昔話研究に導入したもの、という評価があります。

No.236 著作集では第2巻に収められています。

No.237 山室静『世界のシンデレラ物語』 1979

No.238 稲田浩二『昔話の時代』 1985

No.239 吉田敦彦『昔話の考古学：山姥と縄文の女神』 1992

No.240 稲田浩二『日本昔話通観』 研究篇1

日本昔話とモンゴロイド：昔話の比較記述 1993

No.241 稲田浩二『昔話の源流』 1997

「あとがき」に、1986年3月から1996年7月にいたる論文の中から「日本昔話と物語との起源・源流をたずねた十二篇を自選したもの」とあります。また、「昔話に関心をもった最初のころ、もう四十年も前のことですが、たまたま読んで『桃太郎の誕生』（柳田国男）ほど鮮烈な感動をうけた論文は、それ以前にも以後にも出会わないことです」という記述があり、『桃太郎の誕生』の影響力の大きさを改めて感じます。

No.242 大林太良『銀河の道虹の架け橋』 1999

以上にNo.243～252までの10件の資料を加えたいと思います。

No.243 福田晃『昔話の伝播』 1976

No.244 関敬吾『日本の昔話：比較研究序説』 1977

日本の昔話と東南アジアの昔話との関係から比較民話学を切り開いた研究、と言えます。

No.245 伊藤清司『花咲翁の源流』 1978

No.246 福田晃『日本昔話研究集成2：昔話の発生と伝播』 1984

大島建彦「咄の者の系譜」、君島久子「中国の羽衣伝説—その分布と系統—」など、明日お話を伺える先生の論文が掲載されています。

No.247 服部邦夫『昔話の変容：異形異類話の生成と伝播』 1989

No.248 君島久子『日本民間伝承の源流：日本

基層文化の探求』 1989

「民間伝承」のテーマのもと、日本及び周辺諸民族に伝わる神話・昔話・伝説などの面から、その成立・伝播をめぐる諸問題を討議し、多角的な視野から日本文化の源流を探求しようと試みたシンポジウムの報告と討論の記録です。

No.249 野村純一、劉守華『日中昔話伝承の現在』 1996

No.250 武田正『昔話の伝承世界：その歴史的展開と伝播』 1996

No.251 福田晃『神語り・昔話の伝承世界』 1997

No.252 鳥居フミ子『金太郎の誕生』 2002

(2) 古典文学との比較研究

「書承の説話や歌謡、語り物など隣接する諸ジャンルの古典文学作品との関係性（影響関係や類似性など）について比較検討する研究」（『日本昔話ハンドブック』p.46）

No.253 柳田国男『昔話と文学』 1938

全集ではNo.254など、文庫としては、創元文庫、角川文庫、ちくま文庫に入っています。

No.255 三谷栄一『物語文学史論』 1952

「物語の発生」「物語の成長」「物語の崩壊」「物語と民間文芸」の4章で構成され、日本文学研究において昔話とのかかわりを探るものと言えます。

No.256 この新訂版が1965年に出版されています。

No.257 大島建彦『お伽草子と民間文芸』 1967

No.258 滑川道夫『桃太郎像の変容』 1981

No.259 美濃部重克『中世伝承文学の諸相』 1988

No.260 三浦佑之『浦島太郎の文学史：恋愛小説の発生』 1989

No.261 稲田浩二『日本昔話通観』 研究篇2

日本昔話と古典 1998

No.262 内ヶ崎有里子『江戸期昔話絵本の研究と資料』 1999

以上のほかに、3件付け加えました。

No.263 野村純一『日本昔話研究集成5：昔話と文学』 1984

No.264 岩瀬博『伝承文芸の研究：口語り語り物』 1990

No.265 林晃平『浦島伝説の研究』 2001

(3) 意味論（心理学的・社会的・思想的解釈）

「昔話の登場者やストーリー展開にどのような意味が内在しているのかを、深層心理学・社会学・歴史学などの立場から解釈していく研究」（『日本昔話ハンドブック』p.46）

No.266 佐竹昭広『下剋上の文学』 1967

〈あとがき〉には、「あるときは、説話や民話の歴史を往還しながら、作品の位置づけ、主人公の性格把握をこころみというふうに、自分なりに風通しのよい室町文学研究を模索してきた」とあります。1993年にはちくま学芸文庫としても刊行されました。

No.267 佐竹昭広『民話の思想』 1973

1990年には中公文庫になっています。

No.268 河合隼雄『昔話と日本人の心』 1982

著者の河合隼雄（1928～2007）は、著名な臨床心理学者で昨年お亡くなりになりました。昔話のモチーフが深層心理を映し出していることを追求した方です。『昔話の深層』（福音館書店 1977 KE178-17; YZ-388-カワ）という著作もあります。2002年に岩波現代文庫の1冊に加わりました。

ほかには

No.269 五来重『鬼むかし：昔話の世界』 1984

著者は山岳宗教研究家です。武田先生は「昔話

と仏教のかかわりを重視し、山姥・鬼など昔話の人気者がどのように造形され、昔話の中で活躍することになったかを、過去の庶民の生活、宗教の中で解明するという、民俗学的手法での昔話理解を示している」（『昔話の発見』p.256）と評しています。

No.270 角川選書の一冊としても1991年に出版されています。

(4) 構造論（昔話の形態や構造の分析）

「昔話の登場者やストーリー展開に一定の型（パターン）を発見し、その形態上・構造上の特質について分析するもの。言語学（記号論）や構造人類学の理論にもとづいている」（『日本昔話ハンドブック』p.46～47）

No.271 荒木正見『昔話と人格発達：コード分析試論』 1985

No.272 小松和彦『説話の宇宙』 1987

No.273 小澤俊夫『昔話のコスモロジー：ひとと動物との婚姻譚』 1994

講談社学術文庫として出版されました。「宇宙論」という壮大なタイトルですが、ヨーロッパ昔話研究の第一人者であるマックス・リュティの研究方法で日本の昔話を分析し、特に異類婚姻譚のヨーロッパやアジアなどの昔話と構造を比較することにより、新しい日本昔話研究に踏み出したものです。書き下ろしの「第三章 異類婚姻譚からみた日本昔話の特質」では、「昔話は現代の日本人にとっても、自らをよく知る鏡といえる」と述べ、今につながる昔話という切り口を提示しています。

以上のほかに

No.274 福田晃『日本昔話研究集成4：昔話の形態』 1984

No.275 小松和彦『日本昔話研究集成1：昔話研究の課題』 1985

V章に「昔話の構造」が掲載されています。

なお、この『日本昔話研究集成』は1984～1985

に全5巻刊行されています。現在までの日本昔話研究の成果がまとめられているほか、新しい研究の方向をも示しています。

以上に2点加えました。

No.276 川森博司『日本昔話の構造と語り手』
2000

No.277 荒木正見『人格発達と癒し：昔話解釈・夢解釈』 2002

(5) 語り口の分析、伝承者論

「昔話が実際に語られる際の、テンポ・間のとり方、抑揚、アクセントなど音声学上の特徴や用語法の分析をおこなうもの。さらに歌の挿入や身ぶり手ぶりを含めた表現方法（パフォーマンス）なども分析の対象となる」

「昔話のすぐれた語り手（語り部）の成立条件や家庭環境、あるいは個人的な資質に関する研究。

また特定の説話や唱導文芸を伝承してきた職能集団、芸能者・宗教者集団に関する研究も含む」（『日本昔話ハンドブック』p.47）

No.278 水沢謙一『昔話ノート：採集と研究』
1969

No.279 語り手たちの会「語りの世界」 1985～
これは逐次刊行物です。

国際子ども図書館では、3号（1986年）、4号、14号及び22号（1995年）以降を所蔵しています。

残念ながら雑誌記事索引の採録誌ではありません。

東京都立図書館の「児童・青少年雑誌記事索引」
<http://metro.tokyo.opac.jp/tml/tjid/itemfind.cgi>
では、8号（1988年11月）以降の記事索引の検索が可能です。

No.280 川島保徳『かたり手・きき手：現代かたりへのすすめ』 1987

この資料は国立国会図書館未所蔵です。総合目録ネットワークでは、

<http://unicanet.ndl.go.jp/psrch/redirect.jsp?type=>

psrch

青森県立、埼玉県立久喜、東京都立多摩、山口県立山口、大阪府立中央、横浜市中央、千葉市中央の各図書館で所蔵されているようです。本日の受講生が所属されている図書館もありますね。

以上のほかに

No.281 大島建彦『咄の伝承』 1970

大島先生は冒頭「咄の者の系譜」で、「語り」と咄との区別」と題し、「咄というのは、もっと自由なモノイイであった。咄の特色は、何よりもその場に応じて、自由にものを言うことにほかならない」と述べています。

武田先生も次のようにこの資料を評しています。「民間文芸の歴史の中で、咄の者を取上げ、語りによって伝承された昔話と語り手の問題、文芸とのかかわり、笑話と咄の者の関係を明らかにする。さらに従来昔話の枠組を守ってきた研究の閉鎖性を打破する意味でも、世間話研究の方向を開こうとした点でも、評価されるものであった。また、昔話の周辺にある、コトワザ、ウタ、ハナシの関係などの研究に目を向けるべく示唆している」（『昔話の発見』p.255）

No.282 武田正『昔話世界の成立：昔話研究序説』
1979

序に代えて関敬吾が「著者に期待するもの」を寄せています。そこでは「本篇における中心問題の一つは、「昔話の語り」である。この問題はわが国ではまだ研究が初まったばかりである。武田君はその研究の先駆的な一人だといえよう」と述べています（「初まった」は原文ママ）。

No.283 野村純一『昔話の語り手』 1983

No.284 野村純一『昔話伝承の研究』 1984

No.285 野村純一『日本昔話研究集成 3：昔話と民俗』 1984

No.286 武田正『日本昔話の伝承構造』 1992

これは明日の武田先生の講義の参考文献にも挙げられている資料です。先生によれば「語り」と聞き手のあいだを結ぶのは「語り」であり、その語りは語りの座と深いかかわりがある。語りの座

は聞き手の年齢や共同体の在り方やその他の条件によって設定され、語りの座が語りや昔話そのものをも制約することがある。この書は、その語りの座という視点から昔話伝承を見たものである」(『昔話の発見』 p.256) ということになります。

No.287 武田正『昔話の現象学：語り手と聞き手のつくる昔話世界』 1993

この資料について武田先生は「昔話は聞き手と語り手の緊張関係の中で伝承されるが、今まで、昔話研究の中に聞き手の視点がなかったことから、視点を聞き手に置いて見ようとした」(『昔話の発見』 p.256) と述べています。「聞き手」という側面からの研究です。

No.288 武田正『昔話の語りと変容』 2001

(6) 機能論 (民俗社会における意味、子どもにとっての意味)

「昔話が語られる目的や、昔話の伝承が社会や個人 (語り手・聞き手) に対して果たしている役割 (機能) について考察するもの。またこうした目的や機能の歴史的な変化も主題となる。さらに、「現代民話」「都市伝説」などと呼ばれる今日の噂話の、現代社会や子どもとの関わりについての考察も含む」(『日本昔話ハンドブック』 p.47)

No.289 大野智也、芝正夫『福子の伝承：民俗学と地域福祉の接点から』 1983

<はじめに>で、「この本は、心身障害者を「フクゴ」(福子)、「フクムシ」(福虫)、「タカラゴ」(宝子) などと呼び、かれらにある意味を与えていた“伝承”を主として扱っている。(中略) 民俗学と地域福祉の接点からみていくべく心がけた」とあります。

No.290 小松和彦『異人論：民俗社会の心性』 1985

「異人の民俗学」「異人の説話学」「異人の人類学」

「異人論の展望」の4部構成。

No.291 小澤俊夫『昔話が語る子どもの姿』 1998

現代民話論としては

No.292 松谷みよ子『現代民話考』 全12巻 1985～1996

No.293 ちくま文庫として2003年～2004年に刊行されています。国際子ども図書館請求記号は YZ-388.1-マツ。

No.294 常光徹『学校の怪談：口承文芸の展開と諸相』 1993

増訂として角川文庫から『学校の怪談』(2002年7月)、『伝説と俗信の世界』(2002年8月)が刊行されています。

No.295 野村純一『日本の世間話』 1995

No.296 近藤雅樹『靈感少女論』 1997

ほかに

No.297 小松和彦『神々の精神史』 1978

No.298 武田正『昔話漂泊：語りから見えるもの』 1994

(7) 再話・翻案・再創造に関する研究

「文字に書き記されて伝えられた国内・国外の説話を起源に持つ昔話に関して、その説話が昔話として定着するまでの経緯をたどろうとする研究」

「小説・戯曲・唱歌・童話・絵本・テレビアニメなど、さまざまなジャンルにおいて見られる、昔話を再創造した作品の、原話(昔話)との比較考察。また、再創造を手掛けた作家・製作者やメディアに関する研究も含む」(『日本昔話ハンドブック』 p.47)

No.299 内山憲尚『日本口演童話史』 1972

No.300 瀬田貞二『落穂ひろい：日本の子どもの文化をめぐる人びと』 1982 福音館書店(『日

本昔話ハンドブック』では『落穂拾い』1988
岩波書店との記載あり)

No.301 上地ちづ子『紙芝居の歴史』1997

No.302 櫻井美紀『昔話と語りの現在』1998

ほかに

No.303 上地ちづ子『紙芝居：選び方・生かし方』1999

さて、リストもあと1行で最後のページです。

(8) 今日の伝承に関する実践研究

「伝統的な昔話伝承が困難となった今日、昔話を別の手段や媒体によって伝達・伝承していくというさまざまな実践が試みられている。これらの実践を分析し批評するとともに、より望ましい伝承の形の可能性を探ろうとする研究」(『日本昔話ハンドブック』p.47)

No.304 親子読書・地域文庫全国連絡会「子どもと読書」1983～

これは逐次刊行物です。

国際子ども図書館は313号(1999.1・2)～所蔵。

雑誌記事索引の採録誌ですが、採録されているのは315号(1999年6月)以降です。

No.305 松岡享子『昔話絵本を考える』1985

この資料は『昔話入門』p.209で藤本先生が、昔話絵本を語る際に紹介したものです。

No.306 新装版が2002年に出版されています。

No.307 櫻井美紀『子どもに語りを』1986

<はじめに>で、「子どもに語る現場を通して、いわばわたしなりの語りについての考えをまとめることにいたしました」とあり、<あとがき>に、「社会で、家庭で、子どもを育てることにかかわりを持つ方々、とりわけ今、子育て中の若い方々が、この本を手にとってくださるならうれしいと思います」と記しています。

これら以外には

No.308 片岡輝、櫻井美紀『語り：豊饒の世界へ(語りの入門講座：理論篇)』1998

No.309 藤本朝巳『昔話と昔話絵本の世界』2000

No.310 新装版が2005年に出版されています。

No.311 世田谷文学館『昔話と昔話絵本の世界展』2002

2002年7月6日～9月8日の会期で世田谷文学館では展示会が開かれています。

(9) 論文集

研究書の最後は、特定の項目に振り分けることが難しかった論文集です。

No.312 日本昔話学会「昔話：研究と資料」1972～

逐次刊行物扱いの資料です。

国際子ども図書館では2号から30号を所蔵。欠号は1号、6号、8号、12号、16号。

雑誌記事索引採録対象ではありません。

出版社である三弥井書店のホームページに30号までの内容細目が掲載されています。

<http://www.miyaihoten.co.jp/>

6号までは表記がありませんが、7号以降、背にタイトルが入ります。

例えば9号には「昔話の語り手」、27号「現代語り手論」であり、該当する研究の項に入れ込むことも可能です。

7号 南島の昔話、8号 昔話と教育、9号 昔話の語り手、10号 昔話と家族、11号 昔話と動物、12号 昔話と妖怪、13号 昔話の地域性、14号 昔話と世間話、15号 昔話と伝説、16号 昔話の比較、17号 昔話と婚姻・産育、18号 昔話と時空、19号 視る昔話、20号 昔話と子ども、21号 日中昔話の比較、22号 昔話の再生、23号 昔話と年中行事、24号 現代伝説—昔話研究の可能性—、25号 昔話と呪物・呪宝、26号 昔話における時間、27号 現代語り手論、28号 昔話と俗信、29号 本格昔話と植物、30号 昔話と子育て

ほかに5件掲げました。

No.313 大林太良ほか『民間説話の研究：日本と世界 関敬吾博士米寿記念論文集』1987

No.314～316 『日本昔話のイメージ1』、『昔話のイメージ2、3』1998～2000

No.317 『昔話研究の諸相：小澤俊夫教授喜寿記念論文集』2007

4. レファレンス

以上の参考文献を生かすのがレファレンスです。

さて、皆さんは「レファレンス協同データベース」をご存じでしょうか。ご存じの方、手を挙げていただけますか。

レファレンス協同データベース

<http://crd.ndl.go.jp/GENERAL/servlet/common.Controler>

は、今年10月現在で471館が参加し、レファレンス事例の一般公開件数2万件以上のデータベースです。

国立国会図書館のホームページトップ画面から「調べ方案内」をクリックしてください。

レファレンス協同データベースにはご覧の4種類のデータが入っています。

(1) レファレンス事例

全国の図書館で行われた質問回答サービスの記録を検索することができます。

(2) 調べ方マニュアル

特定のテーマやトピックに関する情報源の探索方法を説明した情報を調べることができます。

(3) 特別コレクション

個人文庫や貴重書など、参加館が所蔵する特殊なコレクションに関する情報を調べることができます。

(4) 参加館プロフィール

このデータベースにデータを提供している、全国の図書館のプロフィールを調べることができます。

例えば、検索窓に「日本昔話」と入力するとレファレンス事例33件、調べ方マニュアルが1件ヒットします。それらの回答事例では、これまでお話ししてきた『日本昔話通観』、『日本昔話集成』、『日本昔話事典』などがレファレンスツールとしてよく出てきます。

既に参加館である館の方は事例登録を、未加入である館は参加の検討をよろしく願いいたします。

さて、最後となりましたが、終わりに当たって、「参考図書は生き物です」

よく付き合って外見、内容を把握しましょう。

「参考図書は進化します」

改訂、増補などに注意しましょう。

「参考図書は増殖します」

常に新刊情報に気を配りましょう。

では、お疲れ様でした。ご質問がございましたらお手をお挙げください。

駆け足でしたが以上で「参考図書紹介」の講義を終わります。

めでたし・めでたし

(いしわたり ひろこ 国際子ども図書館資料情報課長)

「参考図書紹介－日本の昔話を知るためのブックリスト」 紹介資料リスト

*上段：国立国会図書館東京本館所蔵

下段：国際子ども図書館所蔵

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
1. 入門書					
1	※	昔話入門 小澤俊夫編著	ぎょうせい 1997.10 321p；19cm	昔話	KE178-G17 YZ-388-オザ
2		日本昔話ハンドブック 稲田浩二、稲田和子編	三省堂 2001.7 271p；21cm	昔話	KG2-G50 YZ-388.1-イナ
3	※	昔話研究入門 日本口承文芸協会編	三弥井書店 1976 239p；19cm	昔話	KE178-13 (なし)
4	※	民間説話：日本の伝承世界 福田晃編	世界思想社 1989.3 274p；19cm	説話	KG745-E15 (なし)
5	※	日本の民話を学ぶ人のために 福田晃、常光徹、斎藤寿始子編	世界思想社 2000.10 348p；19cm	昔話	KG745-G91 YZ-388.1-フク
6		昔話の発見：日本昔話入門 武田正著	岩田書院 1995.9 264p；19cm	昔話	KG745-G6 YZ-388.1-タケ
7		昔話の発見 続 武田正著	岩田書院 2003.12 232p；19cm	昔話－日本	KG745-H33 YZ-388.1-タケ
8		働くお父さんの昔話入門：生きるこ との真実を語る 小澤俊夫著	日本経済新聞社 2002.10 292p；20cm	昔話	KE178-G51 YZ-388-オザ
2. 日本昔話資料集					
9	※	日本昔話名彙 日本放送協会編	日本放送出版協会 1948 339p；22cm		YD5-H-388.1-Y53 ウ（マイクロ フィッシュ） (なし)
10		日本昔話名彙 日本放送協会編 2版	日本放送出版協会 1954 323p；22cm	昔話	388.1-N6842n2 (なし)
11		日本昔話名彙 日本放送協会編 改版	日本放送出版協会 1971 358p；22cm	昔話	KG745-20 YZ-388.1-ヤナ
12	※	日本昔話集成 第1部 動物昔話 関敬吾著	角川書店 1950 355p；22cm	昔話	388.1-Se126n YZ-388.1-セキ
13		日本昔話集成 第2部 第1本格昔話 関敬吾著	角川書店 1953 483p；22cm	昔話	388.1-Se126n YZ-388.1-セキ
14		日本昔話集成 第2部 第2本格昔話 関敬吾著	角川書店 1953 548p；22cm	昔話	388.1-Se126n YZ-388.1-セキ
15		日本昔話集成 第2部 第3本格昔話 関敬吾著	角川書店 1955 348、56p；22cm	昔話	388.1-Se126n YZ-388.1-セキ

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
16	※	日本昔話集成 第3部 第1笑話 関敬吾著	角川書店 1957 406p ; 22cm	昔話	388.1-Se126n YZ-388.1-セキ
17		日本昔話集成 第3部 第2笑話 関敬吾著	角川書店 1958 920、12p ; 22cm	昔話	(なし) YZ-388.1-セキ
18	※	日本昔話大成 第1巻 動物昔話 関敬吾著	角川書店 1979.5 423p ; 22cm	昔話	KG745-97 YZ-388.1-セキ
19		日本昔話大成 第2巻 本格昔話1 関敬吾著	角川書店 1978.2 372p ; 22cm	昔話	KG745-97 YZ-388.1-セキ
20		日本昔話大成 第3巻 本格昔話2 関敬吾著	角川書店 1978.5 362p ; 22cm	昔話	KG745-97 YZ-388.1-セキ
21		日本昔話大成 第4巻 本格昔話3 関敬吾著	角川書店 1978.7 315p ; 22cm	昔話	KG745-97 YZ-388.1-セキ
22		日本昔話大成 第5巻 本格昔話4 関敬吾著	角川書店 1978.9 312p ; 22cm	昔話	KG745-97 YZ-388.1-セキ
23		日本昔話大成 第6巻 本格昔話5 関敬吾著	角川書店 1978.11 310p ; 22cm	昔話	KG745-97 YZ-388.1-セキ
24		日本昔話大成 第7巻 本格昔話6 関敬吾著	角川書店 1979.2 387p ; 22cm	昔話	KG745-97 YZ-388.1-セキ
25		日本昔話大成 第8巻 笑話1 関敬吾著	角川書店 1979.8 431p ; 22cm	昔話 笑話	KG745-97 YZ-388.1-セキ
26		日本昔話大成 第9巻 笑話2 関敬吾著	角川書店 1979.10 365p ; 22cm	昔話 笑話	KG745-97 YZ-388.1-セキ
27		日本昔話大成 第10巻 笑話3 関敬吾著	角川書店 1980.3 353p ; 22cm	昔話	KG745-97 YZ-388.1-セキ
28		日本昔話大成 第11巻 資料篇 関敬吾 (ほか) 編	角川書店 1980.9 393p ; 22cm	昔話	KG745-97 YZ-388.1-セキ
29	日本昔話大成 第12巻 研究篇 関敬吾 (ほか) 編	角川書店 1979.12 306p ; 22cm	昔話	KG745-97 YZ-388.1-セキ	
30	※	日本昔話通観 第1巻 北海道 (アイヌ民族) 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1989.12 1230p ; 23cm 資料目録 p.1153-1158 収集範囲 : 1914 (大正3年)-1986 (昭和61年)	昔話－北海道 アイヌ	KH22-341 YZ-388.11-イナ

参考図書紹介－日本の昔話を知るためのブックリスト－

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
31		日本昔話通観 第2巻 青森 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1982.2 696p；23cm 資料目録・参考文献 p.676-679 収集範囲：1929年（昭和4年）-1980年 （昭和55年）8月	昔話－青森県	KH22-341 YZ-388.12-イナ
32		日本昔話通観 第3巻 岩手 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1985.10 945p；23cm 資料目録・参考文献 p.919-924 収集範囲：1910年（明治43年）-1982年 （昭和57年）	昔話－岩手県	KH22-341 YZ-388.12-イナ
33		日本昔話通観 第4巻 宮城 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1982.4 767p；23cm 資料目録・参考文献 p.748-750 収集範囲：1923年（大正12年）-1981年 （昭和56年）	昔話－宮城県	KH22-341 YZ-388.12-イナ
34		日本昔話通観 第5巻 秋田 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1982.10 782p；23cm 資料目録・参考文献 p.759-764 収集範囲：1930年（昭和5年）-1981年 （昭和56年）	昔話－秋田県	KH22-341 YZ-388.12-イナ
35	※	日本昔話通観 第6巻 山形 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1986.12 967p；23cm 資料目録・参考文献 p.935-940 収集範囲：1935年（昭和10年）-1984年 （昭和59年）	昔話－山形県	KH22-341 YZ-388.12-イナ
36		日本昔話通観 第7巻 福島 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1985.5 909p；23cm 資料目録・参考文献 p.886-889 収集範囲：1933年（昭和8年）-1983年 （昭和58年）	昔話－福島県	KH22-341 YZ-388.12-イナ
37		日本昔話通観 第8巻 栃木・群馬 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1986.4 714p；23cm 資料目録・参考文献 p.691-695 収集範囲：1911年（明治44年）-1981年 （昭和56年）	昔話－栃木県 昔話－群馬県	KH22-341 YZ-388.13-イナ
38		日本昔話通観 第9巻 茨城・埼玉・千葉・東京・ 神奈川 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1988.1 669p；23cm 資料目録・参考文献 p.637-643 収集範囲：1915年（大正4年）-1986年 （昭和61年）	昔話－関東地方	KH22-341 YZ-388.13-イナ

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
39		日本昔話通観 第10巻 新潟 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1984.9 1030p ; 23cm 資料目録・参考文献 p.1000-1006 収集範囲：1915年（大正4年）-1981年 （昭和56年）	昔話－新潟県	KH22-341 YZ-388.14-イナ
40		日本昔話通観 第11巻 富山・石川・福井 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1981.7 723p ; 23cm 資料目録・参考文献 p.696-702 収集範囲：1906年（明治39年）-1981年 （昭和56年）3月	昔話－北陸地方	KH22-341 YZ-388.14-イナ
41		日本昔話通観 第12巻 山梨・長野 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1981.3 715p ; 23cm 資料目録・参考文献 p.691-696 収集範囲：1922年（大正11年）-1980年 （昭和55年）2月	昔話－山梨県 昔話－長野県	KH22-341 YZ-388.15-イナ
42	※	日本昔話通観 第13巻 岐阜・静岡・愛知 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1980.11 665p ; 23cm 資料目録・参考文献 p.641-646 収集範囲：1916年（大正5年）-1979年 （昭和54年）	昔話－中部地方	KH22-341 YZ-388.15-イナ
43		日本昔話通観 第14巻 京都 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎 1977.10 594p ; 23cm 資料目録 p.581-582 付・参考文献 収集範囲：1925年（大正14年）-1976年 （昭和51年）7月	昔話－京都府	KH22-341 YZ-388.16-イナ
44		日本昔話通観 第15巻 三重・滋賀・大阪・奈良・ 和歌山 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎 1977.11 486p ; 23cm 資料目録 p.470-472 付・参考文献 収集範囲：1916年（大正5年）-1977年 （昭和52年）5月	昔話－近畿地方	KH22-341 YZ-388.16-イナ
45		日本昔話通観 第16巻 兵庫 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎 1978.1 606p ; 23cm 資料目録・参考文献 p.593-595 収集範囲：1930年（昭和5年）-1977年 （昭和52年）5月	昔話－兵庫県	KH22-341 YZ-388.16-イナ
46		日本昔話通観 第17巻 鳥取 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎 1978.3 979p ; 23cm 資料目録・参考文献 p.962-964 収集範囲：1923年（大正12年）-1977年 （昭和52年）2月	昔話－鳥取県	KH22-341 YZ-388.17-イナ

参考図書紹介－日本の昔話を知るためのブックリスト－

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
47		日本昔話通観 第18巻 島根 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎 1978.5 901p；23cm 資料目録・参考文献 p.883-886 収集範囲：1927年（昭和2年）-1977年 （昭和52年）3月	昔話－島根県	KH22-341 YZ-388.17-イナ
48		日本昔話通観 第19巻 岡山 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎 1979.10 970p；23cm 資料目録・参考文献 p.944-948 収集範囲：1927年（昭和2年）-1977年 （昭和52年）4月	昔話－岡山県	KH22-341 YZ-388.17-イナ
49		日本昔話通観 第20巻 広島・山口 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎 1979.6 908p；23cm 資料目録・参考文献 p.886-889 収集範囲：1932年（昭和7年）-1977年 （昭和52年）3月	昔話－広島県 昔話－山口県	KH22-341 YZ-388.17-イナ
50	※	日本昔話通観 第21巻 徳島・香川 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎 1978.11 637p；23cm 資料目録・参考文献 p.616-619 収集範囲：1927年（昭和2年）-1976年 （昭和51年）1月	昔話－徳島県 昔話－香川県	KH22-341 YZ-388.18-イナ
51		日本昔話通観 第22巻 愛媛・高知 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎 1979.9 739p；23cm 資料目録・参考資料・参考文献 p.715-720 収集範囲：1928年（昭和3年）-1977年 （昭和52年）12月	昔話－愛媛県 昔話－高知県	KH22-341 YZ-388.18-イナ
52		日本昔話通観 第23巻 福岡・佐賀・大分 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1980.4 861p；23cm 資料目録・参考文献 p.832-838 収集範囲：1906年（明治39年）-1979年 （昭和54年）9月	昔話－福岡県 昔話－佐賀県 昔話－大分県	KH22-341 YZ-388.19-イナ
53		日本昔話通観 第24巻 長崎・熊本・宮崎 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎 1980.2 781p；23cm 資料目録・参考文献 p.759-762 収集範囲：1928年（昭和3年）-1979年 （昭和54年）5月	昔話－長崎県 昔話－熊本県 昔話－宮崎県	KH22-341 YZ-388.19-イナ
54		日本昔話通観 第25巻 鹿児島 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1980.5 944p；23cm 資料目録・参考文献 p.919-923 収集範囲：1913年（大正2年）-1979年 （昭和54年）9月	昔話－鹿児島県	KH22-341 YZ-388.19-イナ

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
55		日本昔話通観 第26巻 沖縄 稲田浩二、小沢俊夫責任編集	同朋舎出版 1983.7 945p；23cm 資料目録・参考文献 p.918-922 収集範囲：1922年（大正11年）-1981年 （昭和56年）	昔話－沖縄県	KH22-341 YZ-388.19-イナ
56		日本昔話通観 第27巻 補遺 稲田浩二編著	同朋舎出版 1989.6 529p；23cm 資料目録・参考文献 p.493-505 収集範囲：2-26巻の編集完了後に刊行 された昔話資料を中心に、各篇未収載 のもの	昔話	KH22-341 YZ-388.1-イナ
57		日本昔話通観 第28巻 昔話タイプ・インデックス 稲田浩二著	同朋舎出版 1988.9 742、98、6p；23cm 資料目録・参考文献 p.739-740	昔話	KH22-341 YZ-388.1-イナ
58		日本昔話通観 第29巻 総合索引 稲田浩二編著	同朋舎出版 1990.7 491p；23cm 2-26巻（日本民族の昔話資料各篇）の 収載話の総合索引	昔話	KH22-341 YZ-388.1-イナ
59	※	全国昔話記録 阿波祖谷山昔話集 武田明編	三省堂 1943 144p 地図；19cm	昔話－徳島県－東祖谷 山村（徳島県） 昔話－徳島県－西祖谷 山村（徳島県）	YD5-H-388.18- Ta59ウ（マイク ロフィッシュ） （なし）
60		全国昔話記録 壱岐島昔話集 山口麻太郎編	三省堂 1943 165p 地図；19cm	昔話－長崎県	YD5-H- 388.19-Y24ウ（マ イクロフィッ シュ） YZ-388.19-ヤマ
61		全国昔話記録 磐城昔話集 岩崎敏夫編	三省堂 1942 191p 地図；19cm	昔話－福島県	YD5-H-388.13-196 ウ（マイク ロフィッシュ） （なし）
62		全国昔話記録 上閉伊郡昔話集 佐々木喜善著	三省堂 1943 190p 地図；19cm	昔話－岩手県－上閉伊 郡（岩手県）	388.12-Sa75-4ウ YZ-388.12-ササ
63		全国昔話記録 喜界島昔話集 岩倉市郎編	三省堂 1943 176p 地図；19cm	昔話－鹿児島県	YD5-H-388.19-193 ウ（マイク ロフィッシュ） （なし）
64		全国昔話記録 甌島昔話集 岩倉市郎編	三省堂 1944 210p 地図；19cm	昔話－鹿児島県	YD5-H- 388.19-193-2ウ（マ イクロフィッ シュ） YZ-388.19-イワ

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
65		全国昔話記録 佐渡島昔話集 鈴木棠三編	三省堂 1942 176p 地図；19cm	昔話－新潟県－佐渡市 佐渡島	YD5-H-388.14- Su96ウ（マイク ロフィッシュ） （なし）
66		全国昔話記録 讃岐佐柳志々島昔話集 武田明編	三省堂 1944 135p 地図；19cm	昔話－塩飽諸島	YD5-H-388.18- Ta59-2ウ（マイ クロフィッシュ） YZ-388.18-タケ
67		全国昔話記録 島原半島昔話集 関敬吾編	三省堂 1942 176p 地図；19cm	昔話－島原半島	YD5-H-388.19- Se24ウ（マイク ロフィッシュ） （なし）
68	※	全国昔話記録 紫波郡昔話集 小笠原謙吉編	三省堂 1942 164p 地図；19cm	昔話－岩手県－紫波郡 （岩手県）	YD5-H- 388.12-O22ウ（マ イクロフィッ シュ） （なし）
69		全国昔話記録 直入郡昔話集 鈴木清美編	三省堂 1943 132p 地図；19cm	昔話－大分県－直入郡 （大分県）	YD5-H-388.19- Su96ウ（マイク ロフィッシュ） YZ-388.19-スズ
70		全国昔話記録 御津郡昔話集 今村勝臣編	三省堂 1943 180p 地図；19cm	昔話－岡山県－御津郡 （岡山県）	YD5-H-388.17-I44 ウ（マイクロ フィッシュ） YZ-388.17-イマ
71		全国昔話記録 南蒲原郡昔話集 岩倉市郎編	三省堂 1943 196p 地図；19cm	昔話－新潟県－南蒲原 郡（新潟県）	YD5-H-388.14-I93 ウ（マイクロ フィッシュ） YZ-388.14-イワ
72		日本昔話記録 1 岩手県紫波郡昔話集 柳田国男編；小笠原謙吉採録	三省堂 1973 173p 図；20cm 昭和17年『全国昔話記録』として刊行 されたものの復刊	昔話－岩手県	KH22-117 YZ-388.12-ヤナ
73		日本昔話記録 2 岩手県上閉伊郡昔話集 柳田国男編；佐々木喜善採録	三省堂 1973 193p 図；20cm 昭和18年『全国昔話記録』として刊行 されたものの復刊	昔話－岩手県	KH22-117 YZ-388.12-ヤナ
74	※	日本昔話記録 3 福島県磐城地方昔話集 柳田国男編；岩崎敏夫採録	三省堂 1974 201p 図地図；20cm 昭和18年『磐城昔話集』として刊行さ れたものの復刊	昔話－福島県	KH22-117 YZ-388.12-ヤナ
75		日本昔話記録 4 新潟県南蒲原郡昔話集 柳田国男編；岩倉市郎採録	三省堂 1974 190p 図地図；20cm 昭和18年『南蒲原郡昔話集』として刊 行されたものの復刊	昔話－新潟県	KH22-117 YZ-388.14-ヤナ
76		日本昔話記録 5 新潟県佐渡昔話集 鈴木棠三編著	三省堂 1973 228p 図；20cm 昭和14年『佐渡昔話集』として刊行さ れたものの復刊	昔話－新潟県	KH22-117 YZ-388.14-スズ

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
77		日本昔話記録 6 岡山県御津郡昔話集 柳田国男編；今村勝臣採録	三省堂 1974 184p 図地図；20cm 昭和18年『御津郡昔話集』として刊行 されたものの復刊	昔話－岡山県	KH22-117 YZ-388.17-ヤナ
78		日本昔話記録 7 香川県佐柳島・志々島昔話集 柳田国男編；武田明採録	三省堂 1973 149p 図；20cm 昭和19年『全国昔話記録』として刊行 されたものの復刊	昔話－香川県	KH22-117 YZ-388.18-ヤナ
79		日本昔話記録 8 徳島県祖谷山地方昔話集 柳田国男編；武田明採録	三省堂 1973 154p 図地図；20cm 昭和18年『全国昔話記録』として刊行 されたものの復刊	昔話－徳島県	KH22-117 YZ-388.18-ヤナ
80		日本昔話記録 9 徳島県井内谷昔話集 武田明編著	三省堂 1973 159p 図；20cm (注記なし)	昔話－徳島県	KH22-117 YZ-388.18-タケ
81		日本昔話記録 10 大分県直入郡昔話集 柳田国男編；鈴木清美採録	三省堂 1973 153p 図地図；20cm 昭和18年『全国昔話記録』として刊行 されたものの復刊	昔話－大分県	KH22-117 YZ-388.19-ヤナ
82		日本昔話記録 11 鹿児島県甑島昔話集 柳田国男編；岩倉市郎採録	三省堂 1973 220p 図地図；20cm 昭和19年『全国昔話記録』として刊行 されたものの復刊	昔話－鹿児島県	KH22-117 YZ-388.19-ヤナ
83		日本昔話記録 12 鹿児島県喜界島昔話集 柳田国男編；岩倉市郎採録	三省堂 1974 193p 図地図；20cm 昭和18年『喜界島昔話集』として刊行 されたものの復刊	昔話－鹿児島県	KH22-117 YZ-388.19-ヤナ
84		日本昔話記録 13 長崎県壱岐島昔話集 柳田国男編；山口麻太郎採録	三省堂 1973 174p 図地図；20cm 昭和18年『全国昔話記録』として刊行 されたものの復刊	昔話－長崎県	KH22-117 YZ-388.19-ヤナ
85		日本昔話記録 1 岩手県紫波郡昔話集 柳田国男編 復刻版	三省堂 2006.10 173p；26cm		xxx YZ-388.12-ヤナ
86	※	昔話研究資料叢書 1 蒜山盆地の昔話 稲田浩二、福田晃編	三弥井書店 1968 553p 図版地図；19cm付：ソノシ ート2枚	昔話－岡山県-川上村 (岡山県) 昔話-岡山県-八束村 (岡山県)	388.175-I366h (なし)
87		昔話研究資料叢書 2 国東半島の昔話 宮崎一枝編	三弥井書店 1969 493p 図版；19cm付：ソノシート2 枚	昔話－大分県	KH22-3 (なし)
88		昔話研究資料叢書 3 佐渡国仲の昔話 丸山久子編著	三弥井書店 1970 271p 図版；19cm付(巻末)：ソノ シート2枚	昔話－新潟県-佐渡市 佐渡島	KH22-23 (なし)

参考図書紹介－日本の昔話を知るためのブックリスト－

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
89		昔話研究資料叢書 4 大山北麓の昔話：鳥取県東伯郡東伯町・赤碕町 稲田浩二、福田晃編	三弥井書店 1970 773p (図版共)；19cm 附録 (巻末)： ソノシート 2枚	昔話－鳥取県	KH22-22 (なし)
90		昔話研究資料叢書 5 甌島の昔話：鹿児島県薩摩郡上甌村・下甌村 荒木博之編	三弥井書店 1970 365p (図共) ソノシート 1枚；19cm	昔話－鹿児島県 甌島	KH22-32 YZ-388.19-アラ
91		昔話研究資料叢書 6 越中射水の昔話：富山県射水郡 伊藤曙寛編	三弥井書店 1971 335p 図；19cm 付録：ソノシート 1 枚 (袋入)	昔話－富山県 射水郡 (富山県)	KH22-58 YZ-388.14-イト
92		昔話研究資料叢書 7 茨城の昔話 鶴尾能子編	三弥井書店 1972 322p 図；19cm	昔話－茨城県	KH22-77 YZ-388.13-ツル
93		昔話研究資料叢書 8 奥備中の昔話 稲田浩二、立石憲利編	三弥井書店 1973 579p (図共)；19cm 付：ソノシート (1 枚)	昔話－岡山県	KH22-107 YZ-388.17-イナ
94	※	昔話研究資料叢書 9 陸奥二戸の昔話 丸山久子、佐藤良裕編	三弥井書店 1973 526p 図肖像；19cm 付：ソノシート 1 枚 (袋入)	昔話－岩手県	KH22-110 YZ-388.12-マル
95		昔話研究資料叢書 10 飯豊山麓の昔話 武田正編	三弥井書店 1973 507p (図・肖像共)；19cm 附録：方 言資料文例 (ソノシート付) 1枚 13cm33rpm	昔話－山形県	KH22-164 (なし)
96		昔話研究資料叢書 11 越後黒姫の昔話 真鍋真理子編	三弥井書店 1973 463p (図共)；19cm	昔話－新潟県	KH22-163 YZ-388.14-マナ
97		昔話研究資料叢書 12 那珂川流域の昔話 小堀修一編著	三弥井書店 1975 348p 図；19cm	昔話－栃木県	KH22-221 YZ-388.13-コボ
98		昔話研究資料叢書 13 因幡智頭の昔話 福田晃、三原幸久編著	三弥井書店 1979.3 453p；20cm	昔話－鳥取県	KG745-75 YZ-388.17-フク
99		昔話研究資料叢書 14 南加賀の昔話 黄地百合子 (ほか) 編著	三弥井書店 1979.6 369p；20cm	昔話－石川県	KG745-114 YZ-388.14-オウ
100		昔話研究資料叢書 15 陸前の昔話 佐々木徳夫編著	三弥井書店 1979.10 650p；20cm	昔話－宮城県	KH22-467 YZ-388.12-ササ

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
101		昔話研究資料叢書16 房総の昔話 川端豊彦、金森美代子編著	三弥井書店 1980.11 368p；20cm	昔話－千葉県	KH22-511 (なし)
102		昔話研究資料叢書17 種子島の昔話. 1 下野敏見編著	三弥井書店 1980.12 485p；20cm	昔話－鹿児島県 種子島	KH22-512 YZ-388.19-シモ
103	※	昔話研究資料叢書18 西三河の昔話 山本節〔ほか〕編著	三弥井書店 1981.9 526p；20cm	昔話－愛知県	KH22-562 YZ-388.15-ヤマ
104		昔話研究資料叢書別巻 黄金の馬 森口多里著	三弥井書店 1971 337p (図共)；19cm	昔話－岩手県	KH372-20 YZ-388.12-モリ
105		昔話研究資料叢書 別巻 アイヌの昔話 久保寺逸彦編著	三弥井書店 1972 308、23p 図；19cm	伝説－北海道 アイヌ	KJ16-4 YZ-388.11-クボ
106		昔話研究資料叢書 別巻 瞽女の語る昔話：杉本キクエ唄昔話 集 杉本キクエ (述)	三弥井書店 1975 338p 図肖像；19cm付：瞽女の語る 昔話 (レコード 1枚13cm33rpm)	昔話 ごぜ	KH22-186 (なし)
107		昔話研究資料叢書 別巻 肥前伊万里の昔話と伝説：松尾テイ 唄の語る昔話 松尾テイ述、宮地武彦編著	三弥井書店 1986.10 502p；20cm	昔話－佐賀県 伝説－佐賀県 伊万里市	KH22-771 YZ-388.19-ミヤ
108		昔話研究資料叢書 別巻 水ぐるま：蒲原タツエ唄の語る昔話 肥前有明・塩田の昔話と伝説 蒲原タツエ (述)、宮地武彦編著	三弥井書店 1991.7 516p；20cm	昔話－佐賀県 有明町 (佐賀県) 塩田町 (佐賀県)	KH22-E262 (なし)
109		昔話研究資料叢書 別巻 沖縄首里の昔話：小橋川共寛翁のチ ティバナシ 伊芸弘子編著	三弥井書店 1992.5 303p；22cm		(なし) (なし)
110		昔話研究資料叢書附録： 口承文芸研究通信第1号-第21号	三弥井書店 1968.5-1981.10 1冊；18cm		Y91-E2205 (なし)
111	※	日本の昔話 1 若狭の昔話 稲田浩二編	日本放送出版協会 1972 256p；20cm	昔話－福井県	KH22-89 YZ-388.14-イナ
112		日本の昔話 2 アイヌの昔話 浅井亨編	日本放送出版協会 1972 271、12p；20cm	伝説－北海道 アイヌ	KH22-89 YZ-388.11-アサ

参考図書紹介－日本の昔話を知るためのブックリスト－

No.	No.2 収録	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
113		日本の昔話 3 久永ナオマツ姫の昔話：奄美大島 山下欣一、有馬英子編	日本放送出版協会 1973 245p；20cm	伝説－鹿児島県	KH22-89 YZ-388.19- ヤマ
114		日本の昔話 4 羽前の昔話 武田正編	日本放送出版協会 1973 342p；20cm	伝説－山形県	KH22-89 YZ-388.12- タケ
115		日本の昔話 5 伊予の昔話 和田良誉編	日本放送出版協会 1973 261p；20cm	昔話－愛媛県	KH22-89 YZ-388.18- ワダ
116		日本の昔話 6 近江の昔話 笠井典子編	日本放送出版協会 1973 265p；20cm	昔話－滋賀県	KH22-89 YZ-388.16- カサ
117		日本の昔話 7 奄美諸島の昔話 田畑英勝編	日本放送出版協会 1974 342p；20cm	昔話－鹿児島県 奄美諸島	KH22-89 YZ-388.19- タバ
118		日本の昔話 8 越後の昔話 水沢謙一編	日本放送出版協会 1974 303p；20cm	昔話－新潟県	KH22-89 YZ-388.14- ミズ
119		日本の昔話 9 美作の昔話 立石憲利、前田東雄編	日本放送出版協会 1974 302p；20cm	昔話－岡山県	KH22-89 YZ-388.17- タテ
120	※	日本の昔話 10 遠野の昔話 遠野民話同好会編	日本放送出版協会 1975 299p；20cm	昔話－岩手県	KH22-89 YZ-388.12- トオ
121		日本の昔話 11 永浦誠喜翁の昔話：宮城 佐々木徳夫編	日本放送出版協会 1975 322p；20cm	昔話－宮城県	KH22-89 YZ-388.12- ササ
122		日本の昔話 12 東瀬戸内の昔話 柴口成浩、仙田実、山内靖子編	日本放送出版協会 1975 276p；20cm	昔話－兵庫県昔話－岡 山県昔話－香川県	KH22-89 YZ-388.16- シバ
123		日本の昔話 13 紀伊半島の昔話 京都女子大学説話文学研究会編	日本放送出版協会 1975 270p；20cm	昔話－和歌山県 昔話－奈良県	KH22-89 YZ-388.16- キイ
124		日本の昔話 14 出雲の昔話 立石憲利、山根美佐恵編	日本放送出版協会 1976 315p；20cm	昔話－島根県	KH22-89 YZ-388.17- タテ
125		日本の昔話 15 伯耆の昔話 福田晃、宮岡薫、宮岡洋子編	日本放送出版協会 1976 342p；20cm	昔話－鳥取県	KH22-89 YZ-388.17- フク
126		日本の昔話 16 美濃の昔話 稲田浩二編	日本放送出版協会 1977.4 300p；20cm	昔話－岐阜県	KH22-89 YZ-388.15- イナ
127		日本の昔話 17 浪速の昔話 笠井典子編	日本放送出版協会 1977.5 287p；20cm	昔話－大阪府	KH22-89 YZ-388.16- カサ
128		日本の昔話 18 備後の昔話 稲田和子、高田雅之、新宅全美編	日本放送出版協会 1977.7 267p；20cm	昔話－広島県	KH22-89 YZ-388.16- イナ

No.	No.2 収録	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
129		日本の昔話 19肥後の昔話 浜名志松、三原幸久、三宅忠明編	日本放送出版協会 1977.9 368p；20cm	昔話－熊本県	KH22-89 YZ-388.19-ハマ
130		日本の昔話 20羽後の昔話 今村泰子編	日本放送出版協会 1977.11 294p；20cm	昔話－秋田県	KH22-89 YZ-388.12-イマ
131		日本の昔話 21丹後の昔話 岡節三、細見正三郎編	日本放送出版協会 1978.2 292p；20cm	昔話－京都府	KH22-89 YZ-388.16-オカ
132		日本の昔話 22下野の昔話 小堀修一、谷本尚史編	日本放送出版協会 1978.6 242p；20cm	昔話－栃木県	KH22-89 YZ-388.13-コボ
133		日本の昔話 23瀬戸内の昔話 柴口成浩〔ほか〕編	日本放送出版協会 1978.8 252p；20cm	昔話－瀬戸内海地方	KH22-89 YZ-388.17-シバ
134		日本の昔話 24対馬の昔話 宮本正興、山中耕作編	日本放送出版協会 1978.11 303p；20cm	昔話－長崎県 対馬	KH22-89 YZ-388.19-ミヤ
135	※	日本の昔話 25土佐の昔話 坂本正夫編	日本放送出版協会 1979.1 289p；20cm	昔話－高知県	KH22-89 YZ-388.18-サカ
136		日本の昔話 26加賀の昔話 加能昔話研究会編	日本放送出版協会 1979.4 281p；20cm	昔話－石川県	KH22-89 YZ-388.14-カガ
137		日本の昔話 27石見の昔話 酒井董美編	日本放送出版協会 1979.6 320p；20cm	昔話－島根県	KH22-89 YZ-388.17-サカ
138		日本の昔話 28武蔵の昔話 池上真理子編	日本放送出版協会 1979.9 291p；20cm	昔話－埼玉県	KH22-89 (なし)
139		日本の昔話 29信濃の昔話 岩瀬博〔ほか〕編	日本放送出版協会 1980.1 365p；20cm	昔話－長野県	KH22-89 (なし)
140		日本の昔話 30沖縄の昔話 福田晃〔ほか〕編	日本放送出版協会 1980.8 426p；20cm	昔話－沖縄県	KH22-89 YZ-388.19-フク
141		全国昔話資料集成 1 羽前小国昔話集：山形 佐藤義則編	岩崎美術社 1974 295p 図；20cm	昔話－山形県	KH22-151 YZ-388.12-サト
142	※	全国昔話資料集成 2 北浦原昔話集：新潟 佐久間惇一編	岩崎美術社 1974 281p 図；20cm	昔話－新潟県	KH22-151 YZ-388.14-サク
143		全国昔話資料集成 3 鹿児島昔話集：鹿児島 有馬英子編	岩崎美術社 1974 272p 図；20cm	昔話－鹿児島県	KH22-151 YZ-388.19-アリ
144		全国昔話資料集成 4 白山麓昔話集：石川 小倉学編	岩崎美術社 1974 337p 図；20cm	昔話－石川県	KH22-151 YZ-388.14-オグ

参考図書紹介－日本の昔話を知るためのブックリスト－

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
145		全国昔話資料集成 5 安芸国昔話集：広島 磯貝勇編	岩崎美術社 1974 241p 図；20cm	昔話－広島県	KH22-151 YZ-388.17-イソ
146		全国昔話資料集成 6 肥後昔話集：熊本 木村祐章編	岩崎美術社 1974 290p 図；20cm	昔話－熊本県	KH22-151 YZ-388.19-キム
147		全国昔話資料集成 7 津軽昔話集：青森 斎藤正編	岩崎美術社 1974 263p 図；20cm	昔話－青森県	KH22-151 YZ-388.12-サイ
148		全国昔話資料集成 8 西播磨昔話集：兵庫 井口宗平編	岩崎美術社 1975 417p 図；20cm	昔話－兵庫県	KH22-151 YZ-388.16-イグ
149		全国昔話資料集成 9 西讃岐地方昔話集：香川 武田明編	岩崎美術社 1975 198p 図；20cm	昔話－香川県	KH22-151 YZ-388.18-タケ
150		全国昔話資料集成 10 東祖谷昔話集：徳島 細川頼重編	岩崎美術社 1975 353p 図；20cm	昔話－徳島県	KH22-151 YZ-388.18-ホソ
151		全国昔話資料集成 11 福岡昔話集：福岡原題：福岡県童 話福岡県教育会編	岩崎美術社 1975 255p 図；20cm	昔話－福岡県	KH22-151 YZ-388.19-フク
152	※	全国昔話資料集成 12 角館昔話集：秋田 武藤鉄城編	岩崎美術社 1975 295p 図；20cm	昔話－秋田県	KH22-151 YZ-388.12-ムト
153		全国昔話資料集成 13 利根昔話集：群馬 上野勇編	岩崎美術社 1975 223p 図；20cm	昔話－群馬県	KH22-151 YZ-388.13-ウエ
154		全国昔話資料集成 14 芸備昔話集：広島 村岡浅夫編	岩崎美術社 1975 321p 図；20cm	昔話－広島県	KH22-151 YZ-388.17-ムラ
155		全国昔話資料集成 15 奄美大島昔話集：鹿児島 田畑英勝編	岩崎美術社 1975 401p 図；20cm	昔話－鹿児島県	KH22-151 YZ-388.19-タバ
156		全国昔話資料集成 16 甲州昔話集：山梨 土橋里木編	岩崎美術社 1975 244p 図；20cm	昔話－山梨県	KH22-151 YZ-388.15-ツチ
157		全国昔話資料集成 17 大分昔話集：大分 阿部通良、後藤貞夫、鈴木清美編	岩崎美術社 1975 224p 図；20cm	昔話－大分県	KH22-151 YZ-388.19-アベ
158		全国昔話資料集成 18 下野昔話集：栃木 加藤嘉一、高橋勝利編	岩崎美術社 1975 197p 図；20cm	昔話－栃木県	KH22-151 YZ-388.13-カト
159		全国昔話資料集成 19 加賀昔話集：石川 山下久男編	岩崎美術社 1975 255p 図；20cm	昔話－石川県	KH22-151 YZ-388.14-ヤマ

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
160		全国昔話資料集成 20武蔵川越昔話集：埼玉 鈴木棠三編	岩崎美術社 1975 313p 図；20cm	昔話－埼玉県	KH22-151 YZ-388.13-スズ
161		全国昔話資料集成 21島原半島昔話集：長崎 関敬吾編	岩崎美術社 1977.4 324p 図；20cm	昔話－長崎県	KH22-151 (なし)
162		全国昔話資料集成 22越後宮内昔話集：新潟 水沢謙一編	岩崎美術社 1977.4 381p 図；20cm	昔話－新潟県	KH22-151 (なし)
163		全国昔話資料集成 23土佐昔話集：高知 桂井和雄編	岩崎美術社 1977.5 376p 図；20cm	昔話－高知県	KH22-151 (なし)
164		全国昔話資料集成 24真室川昔話集：山形 野村敬子編	岩崎美術社 1977.7 326p；20cm	昔話－山形県	KH22-151 (なし)
165		全国昔話資料集成 25恵那昔話集：岐阜 大橋和華編	岩崎美術社 1977.9 357p；20cm	昔話－岐阜県	KH22-151 (なし)
166		全国昔話資料集成 26脊振山麓昔話集：佐賀 宮地武彦編	岩崎美術社 1977.11 322p；20cm	昔話－佐賀県	KH22-151 (なし)
167	※	全国昔話資料集成 27但馬昔話集：兵庫 谷垣桂蔵編	岩崎美術社 1978.2 362p；20cm	昔話－兵庫県	KH22-151 (なし)
168		全国昔話資料集成 28阿仁昔話集：秋田 野添憲治編	岩崎美術社 1978.6 273p；20cm	昔話－秋田県	KH22-151 (なし)
169		全国昔話資料集成 29陸前昔話集.宮城 佐々木徳夫編	岩崎美術社 1978.12 340p；20cm	昔話－宮城県	KH22-151 (なし)
170		全国昔話資料集成 30伊豆昔話集：静岡 鈴木暹編	岩崎美術社 1979.2 305p；20cm	昔話－静岡県	KH22-151 (なし)
171		全国昔話資料集成 31吾妻昔話集.群馬 榎谷明編	岩崎美術社 1979.6 271p；20cm	昔話－群馬県	KH22-151 (なし)
172		全国昔話資料集成 32東讃岐昔話集：香川 武田明、谷原博信編	岩崎美術社 1979.10 289p；20cm	昔話－香川県	KH22-151 (なし)
173		全国昔話資料集成 33奥出雲昔話集：島根 田中瑩一編	岩崎美術社 1980.11 237p；20cm	昔話－島根県	KH22-151 (なし)
174		全国昔話資料集成 34陸前伊具昔話集：宮城 山本明編	岩崎美術社 1981.4 300p；20cm	昔話－宮城県	KH22-151 (なし)

参考図書紹介－日本の昔話を知るためのブックリスト－

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
175		全国昔話資料集成 35武相昔話集：神奈川 小島瓊礼編	岩崎美術社 1981.10 290p；20cm	昔話－神奈川県	KH22-151 (なし)
176		全国昔話資料集成 36石見昔話集：島根 森脇太一編	岩崎美術社 1984.2 223p；20cm	昔話－島根県	KH22-151 (なし)
177		全国昔話資料集成 37庄内昔話集：山形 清野久雄編	岩崎美術社 1984.5 324p；20cm	昔話－山形県	KH22-151 (なし)
178		全国昔話資料集成 38下北半島昔話集：青森 高松敬吉編	岩崎美術社 1984.7 257p；20cm	昔話－青森県	KH22-151 (なし)
179		全国昔話資料集成 39沖永良部島昔話集：鹿児島 関敬吾編	岩崎美術社 1984.11 252p；20cm	昔話－鹿児島県	KH22-151 (なし)
180		全国昔話資料集成 40奥信濃昔話集：長野 浅川欽一編	岩崎美術社 1984.11 314p；20cm	昔話－長野県	KH22-151 (なし)
181	※	日本の民話.1-12	ぎょうせい 1979.8-1986.12 全12巻；20cm		KH22-403 (なし)
182		日本の民話. 1 北海道 浅井亨編 新装版	ぎょうせい 1995.2 318p；20cm	昔話－北海道	KH22-E376 YZ-388.11-アサ
183		日本の民話 2 東北.1 青森・岩手・宮城 加藤瑞子、佐々木徳夫編	ぎょうせい 1995.2 286p；20cm	昔話－東北地方	KH22-E376 YZ-388.12-カト
184		日本の民話 3 東北.2 秋田・山形・福島 武田正編	ぎょうせい 1995.2 314p；20cm	昔話－東北地方	KH22-E376 YZ-388.12-タケ
185		日本の民話 4 関東茨城・栃木・群馬・千葉・埼玉・ 東京・神奈川 谷本尚史〔ほか〕編	ぎょうせい 1995.2 324p；20cm	昔話－関東地方	KH22-E376 YZ-388.13-タニ
186		日本の民話 5 甲信越山梨・長野・新潟 小沢俊夫〔ほか〕編	ぎょうせい 1995.2 314p；20cm	昔話－中部地方	KH22-E376 YZ-388.15-オザ
187		日本の民話 6 東海・北陸：静岡・愛知・岐阜・ 富山・石川・福井 沖野皓一、加納妙子編	ぎょうせい 1995.2 314p；20cm	昔話－東海地方 昔話－北陸地方	KH22-E376 YZ-388.15-オキ
188		日本の民話 7 近畿：京都・三重・滋賀・奈良・ 和歌山・大阪・兵庫 岡節三、笠井典子編	ぎょうせい 1995.2 316p；20cm	昔話－近畿地方	KH22-E376 YZ-388.16-オカ
189		日本の民話 8 山陰：鳥取・島根 川上迪彦、三原幸久編	ぎょうせい 1995.2 306p；20cm	昔話－山陰地方	KH22-E376 YZ-388.17-カワ

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
190		日本の民話 9山陽：岡山・広島・山口 稲田和子、立石憲利編	ぎょうせい 1995.2 286p；20cm	昔話－山陽地方	KH22-E376 YZ-388.17-イナ
191		日本の民話 10四国：徳島・高知・香川・愛媛 稲田浩二編	ぎょうせい 1995.2 327p；20cm	昔話－四国地方	KH22-E376 YZ-388.18-イナ
192		日本の民話 11九州.1 福岡・佐賀・長崎・熊本 金沢敦子〔ほか〕編	ぎょうせい 1995.2 318p；20cm	昔話－九州地方	KH22-E376 YZ-388.19-カナ
193		日本の民話 12九州.2 沖縄 有馬英子、遠藤庄治編	ぎょうせい 1995.2 342p；20cm	昔話－沖縄県	KH22-E376 YZ-388.19-アリ
3. 日本昔話文献目録（1）辞書・事典類					
194	※	民俗学辞典 民俗学研究所編	東京堂 1951 714p 図版表；19cm	民俗学－辞書	380.33-M516-M (なし)
195	※	日本民俗事典 大塚民俗学会編	弘文堂 1972 862p；22cm	民俗学－辞書 日本－風俗・習慣	GB8-21 (なし)
196		日本民俗事典 大塚民俗学会編	弘文堂 1994.6 862p；20cm 縮刷版	民俗学－辞書 日本－風俗・習慣	GB8-E82 (なし)
197	※	日本昔話事典 稲田浩二〔等〕編	弘文堂 1977.12 1169p；22cm	昔話－辞書	KG2-37 YZ-388.1-イナ
198		日本昔話事典 稲田浩二〔ほか〕編	弘文堂 1994.6 1109p；20cm 縮刷版	昔話－辞書	KG2-E53 (なし)
199	※	昔話・伝説小事典 野村純一〔ほか〕編	みずうみ書房 1987.11 305p；20cm	昔話－辞書 伝説－辞書	KG2-E2 YZ-388-ノム
200	※	日本民俗大辞典.上 福田アジオ〔ほか〕編	吉川弘文館 1999.10 1008p 図版34枚；27cm	民俗学－辞書 日本－風俗・習慣－辞書	GB8-G36 YZ-380-フク
201	※	日本民俗大辞典.下 福田アジオ〔ほか〕編	吉川弘文館 2000.4 858、276p 図版30枚；27cm	民俗学－辞書 日本－風俗・習慣－辞書	GB8-G36 YZ-380-フク
202		日本伝説名彙 日本放送協会編 改版	日本放送出版協会 1971 523p；22cm	伝説－日本	KG745-21 YZ-388.1-ヤナ
203		神話伝説辞典 朝倉治彦等共編	東京堂 1963 513p；19cm	伝説－日本－辞書 神話－辞書	388.1-A861s YZ-388.1-アサ
204		日本説話文学索引 平林治徳、石山徹郎、境田四郎編 増補改訂境田四郎、和田克司編	清文堂出版 1974 1156p；22cm 初版：日本出版社昭和18年刊 (同複製版：清文堂出版昭和39年刊)	日本文学－索引 説話文学－索引	KG2-23 YZ-910-ヒラ
205		日本短篇物語集事典 小林保治〔ほか〕編	東京美術 1984.10 494、4p；19cm 日本の説話別巻『説話文学必携』（昭和51年刊）の改題改訂新装版	説話文学 昔話	KG733-29 YZ-913.3-コバ

参考図書紹介－日本の昔話を知るためのブックリスト－

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
206		日本伝奇伝説大事典 乾克己（ほか）編	角川書店 1986.10 1022p；27cm	伝説－日本－辞書 昔話－辞書	KG2-92 YZ-388.1－イヌ
207		架空人名辞典.日本編 教育社歴史言語研究室編	教育社 1989.8 912p；19cm	日本文学－辞書	KE112-21 YZ-910-カク
208		日本奇談逸話伝説大事典 志村有弘、松本寧至編	勉誠社 1994.2 990、27p；23cm	日本－人名辞書 伝説－日本－辞書	GK2-E9 YZ-281-シム
209		日本説話伝説大事典 志村有弘、諏訪春雄編著	勉誠出版 2000.6 1035、25p；27cm	伝説－日本－辞書	KG2-G46 YZ-388.1-シム
210		日本架空伝承人名事典 大隅和雄（ほか）編 増補	平凡社 2000.8 565、13p；22cm	伝説－日本－辞書 日本－人名辞典	KG2-G44 YZ-388.1-オオ
211		日本説話小事典 野村純一（ほか）編	大修館書店 2002.4 339p；20cm	説話－辞書	KG2-G54 YZ-913.3-ノム
212		日本の児童文学登場人物索引 民話・昔話集篇 DBジャパン編	DBジャパン 2006.11 966p；21cm	児童文学－日本－索引 昔話－日本	KG2-H45 YZ-388.1-ニホ
3. 日本昔話文献目録（2）書誌・図書目録					
213		全国昔話伝説関係資料蔵書目録： 1986 遠野市立図書館編	遠野市立図書館 1987.3 227p；26cm 附録・岩手県昔話伝説関係目次一覧	昔話－書目 伝説－日本－書目	KG1-123 (なし)
214		日本文学研究文献要覧. 1965-1974（昭和40年代）1 古代-近 世編 「20世紀文献要覧大系」編集部編	日外アソシエーツ 1976 445p；27cm	日本文学－書目	KG1-37 (なし)
215		日本文学研究文献要覧 古典文学 1975-1984 日外アソシエーツ株式会社編	日外アソシエーツ 1995.3 764p；27cm	日本文学－歴史－書目	KG1-E63 (なし)
216		日本文学研究文献要覧 古典文学1985-1989 日外アソシエーツ株式会社編	日外アソシエーツ 1996.5 652p；27cm	日本文学－歴史－書目	KG1-E63 (なし)
217		日本文学研究文献要覧 古典文学. 1990-1994 石黒吉次郎監修	日外アソシエーツ 2000.5 758p；27cm	日本文学－歴史－書目	KG1-G49 (なし)
218		日本文学研究文献要覧 古典文学. 1995-1999 石黒吉次郎監修	日外アソシエーツ 2002.7 850p；27cm	日本文学－歴史－書目	KG1-G49 (なし)
219		日本文学研究文献要覧 古典文学. 2000-2004 石黒吉次郎監修	日外アソシエーツ 2006.7 777p；27cm	日本文学－歴史－書目	KG1-H54 YZ-910-ニホ
220		民話・昔話全情報. 1945-1991 日外アソシエーツ株式会社編	日外アソシエーツ 1992.6 661p；22cm	昔話－書目	KE111-E23 YZ-388-ミン
221		民話・昔話全情報. 1992-1999 日外アソシエーツ株式会社編	日外アソシエーツ 2000.9 527p；22cm	昔話－書目	KE111-G33 YZ-388-ミン

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
222		民話・昔話全情報. 2000-2007 日外アソシエーツ株式会社編	日外アソシエーツ 2008.2 617p; 22cm	昔話－書目	KE111-J4 YZ-388-ミン
223		民話・昔話集内容総覧 日外アソシエーツ株式会社編	日外アソシエーツ 2003.4 1296p; 22cm	昔話－書目	KE111-H7 YZ-388-ミン
224		民話・昔話集作品名総覧 日外アソシエーツ株式会社編	日外アソシエーツ 2004.9 38、1483p; 22cm	昔話－書目	KE111-H21 YZ-388-ミン
3. 日本昔話文献目録(3) 研究書 ①国際比較論、起源・変遷・伝播論					
225		南方随筆 南方熊楠著	岡書院 1926 468p 肖像; 19cm		YD5-H-525-275 (マイクロフィッ シュ) 049.1-M485m-o (なし)
226		南方随筆. 続 南方熊楠著	岡書院 1926 460p 肖像; 20cm		YD5-H-525-275 (マイクロフィッ シュ) (なし)
227	※	南方熊楠全集 2 南方閑話・南方随筆・続南方随筆	平凡社 1971 620p 図; 22cm		US21-23 (なし)
228		南方熊楠選集 第3巻南方閑話・南方随筆	平凡社 1984.11 368p; 21cm		US21-172 (なし)
229		南方熊楠選集 第4巻続南方随筆: ほか	平凡社 1984.12 311p; 21cm		US21-172 (なし)
230		桃太郎の誕生 柳田国男著	三省堂 1933 577p; 20cm		633-118 (なし)
231	※	柳田国男全集 第6巻 桃太郎の誕生 ほか 柳田国男著	筑摩書房 1998.10 597p; 22cm	民俗学	GD1-G83 YZ-380-ヤナ
232		河童駒引考: 比較民族学的研究 石田英一郎著	筑摩書房 1948 325p 図版; 21cm		389-I534k (なし)
233		石田英一郎全集 第5巻 新版河童駒引考 ほか	筑摩書房 1977.10 411p 図版; 22cm 新装版	文化人類学	G121-78 (なし)
234	※	河童駒引考: 比較民族学的研究 石田英一郎著 新版 岩波文庫	岩波書店 1994.5 317、19p; 15cm	民族学	G121-H28 YZ-388-イシ
235	※	昔話の歴史 関敬吾著	至文堂 1966 311p; 19cm	昔話	388.1-Se126m2 (なし)
236		関敬吾著作集. 2 昔話の歴史	同朋舎出版 1982.2 356p; 21cm	昔話	KE178-31 YZ-388-セキ
237	※	世界のシンデレラ物語 山室静著 新潮選書	新潮社 1979.8 251p; 20cm	昔話	KE178-27 (なし)

No.	No.2 収録	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
238	※	昔話の時代 稲田浩二著	筑摩書房 1985.2 274p；20cm	昔話	KG745-179 YZ-388.1-イナ
239	※	昔話の考古学：山姥と縄文の女神 吉田敦彦著 中公新書	中央公論社 1992.4 226p；18cm	昔話 山姥	G189-E25 (なし)
240	※	日本昔話通観 研究篇1 日本昔話とモンゴロイド： 昔話の比較記述 稲田浩二責任編集	同朋舎出版 1993.7 674、46p；23cm	昔話	KH22-341 YZ-388.1-イナ
241	※	昔話の源流 稲田浩二著	三弥井書店 1997.1 386p；20cm	昔話	KG745-G30 YZ-388.1-イナ
242	※	銀河の道虹の架け橋 大林太良著	小学館 1999.7 813p；22cm	神話 伝説 銀河	G189-G64 YZ-388-オオ
243		昔話の伝播 福田晃著	弘文堂 1976 218p；19cm	昔話	KG745-82 (なし)
244		日本の昔話：比較研究序説 関敬吾著	日本放送出版協会 1977.2 375、49p；22cm	昔話	KG745-86 YZ-388.1-セキ
245		花咲翁の源流 伊藤清司著	ジャパン・パブリッシャーズ 1978.4 262p；20cm	昔話 説話文学	KG745-99 YZ-388.1-イト
246		日本昔話研究集成 2 昔話の発生と伝播 福田晃編	名著出版 1984.4 415p；22cm	昔話	KG745-167 YZ-388.1-ニホ
247		昔話の変容：異形異類話の生成と伝播 服部邦夫著	青弓社 1989.3 182p；20cm	昔話	KG745-E16 YZ-388.1-ハツ
248		日本民間伝承の源流：日本基層文化の探求 君島久子編	小学館 1989.4 590、6p；22cm	昔話 神話－日本民間伝承	KG745-E17 YZ-388.1-キミ
249		日中昔話伝承の現在 野村純一、劉守華編	勉誠社 1996.1 381p；22cm	昔話 昔話－中国民間伝承	KG745-G7 YZ-388.1-ノム
250		昔話の伝承世界：その歴史的展開と伝播 武田正著	岩田書院 1996.3 377p；22cm	昔話	KG745-G15 YZ-388.1-タケ
251		神語り・昔語りの伝承世界 福田晃著	第一書房 1997.2 373p；20cm	説話 昔話 口承文学	KG745-G31 YZ-388.1-フク
252		金太郎の誕生 鳥居フミ子著	勉誠出版 2002.1 209p；20cm	伝説－日本	KG745-G110 YZ-388.1-トリ
3. 日本昔話文献目録(3) 研究書 ②古典文学との比較研究					
253	※	昔話と文学 柳田国男著	創元社 1938 342p；18cm		750-184 (なし)
254		柳田国男全集 第9巻 昔話と文学 ほか 柳田国男著	筑摩書房 1998.6 686p；22cm	民俗学	GD1-G83 YZ-380-ヤナ

No.	No.2 記載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
255	※	物語文学史論 三谷栄一著	有精堂出版 1952 479p ; 19cm	物語文学	913.3-M535m (なし)
256		物語文学史論 三谷栄一著 新訂版	有精堂出版 1965 518p ; 22cm	物語文学	913.3-M535m-(s) (なし)
257	※	お伽草子と民間文芸 大島建彦著	岩崎美術社 1967 207、8p 図版 ; 19cm	御伽草子 昔話	913.49-O819o YZ-913.4- オオ
258	※	桃太郎像の変容 滑川道夫著	東京書籍 1981.3 622p 図版12枚 ; 22cm	児童文化 児童文学－歴史	KG745-132 YZ-388.1- ナメ
259	※	中世伝承文学の諸相 美濃部重克著	和泉書院 1988.8 336p ; 22cm	口承文学 日本文学－歴史－中世	KG121-E4 YZ-913.4- ミノ
260	※	浦島太郎の文学史：恋愛小説の発生 三浦佑之著	五柳書院 1989.11 222p ; 20cm	伝説－日本	KG745-E24 YZ-388.1- ミウ
261	※	日本昔話通観 研究篇2 日本昔話と古典 稲田浩二責任編集	同朋舎 1998.3 735、168p ; 23cm	昔話	KH22-341 YZ-388.1- イナ
262	※	江戸期昔話絵本の研究と資料 内ヶ崎有里子著	三弥井書店 1999.2 552p ; 22cm	草双紙 昔話	KG241-G5 YZ-913.5- ウチ
263		日本昔話研究集成 5昔話と文学 野村純一編	名著出版 1984.1 417p ; 22cm	昔話	KG745-167 YZ-388.1- ニホ
264		伝承文芸の研究：口語りと語り物 岩瀬博著	三弥井書店 1990.3 466p ; 22cm	口承文芸 昔話	KG736-E1 YZ-388.1- イフ
265		浦島伝説の研究 林晃平著	おうふう 2001.2 500p ; 22cm	伝説－日本	KG745-G100 YZ-388.1- ハヤ
3. 日本昔話文献目録（3）研究書 ③意味論（心理学的・社会的・思想史的解釈）					
266	※	下剋上の文学 佐竹昭広著	筑摩書房 1967 263p 図版 ; 20cm	日本文学－歴史－中世	910.245-Sa753g (なし)
267	※	民話の思想 佐竹昭広著	平凡社 1973 260p ; 20cm	昔話	KG745-37 YZ-388.1- サタ
268	※	昔話と日本人の心 河合隼雄著	岩波書店 1982.2 371、7p ; 19cm	昔話	KG745-139 YZ-388.1- カワ
269		鬼むかし：昔話の世界 五来重著	角川書店 1984.12 250p ; 20cm	昔話	KG745-178 YZ-388.1- ゴラ
270		鬼むかし：昔話の世界 五来重著 角川選書209	角川書店 1991.1 252p ; 19cm	昔話 鬼神	KG745-E28 YZ-388.1- ゴラ
3. 日本昔話文献目録（3）研究書 ④構造論（昔話の形態や構造の分析）					
271	※	昔話と人格発達：コード分析試論 荒木正見著	九州大学出版会 1985.4 265p ; 19cm	昔話	KG745-181 YZ-388.1- アラ
272	※	説話の宇宙 小松和彦著	人文書院 1987.11 204p ; 20cm	昔話	KG745-E5 YZ-388- コマ

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
273	※	昔話のコスモロジー：ひとと動物との婚姻譚 小沢俊夫〔著〕 講談社学術文庫	講談社 1994.10 263p；15cm	昔話 動物－文学上	KE178-E41 YZ-388-オザ
274		日本昔話研究集成 4 昔話の形態 福田晃編	名著出版 1984.12 488p；22cm	昔話	KG745-167 YZ-388.1-ニホ
275		日本昔話研究集成 1 昔話研究の課題 小松和彦編	名著出版 1985.6 540p；22cm	昔話	KG745-167 YZ-388.1-ニホ
276		日本昔話の構造と語り手 川森博司著	大阪大学出版会 2000.2 290p；22cm	昔話	KG745-G92 YZ-388.1-カワ
277		人格発達と癒し：昔話解釈・夢解釈 荒木正見著	ナカニシヤ出版 2002.3 190p；20cm	発達心理学 昔話 夢	SB151-G103 YZ-388.1-アラ
3. 日本昔話文献目録（3）研究書 ⑤語り口の分析、伝承者論					
278	※	昔話ノート：採集と研究 水沢謙一著	野島出版 1969 334p 図版；22cm	昔話－新潟県	KG745-10 YZ-388.14-ミズ
279	※	語りの世界	語り手たちの会 1985- 21cm 年2回刊 所蔵：1号（1985）-		Z12-974 （一部所蔵）
280	※	かたり手・きき手：現代かたりへの すすめ 川島保徳著	ふるさと企画 1987.10 105p；19cm		（なし） （なし）
281		咄の伝承 大島建彦著	岩崎美術社 1970 239p 図版；19cm	説話	KG745-8 （なし）
282		昔話世界の成立：昔話研究序説 武田正著	三弥井書店 1979.1 309p；19cm	昔話	KG745-113 YZ-388.1-タケ
283		昔話の語り手 野村純一編	法政大学出版局 1983.12 254p；20cm	昔話	GD43-35 YZ-388.1-ノム
284		昔話伝承の研究 野村純一著	同朋舎出版 1984.7 714p；22cm	昔話	KG745-180 YZ-388-ノム
285		日本昔話研究集成 3昔話と民俗 野村純一編	名著出版 1984.8 437p；22cm	昔話	KG745-167 YZ-388.1-ニホ
286		日本昔話の伝承構造 武田正著	名著出版 1992.5 427、11p；22cm	昔話 口承文学	KG745-E58 YZ-388.1-タケ
287		昔話の現象学：語り手と聞き手のつ くる昔話世界 武田正著	岩田書院 1993.8 386p；22cm	昔話	KG745-E71 YZ-388.1-タケ
288		昔話の語りと変容 武田正著	岩田書院 2001.9 364p；22cm	昔話 口承文学	KG745-G99 YZ-388.1-タケ

No.	No.2 収載	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
3. 日本昔話文献目録(3) 研究書 ⑥機能論(民俗社会における意味、子どもにとっての意味)					
289	※	福子の伝承：民俗学と地域福祉の接点から 大野智也、芝正夫著	堺屋図書 1983.7 206p；19cm	身体障害者福祉 精神障害者福祉	EG61-301 (なし)
290	※	異人論：民俗社会の心性 小松和彦著	青土社 1985.7 267p；20cm	民俗学 外国人	G121-164 (なし)
291	※	昔話が語る子どもの姿 小澤俊夫著	古今社 1998.9 203p；20cm	昔話	KE178-G22 YZ-388-オザ
292	※	現代民話考.1-12 松谷みよ子(著)	立風書房 1985.8-1996.5 20cm	昔話、笑話	KG745-189 (なし)
293		現代民話考.1-12 松谷みよ子著 ちくま文庫	筑摩書房 2003.4-2004.3 15cm	昔話 ほか	KG745-H7ほか YZ-388.1-マツ
294	※	学校の怪談：口承文芸の展開と諸相 常光徹著	ミネルヴァ書房 1993.2 403p；20cm	怪談 迷信	KG745-E63 YZ-388.1-ツネ
295	※	日本の世間話 野村純一著	東京書籍 1995.2 269p；19cm	昔話 伝説	KG745-E81 YZ-388.1-ノム
296	※	靈感少女論 近藤雅樹著	河出書房新社 1997.7 253p；20cm	民俗学 心霊研究 怪談	GD1-G73 YZ-147-コン
297		神々の精神史 小松和彦著	伝統と現代社 1978.5 309p；20cm	昔話 伝説－日本民族学	KG745-101 YZ-380－コマ
298		昔話漂泊：語りから見えるもの 武田正著	置賜民俗学会 1994.6 323p；19cm	昔話 口承文学	KG745-G103 YZ-388.1-タケ
3. 日本昔話文献目録(3) 研究書 ⑦再話・翻案・再創造に関する研究					
299	※	日本口演童話史 内山憲尚編	文化書房博文社 1972 363p；22cm	童話 昔話 児童文学－歴史	KG411-12 YZ-015.3-ウチ
300	※	落穂ひろい：日本の子どもの文化をめぐる人びと 瀬田貞二著	福音館書店 1982.4 2冊；22cm	児童文学－歴史 児童文化－歴史	KG411-71 YZ-910-セタ
301	※	紙芝居の歴史 上地ちづ子著	久山社 1997.2 115p；21cm	紙芝居－歴史	KD871-G8 YZ-779-カミ
302	※	昔話と語りの現在 櫻井美紀著	久山社 1998.10 104p；21cm	昔話	KG745-G45 YZ-388.1-サク
303		紙芝居：選び方・生かし方 上地ちづ子、児童図書館研究会共編 著	児童図書館研究会 1999.5 88p；19×26cm	紙芝居	UL577-G4 YZ-779-カミ
3. 日本昔話文献目録(3) 研究書 ⑧今日的伝承に関する実践研究					
304	※	子どもと読書 親子読書・地域文庫全国連絡会編	親子読書・地域文庫全国連絡会1983- 隔月刊 所蔵：149号(1983.4)－ 「親子読書」1971-1983の改題		Z21-331 (一部所蔵)

No.	No.2 収録	書名/著者名/版表示/シリーズ名	出版事項/形態/注記	件名	請求記号*
305	※	昔話絵本を考える 松岡享子著	日本エディタースクール出版部 1985.12 132p；21cm	絵本 昔話 児童文学	UG71-60 (なし)
306		昔話絵本を考える 松岡享子著 新装版	日本エディタースクール出版部 2002.11 136p；20cm	絵本 昔話	UG71-H8 YZ-388-マツ
307	※	子どもに語りを 桜井美紀著	椋の木社 1986.11 256p；20cm	ストーリーテリング	FC32-E10 (なし)
308		語り：豊饒の世界へ（語りの入門講座： 理論篇） 片岡輝、桜井美紀著	萌文社 1998.10 255p；21cm	口承文学	KE178-G31 YZ-015.3-カタ
309		昔話と昔話絵本の世界 藤本朝巳著	日本エディタースクール出版部 2000.9 274p；20cm	昔話 絵本	KE178-G35 YZ-388-フジ
310		昔話と昔話絵本の世界 藤本朝巳著 新装版	日本エディタースクール出版部 2005.9 274p；19cm	昔話 絵本	KE178-H25 YZ-388-フジ
311		昔話と昔話絵本の世界展 世田谷文学館編	世田谷文学館 2002.7 63p；26cm	絵本 昔話	UG71-H11 YZ-388-ムカ
3. 日本昔話文献目録（3）研究書 ㊦論文集					
312	※	昔話：研究と資料 日本昔話学会編	三弥井書店 1972- 22cm 年刊 所蔵：1号（昭47.6）-		Z13-1315 YZ-388ムカ
313		民間説話の研究：日本と世界関敬吾 博士米寿記念論文集 大林太良（ほか）編	同朋舎出版 1987.8 396p；22cm	説話	KE178-47 YZ-388-オオ
314		日本昔話のイメージ.1 白百合女子大学児童文化研究センタ ー研究プロジェクトチーム「日本昔 話のイメージ1」著	古今社 1998.3 267p；21cm	昔話－論文集	KG745-G41 YZ-388.1-オザ
315		昔話のイメージ.2 白百合女子大学児童文化研究センタ ー研究プロジェクトチーム「昔話の イメージ2」著	古今社 1999.3 164p；21cm	昔話－論文集	KG745-G79 YZ-388.1-オザ
316		昔話のイメージ.3 白百合女子大学児童文化研究センタ ー研究プロジェクトチーム「昔話の イメージ」著	昔ばなし研究所 2000.3 216p；21cm	昔話	KG745-G79 YZ-388.1-オザ
317		昔話研究の諸相：小澤俊夫教授喜寿 記念論文集 小澤俊夫教授喜寿記念論文集編集委 員会編	昔話研究土曜会 2007.7 365p；26cm	昔話－日本	KG745-H117 YZ-388.1-ムカ

講師略歴（五十音順）

大島 建彦（おおしま たてひこ）

愛知県出身。東洋大学文学部教授を経て、現在は東洋大学名誉教授。文学博士、日本民俗学専攻。

編著書 『咄の伝承』、『疫神とその周辺』、『ことばの民俗』、『道祖神と地蔵』、『民俗信仰の神々』、『日本の昔話と伝説』、『アンバ大杉の祭り』、『疫神と福神』、『日本昔話事典』、『遊歴雑記』、『アンバ大杉信仰』、『日本の神仏の辞典』、『民俗のかたちとところ』等

小澤 俊夫（おざわ としお）

中国長春生まれ。ドイツ文学者。筑波大学副学長、白百合女子大学教授を歴任。口頭伝承による昔話の研究が専門で、1992年から全国で「昔ばなし大学」を開講している。1998年に小澤昔ばなし研究所を設立。季刊誌『子どもと昔話』を刊行。2007年、ドイツ・ヴァルター・カーン財団のヨーロッパメルヘン賞を受賞。

編著書 『ろばの子：昔話からのメッセージ』、『昔話の語法』、『昔話が語る子どもの姿』、『グリム童話の誕生』等

君島 久子（きみしま ひさこ）

栃木県生まれ。国立民族学博物館名誉教授。中国・中央民族大学、雲南大学名誉教授。中国諸民族の民間伝承を調査研究。中国児童文学研究会代表。産経児童出版文化賞、日本翻訳文化賞他を受賞。

編著書 『日本民間伝承の源流』、『東アジアの創世神話』、『「王さまと九人の兄弟」の世界』等
訳書 『西遊記』、『白いりゅう黒いりゅう』、『中国女神の宇宙』等

武田 正（たけだ ただし）

山形県生まれ。筑波大学教授を経て、現在は山形短期大学名誉教授。山形短期大学に「山形短期大学民話研究センター」を設立。斎藤茂吉文化賞、文部省地域文化功労賞を受賞。

編著書 『佐藤家の昔話』、『雪国の語部』、『日本昔話の伝承構造』、『子どものフォークロア』等

Japanese folk tales
Transcript of the ILCL Lecture Series on
Children's Literature, 2008
Contents

Foreword	Yukiko Saito	3
Introductory Notes			4
Japanese Folk Tales and the Style of Their Narrative ...	Toshio Ozawa	6
Children's Maturity in Japanese Folk Tales	Toshio Ozawa	17
Various Types of the Japanese Tom Thumb Story: <i>Issunboshi</i>	Tatehiko Oshima	30
Japanese Folk Tales from One Generation to the Next	Tadashi Takeda	57
Folk Tales in Japan and Other Asian Countries	Hisako Kimishima	71
Reference Books on Japanese Folk Tales — From the ILCL collections	Hiroko Ishiwatari	89
About the Speakers			131

平成 20 年度国際子ども図書館
児童文学連続講座講義録「日本の昔話」

平成 21 年 10 月 1 日 発行

編集・発行 国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007 東京都台東区上野公園 12-49
電話 03-3827-2053 FAX 03-3827-2043

印刷 株式会社 丸井工文社
〒107-0062 東京都港区南青山 7-1-5

I S B N 9 7 8 - 4 - 8 7 5 8 2 - 6 8 9 - 7

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。本誌のPDF版を国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) でご覧いただけます。なお、訂正があった場合は、ホームページ上に掲載いたします。

